
その瞳の色

alice

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その瞳の色

【Nコード】

N4433S

【作者名】

alice

【あらすじ】

破壊する者…そもそもその者は生れ落ちた時よりの破壊者だったのだろうか？それとも時間と共に破壊者に成るのか…。

ドラゴン、エルフ、ウルフ、マーメイド・・・

ドラゴンの治める王国…太古の昔に人間と契りを交わして以来太古の生き物達は時代に合わせるようにその姿もまた人間へと合わせた。生き残った純粹なるドラゴン…その数は極端に減り王国では国王一族、そして元老院、騎士団神によって定められた者たちが法に従い

人間の姿を纏い人々にも「ドラゴンである。」と言つ記憶の中の物
だけとなっていた・・・

エピソード

エピソード：守る者・破壊する者

破壊する者…そもそもその者は生れ落ちた時よりの破壊者だったのだらうか？それとも時間と共に破壊者に成るのか…。

時はアラン国王の時代、国は長かった戦いの日々を乗り越えようやく手に入れたつかの間の平和な日々を過ごしていた。

長い冬が過ぎ期待に満ちた新緑の時、それは五月の頃であつた…王国では宝石のような新緑が芽吹きアラン国王の御嫡子が御生れになり人々は喜びの初夏の祝祭を迎えていた。国は、人々はやっと手に入れた平和・長い戦乱の世を越え冬が終わり初春を心から喜んでいたのである。

…平和…しかし、しかし…それは突然何の前触れもなく崩れていったのである…。

黒き影は…影は静かに誰に知られることもなく破壊者へと変貌し王国を再び暗黒の時代に貶める為に訪れた…。

生まれたばかりの赤子を手に抱き輝ける将来を誓うアラン国王その背後に近づいてくる黒き影。

コンコン…。

「誰だ？」

「王、私です。お呼びになられましたか？」

「ああ、お前か…入れ。」

国王に招かれ影はそつと櫺の扉を引き静かに心の嵐など全く無いかのように顔には微笑みという仮面をかぶりにこやかに王の私室にゆ

つくりと入室する…

「失礼いたします。国王お呼びになられましたか？」

国王は笑顔でその者を迎え入れた。

「ああ・・・待っていたぞ。見てくれ我が子だ。」産まれたばかりの我が子をそつと抱き上げよく顔を見せようとしながら危なっかしげに赤子を手渡す国王

「レイラに似て美しい顔をしておるであろう？」その顔は幸せに満ちた微笑を浮かべている。

まるで羽毛に包まれた宝物を危なっかしげに受け取るようにして抱き寄せ顔を覗き込む。

「確かにレイラ様に似て美しい顔立ちと陶器の様に滑らかな肌をされていらつしやる…。」

「王はもう既に姫君にぞつこんでいらつしやるのですよ（笑）今からこの調子では将来が思いやられますな」

「ハハハ・・・確かにそうだな・・・お名前は？もうお決まりになられたのですか？」

「ああ・・・もう決めておる・・・ローズだ・・・」

「そうですか・・・ローズ愛らしい名ですね・・・」

「瞳の色は何色だろうなあ・・・レイラに似ているから同じ色に成るであろうか？それとも私に似るであろうか？」ローズを覗き込みその愛らしい顔に満面の笑みを向ける国王。

「そして・・・」話を続けようとする国王を遮り影は話し出す。

「そうですね・・・成長が楽しみだ・・・しかし国王、残念ながらあなたがその美しい瞳や楽しい成長を見ることは出来ないでしょう・・・」

・・・一瞬の空白・・・その場に居た者たちはその意味が飲み込めず問いかける顔をその者に向けた・・・

「なに？それはどういう意味だ？？」国王は意味が分らず微笑みながらその意味を尋ねた。

「そうですね・・・分るはずもない・・・」影はうつすらと微笑みながら口

―ズをそつとベットに寝かせると振り向きゆつくりと唇を動かす・
・そつとささやく

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

国王には声が聞こえずなおも尋ねるようになおも微笑みながらその者の顔を見つめる・・・

・・・影は静かに剣を抜きその様を見つめ思案顔の国王に剣を向ける・・・

小さなささやくような声で再度ささやく

「・・・・・・・・・・・・・・・・」ゆつくりと国王に向かって一歩二歩微笑を浮かべ近づく、そして最後距離を一気に走り、驚愕している国王の胸の中に飛び込む…剣を立てて・・・

「な・なぜ??・・・」国王は胸の中に居る影の姿に驚き、突然襲ってきた痛みで呻く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」影は再度その声が確実に聞こえるように国王の耳元でささやく。そしてその瞳に力を込め一気に剣を引き抜く・・・

「こ、国王!…な・何故!? 血迷ったか!」国王を護らんとする者と命を奪おうとする者との激しい戦いが始まった・・・

影は自分にもたれ掛る国王を容赦なく突き飛ばしすばやく剣を引き抜き向かってくる守護者に対峙する

「ガキイーン!」剣と剣が激しくぶつかり合う!

影に致命傷を負わされ浅い息をしながら国王は窓枠に凭れ傍のカーテンを引つ張り刺された胸に恐る恐る手を当てその場に力なく崩れ落ちる・・・自分の手のひらを赤く染める血をじっと見つめ

呟く・・・「なぜ…」

「国王!今の内にお逃げ下さい!!」守護者は影との戦いの中集中力を切らさずに国王を見て叫ぶ。

「お早く!」守護者は影の予想以上の力に驚き影の目を見ながら叫ぶ。国王は胸を押さえ浅い息をし、我が子の元へと近づき子の手を握る・・・

「クソッ」ギリリと齒ぎしりをしながら影をにらむ。

「ニヤリッ」と守護者を見やり更に押し返す刀に力を込める・・・
「ガキイイン」激しくぶつかりあいお互いを押しやる。

二人は間合いを取り、互いを睨み剣を握る手に力を込める。

守護者はチラリと国王を見やり時間を稼ごうと影に話しかける。

「何故！何故この様な事を！！」

影は剣の構えを下ろしニヤリと笑う・・・その一瞬の隙を突いて国王が影に走り寄りその剣を握る腕を掴む・・・そして背後に回りその剣を影の咽元に当てながら叫ぶ・・・

「早く我が子を連れて逃げよ！我はもうもたぬ！！」「頼む・・・早く我が子だけでも連れて逃げるのだ！」影はそれを予測していた様にニヤリと笑い自分を掴む国王の腕を力一杯握り国王の胸に肘を食い込ませる・・・

「グエ・・・」力なく国王は崩れ落ちる・・・しかし王は崩れ落ちたが影の剣を握る腕を離さなかった

国王を見やり薄く微笑む影・・・

「ご安心を・・・あなたが死んでもローズには手を出しませんよ・・・」優しいとも取れる眼差しを口

ーズに向け微笑む「この子にはまだ別の大きな役目があるのだから・・・」

「なに？おのれ！！」王は最後の力を振り絞り絞るように剣を抜き影に襲い掛かり斬りつけた！！

「クッ」影はたじろぎ王を突き放そうとするが王は最後の力を振り絞り影を羽交い絞めにして叫ぶ！

「早く・・・我が子を頼む！連れて逃げるのだ！」

「しかし・・・」守護者は王と赤子を見やり戸惑いを見せる・・・
「離せ！！死に損ないめ！クソッ！！」「ハハハッそんな事をしても結果は変わらんぞ！！」影は狂ったように笑う・・・

「クソ！」国王と赤子を見やり駆け出す守護者

「逃げられると思うのか？」

「！！！！！！」

「グアアー！！！！」

「！！！！」

「ガシャーン！！！！」

「な！何事だ！？」叫び声と何かの割れる音に塔の門の護衛兵達が叫ぶ！

「誰か！！」「誰か居らぬか！！」

何かが壊れる大きな物音と悲痛に満ちた叫び声が暗闇のこだました。

「南の塔だ！早くしろ！！」叫ぶ声と大勢の人が階段を駆け上がったくる音がする・・・

「バターン」激しく扉が開く。

「な、何事ですか？」「ダ・ダーニス様！」

「・・・」兵士の姿に驚き目を見張りがつくりと膝をつき震える指でベット傍の真紅の布の塊を指差す。

布の塊からは生々しい鮮血がゆっくりと石の床に広がっていく・・・
「ま、まさか・・・」衛兵はそっと布の塊に近づき驚きの声を上げる・・・

「アラン様！！」兵士はとつさに駆け寄り抱き起こそうとする。

「やめろ！誰も兄上に触れるな！！」その様子を生気のない瞳で見つめていたダーニスはハッとして叫ぶ。

衛兵はハッとして国王に伸ばしていた手を止め蒼白な顔をダーニスに向ける・・・

「ダーニス様・・・」「一体、一体何事が？？」悲しみに顔を歪めか細い声で呟く...

「騎士団長だ！奴が兄上を！！窓から逃げた！！早く追うんだ！！」
斬られた肩をかばい、毒を吐き出すように叫ぶ。

「はっ、直ちにっ！」

いつせいに部屋から駆け出していく兵士達・・・

「騎士団長だ！！！！」「騎士団長様を探し出せー！！」「まだ遠くには行けまい！」「南の塔の真下だ探しだせ！！」「城門を閉める

「！！」

多くの指示が矢継ぎ早に出され静かだった城中は蜂の巣をつついたような騒ぎになった・・・兵士が出て行った後の静かな部屋で気が狂ったようにしゃがみこみ血の付いた両の手で顔を覆いブツブツとうなるダーニス・・・

「ダーニス様・・・」駆けつけた召使がそつと触れようとする

「あッ！！ダーニス様血が・・・」

ダーニスの肩から胸にかけて斜めに斬られ血が滲み出てきていた・・・

ダーニスは気が狂ったかのように何事かを呟き顔を両の手で覆っていた・・・

「ダーニス様血が・・・お怪我を？早く止血されなくてはお手当てを・・・」

ダーニスにそつと召使が触れると

ダーニスはハツとし我に返ったように叫びだした。

「子供は！？兄上のお子は何処だ！！ローズは・・・」辺りを見回し傷の痛みなど感じないようにベツトに転げる様に駆け寄り手荒くブランケットをめくり上げ叫ぶ

「何処だ！」狂ったように辺りを見回し更に叫ぶ・・・

「畜生！！攫われた！あいつに攫われたんだ！！」絶叫し、力が抜け膝を付く。

「で、殿下、姫君はご無事です！こちらに・・・」召使が別の天蓋の掛かるベツトより抱き上げダーニスの元に駆け寄り手渡す。

「ダーニス様こちらに・・・」びつくと驚き血に濡れた顔を上げ召使よりローズを受け抱き上げる。

「あ、ああご無事であったか・・・ああ・・・神よ・・・良かった・・・」一気に安堵の顔を見せ赤子を抱き締めその顔をじつと見つめる・・・しかしホツとして痛みに気が付いたのか肩を押さえうつと呻く。

「ウツツ！」

「殿下、お早く傷のお手当てを・・・」

「ああ・・・この子を、ローズを頼む。乳母を呼び厳重に警備を付ける

んだ。」再度ローズをベットに寝かしつけ召使に命令しダーニスは俯く・・・

「かしこまりました。ローズ様・・・殿下傷の手当は・・・」

「そうだな、医師を呼んでくれ。」

「かしこまりました。」

召使が部屋から慌てて出て行き室内は静寂に包まれた・・・

ダーニスは溜め息をつき俯く…そつと血溜り中に横たわる今や何も語らなくなってしまった兄の元に屈み込み痛む肩を抑えて兄を支えベットに横たえると力尽きた様にがっくりとベット脇に膝をつきうつむく・・・

「兄上・・・」

…すると彼の背後よりそつと忍び寄るものの気配を感じ、振り返る・・・

「スキアーお前か？」

「此处に・・・」

「彼に報告を頼む。」

「全てをお話しても？」

「構わん。私からも後ほど報告すると伝えてくれ。」

「御意。」

その者は煙のようにドアの暗闇に消えていった・・・

ダーニスは溜め息をつきフラフラと入り口に向かい臣下を呼びつけた。

「元老院を召集しすぐに王座の間に来るように」と言いつけ手近のソファに崩れ落ちるように倒れこむ。彼の心は千々に乱れ一つの事を考える事が出来そうになかった・・・王を失ったこの国、騎士団長の謀反、今日は喜びに満ち溢れる日となったのに何故・・・ダーニスはそつと呟く・・・

「ローズ…可哀相な子だ自分の誕生日が父親の命日となるとは・・・」

三年後（仮）（前書き）

国王が暗殺され三年が過ぎた…

首都セルシアナより遠く離れた北に位置する小さな山間の町カービ

リンで一人の少年が暖かいベットで毛布に包まり寝返りを打った・

・

三年後（仮）

アラン国王が亡くなり王国を襲った悲劇の日から時は過ぎ三年がたった・・・

都から遠く離れた北の町、カービリンで一人の少年が暖かいベットの中でまどろみ、寝返りを打った・・・

クロス・クロス・・・

誰かに優しく呼びかけられる夢を見た。「誰？」「母さんなの？」

クロス・クロス・・・

「クロス！！」

強く揺さぶられクロスは目を覚ました。

「クロス！目が覚めたか？」「中々起きないからどうしようかと思つたよ…眠たいだろうけど起きて支度をして、父さんの仕事の都合で急いで行かなくては・・・」

クロスはまだはつきりしない目をこすりながら自分を起こした人をゆっくりと見上げる。

「兄ちゃん？母さん？もう朝？？」

「寝ぼけてるの？さあ、早くこれに着替えて支度して」

クロスを起こしたのは5歳離れた兄リスターである。リスターは8歳になって半年が過ぎていた。リスターは父に似て色の薄い金髪に日中は明るく輝く青夜には濃紺の様に見える瞳を持っていた。

初夏が近づいているとはいえ北に位置するこの辺りはまだ夜はひんやりと肌寒い。そんな中クロスは夢つつのまま言われたとおりゆっくりと着替え始めた。

「一人でも出来るな？兄ちゃんは他にやらなきゃならない事があるから・・・着替え終わったら下に降りて母さんのところに行け、いいか？」

着替えに一生懸命になりながらクロスは頷いた。

リスターはクロスに優しい微笑を向け頭をひとなですると忙しげに部屋を出て行った・・・8歳にしては弟の面倒見がよくしつかりした兄であった。

一人で何とか着替え終わり兄の言いつけ通り母の元へと階段を降りていくと母サニーは忙しそうにキッチンを行ったり来たりしていた。母サニーは栗色の髪を持ちそれよりも少し濃い色の瞳をした優しい人間であった。

「クロス…起きたのねさあ、寒いからこっちへいらっしやい。」母は少し乱れた前髪をそつとかき上げながら優しく微笑むとまとめた荷物の中からマグカップを取り出し暖めてあったミルクをそつと注ぎクロスに手渡した。

「熱いから気をつけてね、こぼさない様にね。」

クロスは眠い目を擦りながらコクリと頷くと母からミルクを受け取りフーフーしてゆつくりと飲み始めた。

母はそんな様子を見て安心したのかまたキッチンの荷物をまとめだす。

「お父様の急なお仕事の関係で南の町に引っ越すことになったの…辛いでしょうけどお兄ちゃんの言う事を聞いて大人しくしていてね」母はせかせかと動き回りながらクロスに話しかけキッチン荷物をまとめそれが済むと振り返り続ける・・・

「それから…」

見るとクロスはテーブルにうつ伏せになってまた眠ってしまった・・・

「ふう…」溜め息をついて2階に行きクロスのベットよりタオルケットを持って降りてくると優しくクロスを包み込み起こさぬようにそのままにしておいた・・・

トントントントン・・・

階段を急ぎ足で下りてくるリスター

「2階の荷物は殆どまとめ終わったよ！」

「シッー！」

母に言われ少し驚いて見回すと眠っているクロスを見てビックリするとくすつと笑いひそひそと話し出す。

「また眠っちゃったの？しょうがないなーまだまだおちびさんだね。」

「ふふふ、そうね…悪いけどママも手伝うからクロスの荷物もまとめてしまっってくる？」

「それとシシーももうケージに入れてちょうだい、多分あなたの部屋に居ると思うわ。」猫のシシーはクロスの3歳の誕生日に父カージスがプレゼントしたシルバータビーの猫である。クロスのペットだがシシー自身はクロスよりもリスターに懐いていて眠る時はいつもリスターと一緒にであった…

「わかった！他には大丈夫？」

母は微笑みリスターのおでこにキスをした。

「ありがとうリス、終わったらお父様の所を手伝ってあげてちょうだい。」

「うん、わかった。」

行きと違ってこっそりと階段を上がって行く姿を見送って母も荷物を馬車に載せようとせかせかと動き出した…

・・・「さてつと…後はクロスとシシーを積み込むだけか？」カージスは荷物を積み終わった馬車を点検して集まった家族を見回して冗談を言った。父カージスは年齢のわりに逞しい身体とよく日焼けした肌をしていた。髪も瞳の色もリスターと全く一緒である。

「カージスったら…そうね・・・全部積み終わったと思うわ」サニ
ーは夫の冗談に微笑みながら荷馬車から降り、リスターの傍に行く。
・
・

「ぼくクロスを起こしてくるよ、」リスターは母を見上げる。

「ええ、お願いねリス」

任せてと言いながら走ってクロスを呼びに行くリスター…

数分後まだしっかりと目を覚ましていないクロスの手を握り反対側の手にはシシーを入れたケージを抱えながら父と母の元に戻ってきた。

「よし、準備は良いか？忘れ物は無いか？サニー最後の確認を頼むよ。もうこの家には戻ってこないんだからな…」

頷いて明かりの消えた家の中にサニーは確認と戸締りに戻って行った……。

サニーが戻ってくるとカージスは寂しげに家を見上げ

「また引越しか…この土地ともお別れだと思つと別れ難いな…」
話終わってから皆の顔を見回し再度寂しげに家を振り返った。

「1年しか住んでないけど色々あったからね…やっぱり引越しをするときはなんだか寂しいや…」リスターも家をじつと見つめ目を潤ませる……

「そうね…さあいつまでも思い出には浸つてられないわ、新しいお家も新しい町にもきつと楽しいことが待ってるでしょう…出発しましょうか」サニーは皆を励ますように明るく話し、リスターの肩を抱き夫を振り返る。

「よし、じゃあ父さんが前の馬車に乗るからリスとクロスはお母さんと一緒に後ろの馬車に乗りなさい。」「出発だ……」

父の号令と共に皆馬車に乗り込みゆつくりと2台の馬車はまだ月明かりの差す暗い闇の中へ新しい町に向かうために出発した……

先頭の馬車は着々と目的地に向かって歩みを進めていく……クロスは揺れる馬車の中毛布を敷いた上に横になり籐で出来たケージの中のシシーに大丈夫だよと優しく話しかけ撫でている間にまた眠りの世界に落ちていった……そんなクロスを優しく見守りリスターは馬車を御する母の隣へと移動した……

「母さんクロスまた寝ちゃった…疲れたのかな？ シシーも寝ちゃったみたい。」

「そう、リスは疲れてない？ 大丈夫？ 眠っててもいいのよお母さんは大丈夫だから」母は手綱を握りなおしてリスターを傍に座らせながら話しかけた。

「僕はへっちゃらだよ！ お兄ちゃんだからね！」

「そうね、リスターは立派なお兄ちゃんだわ」母は微笑み息子の肩をたたく。

「へへ、これから行く所はどんな所なの？ 父さんは此処よりもあつたかい所としか教えてくれなかったけど…」少し照れながらこれから住む町へ対しての憧れを込めて母に尋ねた。

「そうね、到着するまで3週間ぐらい掛かるわ…カービンよりもずっと南にあつてきつともう春になっていると思うわ。今までのお家より少し山の中にあつて静かな所らしいわよ…」「旅をしながら春に近づいて行くのよ、春の欠片を見つけたら教えてね」につこりと微笑みリスターを優しく撫でる。

「そうなんだ…ふああ…」母の話を聞きながら眠たくなってきたのか欠伸をするリスター

「リス少し休みなさい、お母さんがしっかりと起きているから…」

「うん…やっぱりちよつと疲れちゃったみたい…」リスターは今度は抵抗せず母にもたれ掛つて目を瞑り暫くすると眠りについた…

一家は新しい町に向かって旅を始めたのである…次の町では腰をすえて根付く事が出来るのであるうか…満月が煌々と暗闇を照らす中馬車は頼りないランプの明かりと星の光の中ゆつくりと歩を進めていった…

カービリンから遠く離れた首都セルシアナ白く美しい王宮の一角でローズは天蓋つきの大きなベットの所で寝返りをうった・・・その顔は穏やかでつぶった瞳の睫毛は長く鼻筋が通り愛らしい唇はピンク色の小さな薔薇の蕾の様であった。

細い寝息を立て何かを呟くように唇が動く様子を見ると何か夢を見ているようだ・・・そんな可愛らしい我が子の寝顔を見つめ安心した母、レイラはローズを起こさないようにそっと部屋を出て行く・・・レイラ王妃は夫であるアラン国王を三年前に亡くした。女帝として実権を握ることを拒否し、王の腹違いの弟ダーニスを執政の宮に任命し、王妃を退いた。ただたった一人の娘ローズ姫の為に母として王国に残ったのである。まだ歳は若く、夫を亡くしたために華が咲くような美貌を損なったが髪は黒くやわらかく波打ちその瞳はブルーベルの様な美しい紫色をしている。

薄暗い廊下を歩きつつレイラは物思いにふける三年前の今日・・・とくに行き先を決めたわけではなく考えながら歩いていくと執政の宮の執務室から光が漏れているのを見つけた。

そっと部屋をのぞくとダーニスが居るのが見え開きかけた扉をノックをする・・・

コンコン・・・

「どうぞ・・・」

「ダーニス・・・まだ起きていらっしたのですか？」レイラは机の上の書類に半ば埋もれる様にして羽ペンを動かしているダーニスを見つけ話かけた・・・ダーニスもレイラと同じく23歳になったばかりであったが苦労しているせいか赤茶の髪には白いものが若干見受けられ、髪と同じ赤茶の瞳の下にはクマが出ていた。

「ああ・・・レイラ・・・」机から顔を上げて部屋に入ってきた人を見つめ溜め息混じりに笑った。疲れ切っているにもかかわらず微笑む顔に

は目尻に小さな皺が見受けられた。

「君こそこんな時間にどうしたんだい？眠れないのか？」笑いながらレイラを見上げる。

「いいえ…今日は…ちょうどこの位の時間だったから…口
ズの様子を見てきただけよ。」

「ああ…そうかすまない…今日は兄上がお亡くなりになられて
3年だったね…忘れた訳ではないよ、明日は国民を集めて喪を行な
うが…仕事に没頭していて考え無しに言ってしまったんだすまない
…大丈夫かい？」ダーニスは立ち上がり入り口でうつむいて立つて
いるレイラの元まで行くと手を取りソファに座らせ手を握りレイラ
の顔を覗き込む。

「いいえ謝らないで下さい…あの日の事を考えると眠る事なん
て…あの日、あの時、もしも私がしっかりしていたら！って考える
とじつとしていられなくなってしまうんです。あの日の事を思い
出すと胸が苦しくて苦しくて…」取り乱し泣き出すレイラの手
を強く握り落ち着かせようと髪を撫でダーニスは呟く…

「申し訳ない…私があやつの企みに気付いていたら…私がつと早
く、そして強くあれば…レイラすまない許してくれ…」ダーニスも
あの日の事を思い出したのか瞳を潤ませレイラを見つめる…

「いいえ！！貴方には何の罪もありません！！貴方はアランとロー
ズを救うために最善を尽して下さったのに…申し訳ありません…
私はそんな事を言いたいのではないのです。貴方には心から感謝し
ています。」ダーニスの頬に手を沿えその琥珀色の瞳を見つめレイ
ラは涙する…

暫く2人は思い出に涙し、見詰め合うそしてダーニスは自分の頬に
触れるレイラの手を握り藤色の瞳を見つめそつと身を乗り出してレ
イラの頬にキスをする…

「止めて下さい！…」びっくりしてレイラは立ち上がりダーニ
スに背を向ける。

「すまない…ただ貴女に泣いて欲しくなかったのです…」ダー

二スはレイラの背中を見つめ弁解気味で早口で話す・・・

「解っております。少し驚いてしまつて…今日はこれで失礼いたします。明日は早くから式典がありますから・・・」レイラも早口に話すと大した事はないと言う様に振り返り頭を下げ笑つて見せる。

「そうですね…明日は早い、私ももう仕事を終えてベットに向います。」ダーニスも立ち上がり何事も無かつたかのようにいつもの様に笑つとレイラの手を取つてドアへと導く。

「遅くに失礼しました。お休みなさいダーニス…」

「お休みレイラ…お一人で大丈夫ですか？供を呼びましょうか？」薄暗い廊下を見て少し心配になりレイラに尋ねる・・・

「部屋まで直ぐですから一人でも大丈夫です」にこりと笑つて再びお休みと言つて背を向け歩き出した。

暫くその後姿を暫く見送つてダーニスも執務室へ戻り机ではなくソファに座り込む…物思いに耽り呟く…

「三年か…」立ち上がると机の傍に垂れ下がる従者を呼ぶ紐を引きやつて来た従者にワインを持ってこさせると一人で飲み始めた・・・

「三年か・・・長い様で短い・・・」呟くと瞳を閉じソファに横になつて眠つてしまつた・・・

誓（仮）前編

アラン国王が崩御されてから5年がたち首都セルシアナではまた美しい五月の新緑を迎えていた・・・

王宮では王女のローズが今日5歳の誕生日を迎え5年間の間執政の宮として王国を支えてきたダーニスは正式な国王になるべく同じく今日、戴冠の儀を迎えていた。

王国は喜ばしいセレモニーの準備を進めていた・・・国民は祝祭に浮かれ娘達は美しく着飾り子供達は浮かれて遊び、男達は早くから酒を飲み女達はそんな男達を見ながら忙しく立ち回り家々は美しい花で飾られメイン通りには沢山の露天が出て記念品や花を売っていた。

王宮では近隣の国々からの貴賓達を出迎えるため執政の宮とレイラ王妃は謁見の間で忙しく立ち回っていた。賑やかな一廓より離れた南の塔ではお披露目の為に準備を済ませ大きな鏡台の前に座り自分自身を覗き込むローズが居た。

トントントン・・・

「そんなに見つめなくとも十分お綺麗ですよ。」入り口に佇む一人の青年が居た。

「ステラ！」扉に寄りかかり優しく見つめる者にローズは喜び駆け寄った。

「大きくなりましたな…ローズ様もついに目覚めの日を迎えられましたか…」抱きついて来たローズを目の高さに抱き上げ成長した姿を見つめる。

「ステラ会いたかったわ、中々会いに来て下さらなかったから私も母も寂しかったわ！」ステラの首に抱きつき肩に顔をうずめる。

「エルフの国王様の言いつけで世界中を旅している身分ですからそう簡単にはこちらに顔を出せないのですよ…」ステラと呼ばれる者はローズを抱きしめ優しく話しかける・・・

「しかしローズ様私の名はステラではないと何度も申しておりますに…」困惑した表情を浮かべるがからかっている表情にも取れる。

「貴方はアステリ（星）に見えるもの…」ローズも笑いステラの輝くプラチナブロンドの髪を一房摘み上げた・・・

「私はエルフですからね、ローズ様は他のエルフ族をご存じないから私をアステリと思われるでしょう…」さしずめ私は流れ星メテオロンですね…」少し真顔になってローズを見つめるステラ・・・

「メテオロンなんて言い難いしステラの方が似合ってる！」

「お好きなように呼んで下さい…本当に大きくなられて最後にお会いしたのは貴方が4歳の頃でしたか、まだ覚醒の前でしたから今日お会い出来ても忘れられているかとも思いましたよ・・・レイラ様によく似て美しくなれましたね・・・しかしその瞳の色・・・その色は、そして瞳の奥に籠められたモノそれはアラン様の瞳だ・・・」ローズを床におろし手を握りドアへ誘いながら感慨深げに呟くステラ・・・

「ええ、知ってるわ・・・この色、この力これがお父様から頂いたドラゴンの力よ…」立ち止まりステラを見上げ握る手に力を込める・・・

ステラは立ち止まりローズを見つめる「もうご存知でしたか…」

「小さな頃からお母様にずっと聞いていたわ…」貴方の父親はアラン国王、このドラゴンの治めるラ・レーヌ・オジェ王国の国王であり由緒あるブラーシノ（緑）のドラゴンよ』ってね…私の瞳の色これが私の中にドラゴンの血が流れている証拠だって・・・」ローズは床を見つめ自嘲の笑いを含めつつしゃべっていたが最後はいつもの笑顔に戻ってステラを見上げていた。

「そうですね、レイラ様がお話にならない訳が無い・・・それに貴

方は覚醒を終え目覚められた…普通の人間の女の子と違うドラゴン族の唯一のプラーシノだ…」二人は廊下に出てゆつくりと歩きながら話をしている…

「ステラ…教えて欲しいことがあるの…沢山ね…誰も聞けないのよ、貴方しか教えてくれる人が居ない…」幼い少女の顔に戻ってステラを見上げ懇願の表情を浮かべる。

「さて私にお教え出来る事でしたら良いのですが？」困った表情のように見えるがローズにはそれが見せ掛けである事が解っていた・

ローズは辺りを見回し廊下の空き部屋にステラを連れて行き私に教えたことは内緒にしてねとこそそと耳打ちをした…ステラは驚きそしてあらためてローズを見つめ沈黙。

窓辺に歩いていき手すりにもたれ窓の外を見つめる。暫くたってからローズの方を向き自分は床に座りローズを手招きする。

近づいてきたローズに視線で座るように促すと本当に宜しいのですね？深呼吸をしてから静かに語りだした…

…その頃支度が出来たであろうローズを呼びに一人の青年がローズの自室に来ていた…

コンコン…

「ローズ様お迎えに参りました。レイラ様がお呼びです…」

「…ローズ様？」

返事が無いので心配になりドアを開けたがローズの姿が見えず室内へ入り見回すが居ない事に気付き啞然とする…

「フィリオ様！」青年の姿を見つけビックリして隣の部屋から出て

きたローズ付きのメイドが声をかける。

「ローズ様でしたらエルフのステラ様と一緒に行かれたが？」
不思議そうに伝えた。

「エルフ？ステラ？？ああ…あのお方か…有難う、探してみるよ」

フィリオはガツクリして今来た道を振り返り急ぎ足で出て行った・

・

・…知りたかった情報を得て思ったよりも事の重大さを痛感し悩むようにうつむくローズを見てステラは立ち上がり溜め息をつく・

・

「…それを知ってどうなさるおつもりですか？」

ローズも立ち上がり決意をもった瞳でステラを見返し、

「知ったからにはそれを実行するつもりよ…」と力を込めて答える・
・

「そうですか…私には止める事は出来ません…さあそろそろ参りましょう、誰かが心配して探しているかも知れません…」再びローズの手を取り部屋を出ようとした・…

・…ローズ様！ティルニー様！！二人を探して小声で名前を呼ぶものの声がする・…

二人は目を合わせステラはほらねと言わんばかりに片方の眉毛をあげて見せた・…ローズはにっこりと笑ってココよ！とその者を呼び寄せる・…

「こちらでしたか、お部屋にお迎えに行くと昨日お伝えしたじゃないですか！まったく…ティルニー様もちゃんと確認してください！

！「少し息を切らしながら安堵の表情で膝に手をつき怒ってステラに詰め寄る。

「ローズ様とお会いするのがお久しぶりであった故お話をするのに夢中で気付かなかったんだ。」

すまないと詫びるステラをまったく！と言わんばかりに腕を組んで睨むフィリオ。

「其れはそうと久しぶりだな、フィリオ。」「１年で随分立派になり元気そうだな。」嬉しそうにフィリオを見る。

フィリオも久しぶりであるにもかかわらず挨拶を忘れた無礼を思い出し急に姿勢を正しエルフの流儀にのっとり手のひらで胸を押さえ手を差し出す。

ステラも笑ってフィリオの手を握り抱擁を交わす。

「お久しぶりです。ティルニー様ご挨拶が送れて申し訳ありません。

」

笑って挨拶を交わす２人の隣でローズはジッとフィリオを見る・・・ステラの手を引きステラを

見つめ尋ねるように首をかしげる・・・。

ステラもジッとフィリオを見つめて尋ねる。

「フィリオ、お前は幾つになった？」

突然の質問にビックリして答える。「何ですか？突然・・・今年で１７になります。」二人にジッと見つめられ何かを感じて恐る恐る答える。

「そうか・・・１２騎士団には入隊出来たのか？」

「勿論！これでもドラゴン族の端くれですから去年無事入隊式を終えましたよ・・・まあ入隊しましたがあいも変わらず雑用と訓練ばかりです。それとローズ様のおもりかな・・・」先ほどの事を思い出して最後の言葉を付け加えローズにまだ怒ってるんですよとアピールした。

「悪かったわ・・・」溜め息混じりに本当に反省しているのかなあ？と思わせる態度で謝るローズ・・・そのローズの態度を見てフィリオ

は腰に手を当て怒ってるんですよと言わんばかりにローズを見る、その態度にローズも負けてなるものと睨み返す・・・そんな二人を見てステラは暫く考え込みフィリオに質問を重ねる。

「フィリオ、お前の家は由緒ある薔薇色のドラゴンの家系でお前のお父上は騎士団に所属してお爺様は元老院に居られるし、遠い王家との血の繋がりもあるはず・・・おまえの一族はアラン国王に忠誠の誓いを立てているはずだ父上は現状の王国についてなんと言っておる？」

真面目な顔で質問され当惑の表情を浮かべるフィリオ・・・

「・・・ティルニー様・・・そのご質問は現状の王国では答えにくい事も御座います・・・しかし我ら薔薇色のドラゴン族はアラン国王に忠誠を誓いました。私はまだ忠誠の誓いの儀式には参加しておりませんがね・・・少しうつむき加減で答えるフィリオ・・・

「なるほどね・・・」

「ローズ様私はいいと思いますとしか申し上げられませんが・・・」顎に手をやり悩むようにローズを見る・・・

「そうね・・・」少し考え込んでから急に両手を上に挙げフィリオにおんぶしてくれと子供の様にねだった・・・

「急にどうしたのですか？」と尋ねながらもしやがみ込みどうぞと言って背中を向けた・・・

ローズはステラと視線を合わせ一つ頷いてからフィリオの首の一点に人差し指を軽く当て深く息を吸い込み低い声で古語の言葉を呟いた・・・

「汝の本来の姿ロドンクロ（薔薇色）ドラゴンに申す・・・」話し掛けられるとフィリオの身体が硬直した様に動かなくなった・・・
「我プラーシノのドラゴンに永遠の忠誠を要求する・・・神の定めし法に従い如何なる場合にも我を守り・我の命令に背く事無く永遠

の忠誠を求める・・・ロドンク口はドラゴン族の血の誓いを守り王なるドラゴンプラーシノに忠誠を誓わなくてはならぬ・・・汝はこの忠誠の求めに応じるか？」ローズの黒く長い美しい髪は風も無いのにふわりふわりと揺れローズの瞳は輝き周囲には力が満ち、その力に押されたのかステラは一步、二歩と後ろに下がる・・・

ローズに首の一点を押さえられフィリオは身体が石のように固まりその瞳はローズと同じく一点を凝視して輝いている・・・

「御意・・・我ロドンク口は神定めし法に従い血の誓いを守り王であるプラーシノに永遠の忠誠を誓う・・・我がロドンク口はこの血に懸けて我の王ローズを守り命令に背かず忠誠を誓うと誓約する。」

・・・フィリオが忠誠を誓うとローズの触れた首の一点が直視できない程に輝きフィリオは齒を食いしばり呻き声を漏らした・

「我ローズはこの忠誠を受けフィリオに忠誠の証を授ける・・・これにより誓約はなされる・・・」ローズが唱え終わるとフィリオの首の一点は赤く光り指を離すとそこには薔薇色で複雑に絡み合うイバラ、そして中心にはドラゴンの瞑った瞳が描かれていた・・・ローズはその証を指でそつとなぞりホッと息を漏らすとその場に倒れこんでしまった・・・

「殿下！」フィリオは自分の主君となったローズを助け起こし首の激痛に顔を引きつらせる。

ゆっくりとローズの上身を起こし顔を見つめ溜め息をつく・・・

「覚醒されたばかりなのに無茶をなさる・・・」ローズを抱き寄せステラを見上げる・・・

「・・・これが誓約・・・。」

そつと自分の首を触ろうとして躊躇する。今そこは火傷の後の様に高熱を持っていて痛みを伴っていた。

「やめた方が良い。知っているとは思うが其れは逆鱗だ。」

「今触れると瞳の石を持っても覚醒してしまう。」

「瞳は瞑っている。ローズに何かあったり、ローズ以外の誰かが触ると瞳が開き覚醒する。」

「・・・随分とドラゴン族の事をご存知のようで・・・当然でしょうがね。」

「貴方はこの事を、この計画をご存知だったのですか・・・？」呆れた様に聞かれてステラはクスリと笑いフィリオの肩を叩いた。

「まさか！私にドラゴン族の秘密なんてわかる訳ないだろ？」フツと笑い質問をはぐらかし再度肩を叩く・・・

「さあ、各国の皆様がお待ちかねだろう。我らが宝石をお披露目しに行こうじゃないか・・・君も晴れてナイトだ。その事を執政の宮に報告しなくてはな・・・」

ギクリとしてステラを見上げる・・・

「そうだ・・・」

「ティルニー様も一緒に行ってくださいますよね？？避けられない状況であった事を一緒に話してくださいますよね？？」「すぐる様に見上げてくるフィリオをみて微笑み、大丈夫だと背中を叩きさあ行こうと先を促した・・・」

誓（仮）中（前書き）

ローズは5歳になりドラゴンの開眼を迎えた。

古き血は目覚め自身のプラーシノのドラゴンの力を初めて使いフィリオとの誓いの儀式を行なう。

一方執政の宮であつたダーニスは5年間の喪が明けて晴れて国王に成る為戴冠の儀を行なう。その晴れやかな席に貴賓としてのエルフ族・人魚族・ウルフ族の姿は無かつた…しかし予想外の貴賓が訪れ国内は騒然とする…ダーニスは王国をどのような世界に導こうというつもりなのか…

誓（仮）中

大広間には大きな荘厳なる扉がありその奥に王座の間がある。王座の間は広く天井は円形になっており天窓の光が中央の通路を照らしている。その通路の奥、一段高い場所に王座がある。王座から少し離れた所に王座を囲むように通路を挟んで2手に貴賓席が並んでいた。

王座のその後ろにはブラーシノのドラゴンが正面を向きまっすぐに見つめる姿が見事なガラスで描かれていた。瞳には本物の宝石が使われ太陽に照らされるとまるで生きている様にキラキラと瞬いた。

・・・戴冠の儀・ローズのお披露目の式典の時間が迫ってきていた・

「レイラ、ローズは控えの間にもう到着したのであるうか？」客達から少しはなれレイラを供ない王の控えの間に続く扉の前で静か聞いた。

「もう迎えの者を手配しておりますゆえ控えの間にてお披露目の流れ、戴冠式の手順の確認をしております事と思います。」レイラは丁寧述べお辞儀をした。

「・・・」

「レイラ…たとえ私が正式な王になったとてその様な改まった態度は取らないで欲しい。」悲しげにレイラを見てダーニスは溜め息をつく。

「分って欲しい…私とて本意ではないのだ、王国には王が必要なのだ、ローズはまだ幼い。」

「執政の宮では各国に対して強く出る事は出来ないし、侮られるのだ・・・」

「…解っております。貴方様は何度も私に説明してくださいました

もの。」「ですが今日を持って貴方は国王に、私は前妃になるのです。立場は変わります。とても微妙な立場に……」「前妃でありましたローズの母である……貴方様に従う者で無くてはならないのです……」

「レイラは悲しく微笑みダーニスの手を取る。
「解っています……ただ、寂しいものですね……」「忘れないで頂きたい……私にとっては貴方は前妃でもなくローズの母でもない……幼き日、貴方のお国で初めて出会った時と同じレイラ……何の称号も無かった時からの特別な人だという事を……」ダーニスは優しく懇願するようにレイラを見て添えられた手に自分の手を重ね優しく握る。

「……ええ……ただ此からは少し立場が変わります。特に今は各国の来賓が来ております。友達の様に気さくにとは参りません」「どうぞ国王様、控えの間にて戴冠の儀の準備をなさってください。」「レイラはダーニスだけに見えるようにいたずらっぽく微笑むと膝を折り礼をとってダーニスを扉の傍に誘った。

ダーニスをその姿を見て微笑み厳かに頷くと控えの間に入って行った……
レイラはダーニスを見送ると再度大広間を一瞥しローズを探しに行った。

ローズの控えの部屋では儀式を執り行う司祭の助手が最終的な説明を行っていた。

ローズは鏡の前に座り侍女の手によって長い髪を複雑に結わえられ生花と小さな輝くティアラが飾られていた。

コンコン……

「ローズ様レイラ様がお越しです。」「扉の前に控えていた兵士が告げた。

ローズがどうぞと言うのとはば同時にレイラが入ってきた。

「ローズ準備は済んだ？」鏡越しに目が合いレイラが尋ねる。

「お母様！ええ、準備は出来たわ。」ローズは笑ってイスから降りるとレイラの元に行き抱きついた。

「とても可愛らしいわ、ティアラも良く似合っているわね、」

ローズを抱きとめて周囲を見回してレイラはビックリする。

「ティルニー！来ていたの！？それにフィリオも！」レイラは驚いて2人を交互に見る。

名前を呼ばれた者達は一人は笑って一人は申し訳なさそうにレイラを見た。

「レイラ様、相変わらずお美しいですね、本日早々に到着したのですが我らが姫君のお顔を拝見したく思いました…ご挨拶に伺わなくて申し訳ありません。」ステラは胸に手をやりエルフの正式な礼を取った。

「真っ先にローズの元に顔を出すなんて貴方らしいわね、貴方の王様と王妃様はお元気ですか？」レイラもエルフの礼を取りステラと握手を交わし抱擁した。

「ええ、あのお方達は相変わらずお元気でいつも仲良く一緒にいらつしゃいます。」微笑みながら身を離し親しげに語る。

「そうですね…義妹様がお元気でお幸せなのを知る事が出来てホッとしてました。貴方が御使者として来られたという事はお二方はやはりいらつしゃれ無いという事なのですね……。」「少し残念そうに俯きフィリオの方に顔を向ける。

「そなたは何故此处に居るのですか？十二騎士団は正規も見習いも今回の式典で国王に忠誠を誓うはず…そなたもその予定であろう？」レイラに問われたフィリオは当惑してステラとローズに助けを求めようと見つめる。

「？？」レイラもその視線を追ってステラとローズを見る。

「其れが…その、ダーニス様に忠誠の儀を行なうつもりだったのですが…その…。」

「私から話します。」フィリオの前に立ち塞がる様に母の前に立ち真っ直ぐに目を見てローズは臆する様子も無い。

「お母様、フィリオは既に私に忠誠を誓いました。」言い切ってスツキリしたのかローズは微笑んでいる・・・

「え！？貴方に忠誠を誓った？」レイラはオウム返しに繰り返して啞然としている。

「ええ。もう私の力は目覚めていますもの。」笑ってフィリオの下に駆け寄って足に抱きつき母に印を見せてとねだる。

「アツツ！」フィリオの印を見てレイラの顔から血の気が引く・・・

「ね、怒ったりなさらないでしょ？言葉はスラスラ出てきたの。あ、誓約を交わす事がどんな事を起すのかはもう知ってるわ。」母の傍に戻り真顔でローズは話す・・・

「貴方…さすがブラーシノのドラゴンね、母がどうして咎められましよう…私は・・・貴方の事をいつも誇りに思っているのだから…」

「ただ、ダーニスが、国王陛下がこの事をお許しになるとは思えないわ…。ダーニスになんて言ったら良いのかしら・・・」母親として我が子のドラゴンとしての能力の高さを喜びつつも国王に忠誠を誓うべき若きドラゴンがローズに忠誠を誓うという微妙な問題、大きな問題をどのように説明すべきかが解らなかった・・・

「レイラ様、恐れながらフィリオはまだ十二騎士団の見習いに過ぎませんし、以前からもローズ様の子守役でしたからその者を正式なナイトとして任命したとしてもさほど大きな問題にはならないと思われます。」ステラは大丈夫という様に頷く。

「しかし、十二騎士団は全てのものが国王に忠誠を誓うという決まりなのです。其れが今はまだ見習いといえども1人欠けるとは・・・唯でさえダーニス様はブラーシノではないのに国王に成るといいう事が問題視されていますのに…ああ更なる不安の種が国民に撒かれてしまう・・・。」

「レイラ様、本日の式典の際に正式な誓いの儀式がなされるのです

か？」

「いいえ…式典では時間がかかってしまうので形式的なものだけです。式典後日を改めてまずは正式な十二騎士が忠誠を誓います。」

「ならば現状を国民が知る事はないでは？」

「・・・あつ！そうですね！本日の式典で賓客や国民に知られてしまふ心配はありません！」

「そうですね、国王様もとりあえずは体面は保たれますし、フィリオの父上が現役でいられる間は問題はないかと思えます。」ステラは笑ってホツとしている一同を見回す。

「ここは・・・どうでしょう？内密にダーニス様にお話をして先ほどの話を繰り返してお許しを戴くというのは？」小首をかしげレイラを見る。

「ハア…そうですね、そうするしかないでしょう。陛下も準備が整われている頃でしょう。皆で行って状況ををご報告しましょう・・・」

レイラに促され一同はローズの部屋を出て王の控えの間に向かう。道中フィリオだけがうなだれ落ち着かない様子であった。

「・・・ローズ、貴方の力の話は今はまだ伏せて起きましょう。今の時は情勢が不安定です。陛下は唯でさえ色々な問題を抱えていらっしゃるのだから更に不安を煽る様なマネは懸命ではありません。」レイラは立ち止まりローズの目線に合わせ膝を折ると神妙な面持ちで語る。

「解りましたお母様。私もむやみにあの人に私の手の内を見せたいとは思いません。」ローズも真剣な面持ちで頷く。

「ローズ・・・その様な言い方はならないと何度も申したはずですが、あの方は国王であり、貴方の叔父なのですよ！」「礼節をもって接しなくてはなりません。」レイラは立ち上がると厳しい口調でローズを叱る。

「お母様わかっております。あのお方の前、人目の有る所では今ま

でと同じように私は可愛い姪っ子ですわ、安心して下さい。」ローズは微笑むと母の手を握り歩き出すように促した。」

「ハア…唯でさえ母は参っているというのに…貴方を信じていますからね。」

レイラは頭を抑えて溜め息をつくとローズの肩に手をやる。

4人は様々な思いを抱いたまま国王のへ変えの間に着きレイラが扉の前の兵士に取次ぎを頼む。

・・・コンコン・・・

「ダーニス様、レイラ様・ローズ様・ティルニー様・フィリオ殿がお見えです。」

「そうか、通せ。」

「はっ！」

衛兵はどうぞと恭しく扉を開けて4人を室内に招く。

国王の控えの間は南方に面した窓から明るい日差しが燦々と差込み招待客より送られてきた色とりどりの異国の美しい花々が飾られていた。

ダーニスは濃紺の正式な軍服に身を包んでいた。肩からは斜め掛けに瞳の色と同じ赤褐色の綬を掛け、胸には軍隊時代に手に入れた幾つかの勲章を飾っていた。自身の姿に満足しているのか鏡に映った自身の姿を一瞥すると振り返って晴れやかな顔で一同を見渡す。

「ティルニー！久しいな！来てくれたのか！！・・・という事はやはり姉上も義兄上も来ては下さらなかったのか…。」ダーニスの悲しげに曇った顔を見てステラは力なく微笑むとエルフの正式な礼を取りダーニスに手を差し出す。

「申し訳ありません。ガツカリさせてしまったようですね、我が国王夫妻は昔の事件をまだ忘れてはいないのです。王妃様のお気持ちを考えますと王もここまで起しになる事が躊躇われたのです。ご理解下さい。」

ステラはダーニスと握手を交わすと抱擁をせずに深々とお辞儀をし

た…。

ダーニスはお辞儀をするステラを見ながら苦々しい思い出をかみ殺すように顔をゆがめると致し方あるまい……。と呟いた。

「……さて……。ローズ…準備はいいかな？お前もついに目覚めたのだから国民にお披露目をしなければならいね、今日のお前はとても愛らしいよ。もっと傍に来て叔父さんに良く見せてくれ。」

ダーニスは屈むと両の腕を広げローズを抱きしめた。

「叔父様、お話があります。」ローズは抱きかかえられながらもダーニスから顔を離し申し訳なさそうに顔をのぞく。

「どうしたんだ？話とは？」ローズの表情から何かお願い事があると察し微笑を浮かべてローズをイスに座らせると視線を合わせ微笑みローズの頭を撫でる……

「……実はご報告をしなくて葉ならない事が御座います。」突然のレイラの声にビックリしてダーニスは立ち上がって振り返る。

「??」視線だけで尋ね先を促す。

「…実はローズが開眼を迎えまして自身の判断のみでフィリオに誓約の誓いを求めたのです。」言い難そうにレイラはダーニスを見たり床を見たりしながらそばそと語り、終わると困った顔をしながらステラに助けを求めるように視線を送った。

「ええ！誓約の誓いを!？」ダーニスも驚愕してその場にいる一堂を見回す。

ブツブツと……。まだ開眼したばかりの身でそんな力が？と呟きレイラの視線を追ってステラを呆然と見る。

「残念ながら国王陛下私もその場にいたのですが一瞬の事でドラゴン族ではない私の身と致しましては迂闊に近づく事も途中で止める事も相成りませんでした…力及ばず申し訳ありません。」ステラは当惑してダーニスを見る。そして深々と頭を下げる……

「……も！申し訳御座いません!!」突然フィリオが叫んだかと思つとその場にひれ伏そうとして身を屈めたが途中で硬直したのか

頭を下げる事が出来ずビツクリして驚愕の面持ちでダーニスを見つめる。

「・・・止めておけ、カロスの息子フィリオ・・・そなたが既に誓いの儀を終えているのなら正式な礼は主君にしか出来ない身体となつたはずだ・・・無理をするとそなたの身体を痛める事になるぞ」。

「ダーニスはハアと溜め息をつき頭痛がするのか片手でこめかみを押さえながらイスにドサツと沈み込んだ・・・」。

「・・・まったくこの時に厄介な事を・・・」

「失礼ですが国王陛下、先ほどレイラ様にもお伝えいたしましたのですがフィリオはあくまでも見習い騎士団に過ぎませんし、お父上のカロス殿が正騎士で居られる限り我々以外この事実を知る事はありません。」

ステラは話しながらダーニスに近づき安心させようと話を続ける・・・

「この度の儀式においても形式的な誓約の誓ですし、フィリオは儀式に参加いたしません。」

「それに、開眼の儀を迎えられたローズ様には以前よりも一層護衛が必要となりますし、フィリオは元々ローズ様の守役...これを機にフィリオを正式なナイトと任命されては？さすればローズ様のお傍に常にフィリオがいても何の不思議も御座いませんし、フィリオは血筋も正しいドラゴン族ですからローズ様にとってドラゴン族の良き相談相手ともなりましょう...」。

言ってステラは微笑みダーニスの前に片膝を付き礼を取る。

「フム・・・確かに体裁は保たれローズには以前より付けようと思つていたナイトをつける事が出来るし、ドラゴン族の教育にもなるであろう・・・しかし私が考えていたナイト候補はもっと年配の正騎士でアエルやトロンであつたのに・・・」。「・・・しかし5歳の開眼を迎えたばかりの幼き子が誓約の誓いを行なうとは...」

ダーニスは気を取り直してステラの手を借りて立ち上がると腕を組みフィリオをはじめて見た様にゆっくりと眺める・・・

「まあこうなってしまうては仕方ない…取り返しなど付かぬし、テイルニー殿の言う通りカロスがいるのだから問題も無い・・・フォリオを正式なローズのナイトとして任命しよう。」

「フィリオくれぐれもローズを頼む。この子は我々に残された大切な兄上の忘れ形見なのだ…。」フィリオの肩に手を乗せ叩くとその瞳を覗き懇願するように最後の言葉を呟く・・・

部屋の反対側で最後の言葉でレイラが涙ぐみハンカチで目頭を押さえた。

「お母様・・・」ローズは母に駆け寄るとその細い腰にぎゅっとしがみ付いた。

「叔父様有難う御座います。フィリオには申し訳ないと思ったのですが湧き上がる力を抑えるすべもわからなかったのです・・・。」母にしがみ付いたままその幼い容貌からは不思議な大人びた声を発し、ダーニスを更にビックリさせる・・・。

「ローズ・・・良いのだ誰しもドラゴンの力が目覚めてすぐには御しがたいものだ…しかし此れからは何か事を起こす前にフィリオがお母上に話して相談するよう心がけなさい。そなたの力はプラーシノの物・・・どれ程の物が秘められているのかまだ謎なのだから…。」

「ダーニスも改まりローズを見下ろす。」

「ハイ…以後気をつけますわ。」突然いつもの幼い表情になり愛らしい微笑を向けられダーニスもつられて微笑んだ。

「では、これ以上賓客をお待たせするわけにもなるまい・・・参ろうか、皆のもの・・・。」ダーニスの改まった調子にレイラは微笑し、ダーニスの差し出した手を取り参りましょうと他の皆を促した・・・

控えの間に向かう途中ローズとステラは並んで歩きその後ろにフィリオが続いた……

「ステラ有難う……おかげで助かったわ……」ローズはそつとステラの手を握り自分に注意を向かせると微笑み握る手に力を込めた。

「私は何もしておりませんよ、ただ事実を伝えただけです。」ステラも微笑むと前を歩くダーニスとレイラとの距離を測り急に歩調を弱めた。

そつと立ち止まり前に行く2人が振り返らないのを確かめるとローズにそつと耳打ちをした。

「ローズ様、いいですか、貴方とお母上様は大変微妙な状態なのです。まさに綱渡りのような……王宮にはダーニス新国王派とレイラ様、将来の女帝としてローズ様を押す派閥もあるのです。貴方は唯一人のプラーシノ……この度はまだ幼いという事とダーニス様という弟君がいらつしやった……ゆえにプラーシノではないのにあの方が国王になられたのです。」

「貴方の瞳の色を見ていると若い頃のアラン様を思い出します……今はまだ早い……貴方様が成熟してフィリオのようなナイトを増やし、ドラゴンの力を操るすべを覚えてください。それまでは貴方にそのような力があることを世に知られてはなりません。せめて瞳の石を持てる12歳になるまでは……。」

ステラの強い色の薄い瞳に見つめられローズも真剣なまなざしで「解ったわ……ステラ約束する……けれど私もお母様もとても孤独なの……今までよりもつと頻繁に訪ねてくることを約束してちょうだい。貴方がいてくれるときつとお母様も心を強く持つてくださるわ……。」真剣にステラを見つめステラもしばし見つめ返すとかしこまりましたとさつと礼を取った……。

ローズは微笑みステラの手を取るとさつと振り返り頷くと小走りに前に行く2人との距離を何事も無かったかのように詰めた。

誓（仮）後編（前書き）

誓後編…

戴冠式が始まった…国王になるべく準備を整えるダーニス。新しい国王を祝おうと沢山集まった賓客と国民達。しかし重要国のエルフ・マーメイド・ウフル王国からは使者が訪れるだけで国王夫妻、皇太子は訪れなかった…しかし誰も予期せぬ賓客がやって来る国王ダーニス以外は予期せぬ…

誓（仮）後編

大広間では式典が始まるため賓客達が雑談をしながら王の謁見の間へ移動がはじまった……

・・・賓客達が各々の席に着くとゆつくりと式典開始の音楽が厳かに流れ始め大広間に続く扉が開くと白と赤の清掃に身を包んだ若く可愛らしい少年少女の侍者達が儀式に必要な香炉・花・宝剣と王笏、王杖、指輪そして濃紺色のベルベットのクッションに恭しく乗せられた王冠を持つてゆつくりと天窓より照らされた暖かい日差しの中を厳かに進んでくる。

・・・少し間隔をあけて教会の大司教、その後に10人の司教、そして12人の騎士団を退いた元老院に属するドラゴン達・・・そしてレイラ前王妃が厳かに入場した。

王座の隣に王座を挟むようにして大司教とレイラ前王妃が並んで立ちその下の段に元老院の面々がシンメトリーに並んだ。

厳かに流れていた音楽が途切れ甲高いファンファーレに変わり賓客たちはその場に起立して通路に向かって頭をたれた。

ファンファーレが鳴り止むと花びらを籠に沢山詰めた愛らしい少女が2人赤い絨毯の上に花弁を撒きながら入場し、その少し後に正装した12騎士団が抜き身の剣を掲げ通路の奥に並ぶと剣でトンネルを作った・・・ローズの手を引いて濃紺色の軍服に身を包み、肩からは其れとは対照的に赤い重たそうなマントを羽織ったダーニスが溢れる笑顔とともに入場した。

ダーニスはゆつくりとローズの手を引きながら賓客たちに笑顔を振

りまき王座にゆっくりと近づいていく。ダーニスとローズが目の前を通ると賓客たちは身を屈めて礼を取った・・・

ダーニスが王座の正面まで来るといよいよ戴冠の儀が始まり、大司教が王冠を持って前に進み出ると厳かにダーニスへ王国への忠誠を求めダーニスが恭しく頷き良き国王となり王国の幸せのみを考え精一杯努力すると誓約し赤いクッションに膝をつくと大司教が会場全体にとどろく様な声で誓約はなされたと叫びダーニスの頭上に王冠を載せた・・・

会場は割れんばかりの拍手の音で埋め尽くされ王宮の外で今か今かと待っていた国民達にも戴冠がなされた旨が伝えられ大歓声が上がった・・・。

ダーニスが王座に座り手を高くかざすと王宮内は静まり返り皆新しい国王に注目した。

ダーニスは身振りでローズを傍に呼びレイラと供に並ぶとローズの手を握り12騎士団長のアルギュロスが前に進み出て剣を頭上に高く掲げると膝をつき剣を地面に突き刺すと残りの騎士団もそれに習いアルギュロスが兜を取り脇に抱え立ち上がり新王に12騎士団の忠誠を誓った・・・

ダーニスが誓約を許そうと言って立ち上がるとアルギュロスが顔を上げ髪をかき上げるとその顔を見た観衆から感嘆の声が上がった・・・

「さすが騎士団長殿はお顔も凛々しくあられるがドラゴン族の髪と同じあの瞳の銀色の輝きは宝石のようですね・・・」

「お年は？お幾つ位の方で御座いますか？」

「ドラゴン族の騎士団長の方ですから見た目が40位に見えましても実際はもつといつてらしてよ・・・」

観衆の中から初めてドラゴン族の騎士団長の姿を見るものはヒソヒソとその容姿を噂した。

12 騎士団の誓約がなされ今日のこの瞬間より国王となったダーニスは輝くように微笑み宝剣を脇に刺し王杖を持つと空いた手でレイラ前王妃の手を取りローズを伴い国民達にその姿を見せるべく王宮のバルコニーへと移動した。

ダーニスは常に恍惚の表情を浮かべていたが其れとは対照的にローズは押し黙りその表情からはその小さな胸で何を考えているのかは想像できなかった・・・。

新国王の姿がバルコニーに見えると国民達は狂喜してその名を叫び手を振った。

その姿を見てダーニスは喜び手を振り返すと大きな朗々と響く声で国民へ演説を始めた。

・・・

「皆のもの！今日、私は正式にこのラ・レーヌ・オジェ王国の国王となった…長い間執政の宮としてこの王国を支えてきたが前国王が亡くなり5年間の喪が開けローズも目覚めの時を向かえ今日を良き日と定めたのだ・・・

皆も知っている様に全国王、我が兄上は類いまれなる素晴らしき王であつた…兄上の赴く戦で我が王国が負けることなど無かつた…

近隣諸国とも良き友好関係は保たれ王国の平和がそこにはあつた・・・

私自身この素晴らしき王国をそのまま引継ぎ兄上に負けない平和な王国を築くつもりである。それに伴い我々にとつての永遠とも言える戦の根源をどうにか取り除けないものかと考えた。

遙か当方に位置する王国トラディスカント・ベルズ…遙か昔から

我々はいがみ合い常に何度と無く戦を行なってきた・・・

今となつては原因すら曖昧となっている・・・同じ数少ないドラゴン族同士なのにいがみ合お互いの国民の血を流し争ってきた、私はこの負の連鎖を終えるべく現皇帝メラベル・ドラゾ・ケイモーン殿と友好を築こうと申し入れた。

国王の話を静かに聴いていた国民達はざわざわと落ち着き無く話し始めた・・・

落ち着きの無い聴衆の雰囲気察してダーニスはさつと手を挙げ黙らせると話が続けた・・・

メラベル皇帝はありがたくも私の話に耳を傾けてくださり我らは時間には掛かったが十分に同意した。

今、私が国王となり私の導く未来の王国とトレードスカント王国は友好国となりお互いの民を行き来させ交易も開始しよう・・・そして光栄な事に本日私の戴冠式に友好の証としてお越しくださった・・・

紹介しよう！我が新しい友好国トレードスカント王国皇帝メラベル殿だ！！

ばらばらと少ない拍手に迎えられ王宮の中から全身黒い軍服に身を包んだ見た目はまだ若く30台後半のすらつとした身なりで漆黒の髪は緩やかなくせつけで金の紐で肩にかかる髪を結わえていた。瞳も漆黒でドラゴン族特有の瞳の中に白い星を輝かせ聴衆を見回す顔は口元に小さな笑窪を浮かべ柔和と言っても良い笑顔を浮かべていた・・・

・・・彼は柔らかく深みのある声で話し出す・・・

「・・・皆さん、只今新国王閣下よりご紹介に預かりましたトレード

イスカント王国よりまいったメラベルと申します。」

「ダーニス国王がおっしゃた様に我ら2国間の間には拭いきれない悲しみの歴史があります…皆さんの中でも先の戦争で家族を失った方も居られましょう…しかしわが国にも同じく家族を失った者達がいるのです…私は出来るだけその様な者達を無くしたい、これ以上父母の無い孤児を増やしたくない…そう思ってきたのです。」

「しかし貴国とは犬猿の仲、今更私共から和平などと思ってまいりました…しかし、数年前ダーニス殿が同じ気持ちをお持ちだという事を知ったのです…其処から我々はお互いの心をさらけ出し、話し合いお互いの王国の元老院を説き伏せてきたのです。」

「友好とは簡単には成されません…しかしをこれらの2国間の友好を確固たる物として固め歴史上初と成るほどの素晴らしい関係を築こうではありませんか！」

「この戦争を終わらせ平和なる世と一緒に築きましょう！」

メラベルは国民の気持ちを最高潮に高め演説を終えるとダーニスと家宅握手を交わし抱擁した。

「我々は古き血族なのだ…共に歩もう。」

そう言われダーニスは瞳をウルわすとまるで兄弟の様に肩を組みその姿を国民に披露した…

レイラはその様子を恐ろしげに見つめていたが口元を押さえると冷静さを保ちローズの手をぎゅっと握った…ローズもその様子を見つめていたがその表情から何を思っているかはうかがい知れなかった…。

演説を終え上機嫌のダーニスは祝宴だ！と叫び先陣を切って大広間に向かった…

ダーニスの後を微笑みながら付いて来たメラベルはレイラとローズに気が付くとニコリと笑って深々とお辞儀をした。その様子を見てレイラも膝を折って礼を取るとメラベルに手を取られ手袋の上から

指の関節に軽くキスをした。

「お初にお目にかかります。レイラ殿・・・お噂にたがわぬ美しさですね。それにローズ殿もお母様に似て愛らしい・・・将来が楽しみですね。」レイラの手を握ったままメラベルはそつと手を伸ばしレイラの長い髪の一房に触れた。

レイラはギックと硬直してさつと身を引きローズを傍に引き寄せた。「初めましてメラベル閣下お会いできて嬉しく思います。」レイラは半ば強引に握られた手を引き抜き再度頭を下げ視線を逸らした。メラベルは空っぽの手をぎゅっと握りローズの方を見て視線を合わせるため屈んだ。

「ローズ様・・・本日は挨拶の為に参りましたのでこれにて失礼させて頂きます。また、必ずお会いいたしましょう・・・必ず・・・」そう言うところまでローズの手のひらにもキスをしてしばしジツとローズの瞳を見つめ髪に触れ立ち上がるとさつと礼をしてその場を立ち去った・・・。

・・・祝宴は始まり上座に座ったダーニスは嬉しそうに会場を見回してメラベルの姿がない事に気が付きあわててメラベルの行方を尋ねたそこへレイラがローズを伴い席に現れ事の顛末を聞いて残念がったが他の賓客のもてなしに忙しそうに立ち回った・・・。

祝宴は盛り上がり夜半まで続いた・・・ローズは幼いため夕方には自室に下がるよういわれ喜んで下がった。

「フィリオ、ステラを呼んで来てくれないかしら？あの方が帰られる前にもう少しお話がしたいの・・・」

ローズは自室のバルコニーから祝宴の続く大広間の賑わいを遠目で見ながらフィリオを振り返った。

「かしこまりました。お探してまいります。」

そう言うところまでフィリオは背を向けて出て行こうとしたがローズに呼び止められ振り返る。

「フィリオ！そんな風に改まらないでちょうだい…今まで通り接して欲しいの…貴方はお兄さんみたいなものだから。」ローズは寂しそうに打ち明けフィリオを伺い見る。

「ローズ様……。そうは参りません。私は貴方様のナイトになったのです。」兄の様になどと…無理を仰らないで下さい……。」フィリオはローズの元まで大またで戻り向かいに立っていたがローズが下を向いてしまったので視線を合わせるために片膝をついた。「……そんな風に接して欲しくて誓約したのではないわ……。一人でも信じて傍にいて欲しかったのよ……。フィリオわかって……。私とても孤独なの……。」ローズは瞳をウルわせフィリオの手を取った。

「ローズ様……。解りました。私は貴方にとっての唯一人のナイト貴方をお守りしましょう……。誓って貴方を裏切りませんよ」フィリオはローズの手の甲に軽くキスをすると悪戯そうに微笑みローズを抱きしめた。

「約束よ、フィリオ……。どんな事があっても一番の理解者でいてね。」ローズはぎゅっとフィリオを抱きしめると笑って身を離れた。「ではローズ様ローズ様いわくのステラ殿を探しに行ってきます。」フィリオは立ち上がると微笑み優雅に一礼するとローズの頭を一人でして足早にステラを探しに行った……。

ローズはベランダに戻りステラが来るのをまた大広間の様子を見ながら待った……。

首都セルシアナの賑わいは遠く離れた村々にも数日を掛け伝染し小さな村ですら新しい国王の即位を喜びいたるところで祝杯を挙げていた……。

そんな遠く離れた南の山間に位置する小さな村ルチエツタ村首都で行なわれた戴冠式より遅れて一週間後に吉報が届いていた。

この村は南に位置しているため首都セルシアナよりも早く初夏の香りが漂っていた。

もうすぐ夕闇が迫り夜を迎えそうなのこの時クロスは村の裏山で迷子になり膝を抱えて泣いていた・・・

「・・・うつつお母さん兄さん・・・怖いよ・・・うつつ」

クロスは膝を抱えたため膝をそつとつついて痛さにうめきどうにもならない身の上を思っけて力を振り絞り泣き喚いた。

朝クロスは母の為に早実の木苺を摘みに意気揚々と家を出発した。

母には内緒にこっそり籠を持って父を探しに教会に行ったが居らず納屋や馬小屋、畑にも行ったが父と兄の姿を見つかる事も出来ずガツカリしたが一人でも大丈夫だと思い直し出発したのだ。

「うゝどうしよう・・・みんな心配してるだろうなあ・・・誰にも言わずに来ちゃった・・・。」

ベリーを積んだ籠を見て空腹で引つ込んだお腹を撫でてこれは食べちゃ駄目だと自分に言い聞かせた。

このままでは山で一晩過す羽目になりそうなので思い切つて立ち上がりまだ泣きながら村があると思うほうに向かって思い籠を持って歩き出した。

「とうさあゝん・にいさあゝん・かあさあゝん」「うえゝんシシー！」自分の家族を呼びながら山を下っていると前方の藪がガサガサと動いた。

「ひい！熊だ！！」ぎゃあと叫んで近くに隠れられる所を探したが見当たらず登れそうな木もない...どうしようか悩んで手近な身を隠せそうも無い岩の後ろに回った・・・

「どうか気付かれませんように」と祈りながら藪の方を見ると茂みは更に大きく揺れて人の悪態が付く声が聞こえてきた・・・

・・・「だからこつちの方で子供が泣く声が聞こえたんだって！え

「い鬱陶しい！！野バラの薮だな！！」「ホントかよ、そこを通らなきゃならないならその薮は切り払ってくれ！そんな所通つたら全身ボロボロだ！」「子供の心配よりもご自身の綺麗な身なりが大事ですかつての！！」「2人の男の争う声と薮を切り開きながら進む音が辺りにこだました。

「おい誰かいるのか？迷子かあ？」「おい居るんだつたら早く出てこーい！」

岩の陰からそつと覗くとクロスの目の前に出てきた人物達はまるで怪物と天使に見えた・・・。

「おー！やつぱり居たー！！どうした迷子か？泣き声が聞こえたから来たんだ。」「おつ！ホントだー！！坊や何処の子だい？こんな夕暮れに山の中で・・・」

「あ・・・あの僕・・・あ、貴方は天使？」クロスは怯えながらも2番目に話しかけてきた長い髪がサラサラと流れ夕闇に染まって銀髪に見える髪と美しく整った顔と貴族のような身なりに見とれ呟いた・・・。

「・・・？」天使と呼ばれたものは啞然として立ち尽くした。

「こりゃあ傑作だー！！こいつが天使だってんなら俺は聖人だねー！！」豪快に笑いながらクロスが妖怪だと思ったもう一人の男がクロスに手を伸ばした。

「ヒィ！」クロスは怯えて逃げようとした。

「きゃー怖い！ごめんなさい何も悪い事しないから食べないでー！」

「はあー？」逃げようとしたクロスの手首を掴み妖怪男は顔をしかめた。

「それこそ傑作！ジーンお前人食い妖怪に見えるらしいぞー！！」天使男も盛大に噴出し身体をくの字に曲げて爆笑した・・・。

「・・・あのなあ小僧・・・俺はお前のような小僧は食わんー！！お前の足元に転がっているイチゴの方が美味そうに見えるー！！」ジーンと呼ばれた男はクロスの手を乱暴に離すと腰に手をやり憤怒の形相をしてそっぽを向いてしまった。

「まあまあ・・・子供相手に落ち着いて！」天使男は苦しそうに腹に手を当てたままジーンをなだめた・・・。

「そもそも迷子の小僧の声を聞きつけて此処まで探しに来てやったには俺なのに！食わないでくれてか！！」ジーンは天使男のとりなしにもかかわらずまだ腹を立てていた。

「あ・・・あのぉ・・・ごめんなさい！・・・茂みから出てきた貴方が狼人間みたいに見えたものだから・・・」

クロスは急いで謝りモゴモゴ言いながら俯いて今にも泣き出しそうに肩を震わした。

「・・・狼人間ね、言い得て妙だな・・・。遠からず近からずつてとこだな。」天使男は笑うのをやめ溜め息をついた。

「・・・もう夜だ・・・そう見えても仕方あるまい。この髪だ。」ジーンは溜め息をつき自分の短い白銀の短髪に指を入れた。

「小僧・・・驚かせて悪かったな、名前は？家まで送ってつてやるよ、だから泣くな。」ジーンは屈みこんでクロスの顔を覗き込んだ。
「・・・クロス・・・村で牧師をやってるカージスの息子です。木莓摘みに来て迷子になってしまいました。」クロスは涙を拭うとはきはきとしゃべりだした。

「ほぉ・・・小さいわりにしっかりしてるな・・・つて、待てよ！お前の父さんカージスって言ったか？」ジーンは興奮した面持ちでクロスの肩を持って強く揺さぶった。

「おいおい！子供をそんなに揺すったら駄目だろ！」

「坊や、カージス兄さんの息子なのかい？お兄さん達はねちようど君のお父さんに会いに尋ねに行く途中だったんだよ・・・自己紹介がまだだったね、私はトゥリーそして人食い狼がジーンだ、2人も君のお父さんの友達だよ、」

トゥリーは優しく微笑んでジーンの隣にしゃがみ込みクロスの顔を覗き込んだ。

「おい、誰が人食い狼だ！」ジーンはトゥリーに噛み付くように言った。

「・・・へへ怖がつてごめんなさい。父さんの友達とは知らなくて・・・木苺摘みにきたら迷子になっちゃって・・・」クロスはトゥリーとジーンの様子がおかしかったので笑いながらホッとして2人に笑いかけた。

「泣いてた小鳥がもう笑ったよ、そうか、お前がクロスか・・・大きくなったなその瞳の色・・・いや、お兄ちゃんに良く似てるな！」ジーンも笑ってクロスの顔を見ていたが立ち上がると頭を撫でた。

「大きくなったな、最後に会ったのは3歳の頃だったか・・・覚えてないだろう？あの時は始終寝ていた。」トゥリーも微笑んでクロスの頭を撫でた。

「3歳の頃？すみません。覚えてないです。」クロスはすまなそうに言うのと落ちた木苺を拾い始めた。

「馬を連れてくる、トゥリークロスを頼む。」ジーンは木苺を拾っているクロスを見て暗くなる前に山を下りようと馬を連れに行った。

「ああ、頼む・・・クロス手伝おう。」トゥリーは一緒に拾いながらジーンが戻るのを待った。

・・・暫くするとジーンが2頭の栗毛の馬を連れてきた。

「ほらっ。もう辺りは真っ暗だ俺が先頭を歩くから気をつけて付いて来い。」ジーンはトゥリーに片方の手綱を投げてよこすと自分はさつと慣れた様に馬に跨り振り返った。

「ああ、頼む・・・さあ、クロスおいで私と一緒に乗ろうその方が安全だ・・・。」トゥリーはクロスを招き寄せ鞍の前方に座らせると自身も軽々と馬に飛び乗りジーンの後を追った。

・・・「村まであとどれ位かかる？」トゥリーは前に行くジーンに問いかける。

「そうだなあ・・・30分掛からないだろう・・・坊やはそれほど離れ

ていない所で迷子になったって事さ」ジーンは笑いながら振り返ってクロスを見た。

本当にそっくりだ・・・トウリーの言う通りだったな・・・前を向き物思いに耽る。

「そうか・・・良かったなクロス、きつと皆心配しているよ・・・」トウリーが前の鞍に座るクロスに話しかけるとクロスは不安そうな顔で振り返ききつと兄さんに怒られると愚痴った。

「ハハハ・・・クロスは兄さんが一番怖いのか？こういう場合は父さんに怒られるって怯えるもんだが？」ジーンは豪快に笑いながら目の前の枝をヒョイと頭を傾けてかわし前を向いて進み続けた。

「リスターはいつもは優しいけど僕がへまをしたり危ない事をする父さんより怖いんだ・・・きつと今日も怒ってるよ・・・。出かける前に兄さんを誘おうと思ったんだけど見当たらずに父さんもないし、母さんには内緒にしたいくて・・・だから誰にも言わないで出てきちゃったんだ・・・」クロスは俯きたとだどしく話し、木苺の入った籠を大切にそうに抱えた。

「それはまずかったな・・・きつと皆心配して探し回ってるぞ・・・まあこうして無事に再会も出来たのだし、俺達からとりなしてやるよ。」ジーンはヒョイと振り返ってニツと笑いかけた。

トウリーも大丈夫だよと優しく話しかけクロスの肩に手を置いた。

「おー！明りが見えてきたぞ！？早くないか？」ジーンは馬を止めて馬の上に立ち目を細めて前方を確認した。

「・・・どうやらクロス搜索隊に丁度会えた様だ！」ジーンは笑って振り返り硬直するクロスを見た

クロスは籠を持ったまま振り返きトウリーに助けを求めるようにすがった。

「大丈夫だよ、我々がいるんだ・・・」優しく微笑みクロスの頭を撫でる。

「おーい！此処だ！！お探しのクロスは此処ですよー！！」ジーン

は大声で搜索隊を呼び自身もトゥリーに目配せすると馬をトロットで走らせた。

ジーンは先に搜索隊に追いつきカージスを尋ねて行くつもりであったが山で泣いているクロスを見つけてそちらに向かっていた旨を話しカージスとリスターを安心させた。

後から追いついてきたトゥリーの前にクロスが乗っているのを見て2人は同時に名前を叫び安堵の表情を浮かべた。

・・・「クロス…何処に行つてたんだ！父さんも母さんも心配して村中の皆が探してくれていたんだぞ！！」リスターは父親より早くトゥリーの馬に自分の馬を寄せるとクロスの耳を引っ張り揚げ怒鳴った。

「痛い！痛いよ兄さん！！ごめんなさい！！」クロスは籠を抱きかかえたまま耳を引っ張られ涙目になりながら今にも馬から落ちそうになった。

「おっと、リスター落ち着け、今回は私達が偶然通りかかつて迷子未遂になったんだそう怒つては可哀相だよ・・・。」トゥリーはクロスの腰を抱えリスターの方を見てとりなした。

「ジーン、トゥリー通りかかったのがお前達でよかったよ・・・心から礼を言おう・・・息子を見つけてくれて有難う。」カージスは2人に向き直り胸の前で手を裏返し礼をした。

その様子を見てリスターも恥ずかしそうに「お久しぶりです。弟を見つけてくださって有難う御座いました。」と父と同じように礼を取った。

「ハハハ！リスター！大きくなったな？弟の姿が見えないんですぞ心配しただろう？お前は昔からいつも弟が目の隅に映っていないと探し回ってた！相変わらずだな。」ジーンはからかう様に笑いリスターの頭をクシャクシャと撫でた。

「お久しぶりですジーン殿…よくクロスの居場所が解りましたね？」リスターは気恥ずかしさからか話題を変えた。

「ん？俺もウルフ族の端くれだ聞こうと思えばどんなに離れていたって子供の泣き声位聞こえるさ。」ジーンもニヤツと笑い自分の尖った耳を指で軽くぴんと跳ねた。

2人が話している間カージスはトゥリーに馬を寄せて何も言わずクロスの頭をくしゃくしゃにして大事そうに抱えている籠を見てこれは？と尋ねた。

「・・・」クロスがドキドキしてしゃべれないのを見てトゥリーが助け舟を出した。

「それはさるご婦人の為にこの探検を決意して探しに来た宝ですよ。」おどけて話しながらクロスから籠を受け取りカージスに渡した。
「木苺か・・・」

「木苺は母さんの好物だ！そろそろ早熟の木苺を摘みに行こうって昨日話してたじゃないか・・・こんなに沢山・・・一人で摘んだのか？誘ってくればいいのに・・・」リスターも籠の中身を見て驚いた。

「そうか・・・それを摘みに一人で裏山に行ったのか・・・」

「ちゃんと兄さんも父さんも探したんだよ！けど何処にもいなかったし、裏山位一人で行けると思ったんだ！だけど・・・気が付いたら暗くなってきた此処がどこかも解らなくなつて・・・心配掛けてごめんなさい。」クロスは一気にしゃべるとわっと泣き出した。

「カージス様・・・お久しぶりです。ご存知とは思いますが火急お知らせせねばとジーンと馬を飛ばしてまいりました。」トゥリーは急に改まってカージスに身を寄せて語った。

「ああ・・・解っている。家で話そう。サニーも待っているよ・・・」リスター！先に帰って村長と皆にクロスが無事見つかった事と礼を伝えてきてくれ！私も客人を家に案内したらすぐに戻ると・・・」リスターは「ハイ！」と叫ぶと皆にまた後でと言って駆けていった。「では家へ参ろう。」カージスはそう呟くとくりと向きを変えて進みだした。

トゥリーとジーンはさっと目を合わせカージスに続いて山を下って行った・・・。

4人が家に戻ると母サニーが心配で家にいることが出来なかったのか家の前でウロウロと所在無さげにしていた。

「母さん！！」クロスは危なっかしげに馬の鞍の上で立ち上がるとサニーに向かって大きく手を振った。

「クロス！！」サニーは太陽の様な笑顔を向けると駆け寄ってきてクロスを抱き下ろした。

「どんなに心配したか・・・。」クロスを胸に抱きしめサニーは涙を流した…。

「ごめんなさい母さん。ウェーン！」クロスは苦しげに謝り大声で泣き出した。

・・・「サン、お客様が来ている、悪いがお招きをしてくれないか？私は馬を戻してきたら村長の所に行くところ。」カージスはそんな2人の様子を微笑んで見て馬を降り気遣わしげに話しかける…。

サニーはハツとして涙をぐいっと拭うとお客に気が付き恥ずかしそうに「はい、ようこそ…すみません御案内もせずに。」とあわててお客に顔を向けた。

「サニー姉さん、お久しぶりです。」トウリーはさつと馬から下りと胸に手を当て複雑な仕草をするとサニーと握手を交わし抱擁した。ジーンも馬から降りカージスに馬を頼むとサニーに向かって歩いていききつく抱擁した。

「姉さん元気そうで！！とっても会いたかったです！！」白い頬を若干高揚させて赤く染めジーンはサニーを抱きしめた。

「ジーン！私も会いたかったわ！すっかり男らしくなって！その髪の毛の長さもとても似合ってる。」

サニーは驚きながらも家族のような親密さで2人と握手と抱擁を交わしとたんに笑顔になった。

「フフフツ・・・」トウリーはそんなサニーの様子を見て微笑んだ。

「トウリー何がおかしいの？」サニーはクロスと手を繋ぎながら微笑むトウリーを訝しげに見る。

「イヤ、貴女とクロスが似ていて面白かったもので・・・。」

「そうかしら？あまり似ているとは言われた事が無かったけど・・・。」

サニーは困った表情を浮かべた。

「姿かたちはあまり似ていなくとも性格、仕草はそっくりですよ。」

姉上様」トウリーは最後をからかうように付け加えた。

「そう？嬉しいわ・・・。」サニーはポツと顔を赤らめ喜びを表した。

「あ、そうだ・・・姉さんクロスが大冒険をして手に入れた宝です。」

「そう言くとトウリーは木苺の入った籠をサニーに手渡した。

「姉さんあんまり叱らないでやってくれ、姉さんの為に必死で時間を忘れてしまっただけの事なんだ。偶然とはいえ俺達が無事に連れ帰ったのだし・・・。」ジーンはクロスを庇ってやろうと半ば必死でサニーに懇願した。

「まあ！こんなに沢山！！クロス一人で摘んでくれたの？」サニーはクロスの前に屈み瞳を潤ませて聞いた。

「・・・うん。ごめんなさい。心配掛けるつもりは無かったんだ、行く前に兄さんと父さんを探したんだけど見当たらなくて・・・裏山は何度もいった場所だから一人でも大丈夫だって思ったんだ・・・本当にごめんなさい母さん。」クロスは母にも一気に説明し終わるとぼろぼろと涙を流した。

「もういいの、母さん達はどうしても心配で胸が張り裂けそうだったけれどこうして無事に戻って怪我也泣く無事な様子が見れたのだから・・・。」サニーはクロスの頬を両手で包み込み一緒にぼろぼろと涙を流しながら溢れる愛情でクロスを抱きしめた。

「グスン・・・。」それを見守っていたジーンがもらい泣きして鼻をすすった。

「フツ・・・お前は相変わらず涙もろい・・・クツクツ・・・。」トウリーはジーンを見て笑いをかみ殺している。

「ふふふっジーンは昔っから感動屋さんなのよ。」サニーもその様

子に気付き微笑んだ。

「チクショー！笑うな！！こういう家族ものには弱いんだ！」ジーンは顔を真っ赤に染めながら鼻をすすり照れ隠しのため怒った。

「へへへっ」そんな様子を見てクロスも泣き笑いし、母にきつく抱きついた。

皆が玄関口で笑っているとサニーがハツとして立ち上がりやっとなを家の中に招き入れた。

「ごめんなさい、気付かなくて。」サニーは笑って皆をダイニングに通すと木苺の籠を持ってキッチンに駆けていった。

「サニー姉さん、カージス兄さんはどれ位で戻る？」トゥリーはソファに深く腰掛けながらサニーに聞いた。

「そうねえもう夜も更けてきたから皆さんにご挨拶が終わったらすぐに戻ってくると思うわ、リスター喪一緒なもの。」サニーはキッチンから応対し、エプロンで手を拭きながらダイニングに戻ってきた。

「クロス、今日はもう疲れたでしょう、お湯沸が沸いたから身体を洗ってもう寝なさい。」サニーはクロスの体が心配でをベットも整え終えていたのだ。

「はい。母さん。」「トゥリーさんもジーンさんもまだ帰らないよね？暫く泊まってくの？」クロスは眠たげに目を擦りながらもトゥリーとジーンが帰ってしまう事を心配していた。

「ああ、折角尋ねてきたんだ2、3日はお世話になる予定だよ。」トゥリーは安心させようと優しく微笑みかけた。

「良かった。じゃあ僕済みませんが先に失礼します。」クロスはペコリと頭を下げると眠たげにバスルームへと向かっていった。

「大きくなりましたね・・・5歳を過ぎましたね。何か目に見えた変化は？」トゥリーはクロスが出て行ったドアを見ながらサニーに

向かって話しかけた。

「そうね…リスのときと同じよ、目が覚めてスッキリしたから…月曜から村の学校に行かせるの…今までは体が弱くってと言っていたけど、ある意味その通りだから。すごく楽しみにしているのよ、この村に越してきて同年代の子供も沢山いるから、リスターはすっかり馴染んでお友達が何人もいるのよ。」サニーは嬉しそうに2人に話して聞かせるとお酒と料理を用意しにキッチンへ小走りに戻って行った。

「姉さんは相変わらずだな、ジツと座っているよりも忙しそうに家の事をやっている方がいいようだ。」ジーンは楽しげに言ってトゥリーを見る。

「…。」トゥリーは黙って自分の手を見つめている…。

「どうした？考え事か？」ジーンはテーブルに盛られているフルーツからりんごを取り上着で軽く磨くとはくりと齧り返事を返さないトゥリーを見た。

「…。」イヤ…何でもない。」

「…あれから5年…今王国は変化の時だ…直中に居るのが正か遠く離れた方が正か…まずはカージス殿に全てをご報告しなくては…。トゥリーも座っている事が出来なくなったのかキッチンへサニーを手伝いに行くとジーンの手を叩き立ち上がった。

ジーンも一人で待っているのも寂しかったのかトゥリーについてサニーの居るキッチンへ向かった…。

成長（仮） 1（前書き）

〔登場人物紹介〕

クロス：主人公です。この章では5歳

瞳の色は緑（イメージでは新緑のような柔らかい）髪はストリート 南の島の砂浜のような色。茶系統の金髪。

性格は明るく馴れっこい。善悪の区別をつけたがり嫌な事は嫌とは つきり言う。好奇心旺盛。

口癖：何で？

好きな物：家族。特に兄。ブラコン。猫。動物がとても好き。

特技：足が早い。よく食べる。よく寝る。

成長（仮） 1

・・・クロスは楽しげな声で目覚めた。

ハツとして窓の外を見るあれから自分は良く眠ったようで太陽は昼に差し掛かっている事を教えてくれた。

クロスは飛び上がると室内履きを履き急いで階段を下りていった・

「何で起してくれないの!？」クロスは階段の中ほどでキッチンに居る母に向かって大声で尋ねた。

・・・「あら、クロスお早う?もうすぐお昼だけど…よく眠れた?リスが起しに行っただけけどあまりにも良く眠っていたし、昨日疲れただろうから起さなかったのよ・・・。」

サニーは微笑み階段を駆け下りてくるクロスに向かっていった。

「顔を洗ってらっしゃい、2人は逃げたりしないから。」サニーは寝癖の付いたクロスの髪をそつとなで微笑むとバスルームの方に向かって背中を押した。

「2人は?皆は何処??」クロスは背中を押されながら振り返りみんなの姿が見えないので心配そうに尋ねた。

「お父様は教会でリスはお昼ご飯を食べに帰ってきて2人と今外にいるわ」サニーは微笑み窓の外を見て3人の姿が見えないか探した。母の視線の先を追って外を見たがみんなの姿が見栄なのでクロスは諦めて顔を洗って身支度をしようと走って行った。

家の前の庭ではリスターが2人に剣の稽古をつけてもらっていた。

「ヤアーーーーー!」

「そんなんじや全然駄目！小枝でぶたれている様なもんだ」ジーンは半ばからかう様にリスターの木で出来た剣を払った。

「クソー！」

カンカンカン！リスターは半ば自棄の様に連続して刀を繰り出す。ジーンは面白そうに全てをかわす。

「ジーン！真剣にやってよ！こっちは本気なんだから！！」リスターは顔を赤く染めて棒をジーンに真っ直ぐ向ける。

「おいおい・・・冗談言うなよ、大人が子供相手に本気になれるわけなしだろ？」ジーンは明らかにからかいながら短い髪を撫でる。

「・・・！だからジーンとはイヤだって言ってるのに！トゥリー！ジーンはオレの事絶対馬鹿にしている！！」リスターは家の前のベンチにゆったりと座り微笑んでいるトゥリーに訴えた。

「ジーン！リスターをからかうな・・・本人は本気なんだから・・・」トゥリーは子供を叱るような表情をしてジーンを見る。

「だってあんまりにも本気になって面白いから」ジーンはますます面白がってリスターの頭を撫でて挑発する。

その瞬間リスターの瞳が細くなり一瞬の隙を突いてジーンの棒を下から払い落とした。

「おっ！」ジーンは棒を叩き落され手を擦りながら感心したようにリスターを見た。

「おお！リスター一本・・・だな。」トゥリーはニヤリとジーンを見る。

「やった！本気になればこんなもんだよ！」リスターは得意げにジーンを見る。

「そうだな、リスターはまだ10歳・・・将来のためにももっともつと剣の腕を磨かなければ」トゥリーは微笑を浮かべている。

リスターも嬉しそうにトゥリーを見てオレ頑張るよ！と意気込みを語った。

「兄さーん！みんなー！！」クロスが身支度を終え嬉しそうに兄に

向かって駆けてくる。

「クロス！やつと起きたか、全く相変わらず良く寝るなあ。」リスターは言葉とは裏腹に嬉しそうに駆け寄ってくるクロスを抱きとめるように捕まえた。

「お早う、クロス。昨日は良く眠れたかい？」

「はい。昨日はお世話になりました。」深々と頭を下げるクロス。そんなクロスの頭をも少し下げると言ってリスターは手で押さえてリスターも一緒に頭を下げる。

「ハハハッもういいよきにスンナ！」ジーンは豪快に言って短い頭をかく。どうやら照れているらしい…。

「クロスおいで。」まるで犬を呼ぶようにトゥリーは手招きする。

クロスは首をかしげながらトゥリーの傍に行きベンチに座るトゥリーをじっと見つめる。

トゥリーはクロスの前髪を掻き分けその瞳を覗きこむ。

「綺麗な色だね、新緑のようだ・・・髪の色は・・・ちょっと褪せた金髪だね。」トゥリーは分析官の様にクロスの容姿をジッと観察する。

「僕は兄さんみたいな髪と眼の色が良かった・・・。」ちょっとふてくされトゥリーから視線を離すと地面をにらめつけるように見ている。

「どうして？私はとても綺麗だと思うよ。」トゥリーはクロスの膨らましたほっぺたを包み込むようにして顔を近づけた。

「だって父さんに全然似てない！」クロスは訴えるようにトゥリーの兄と同じ綺麗なブルーの瞳を見返し寂しそうに顔をゆがめた・・・。

「知らなかったのかい？君の容姿は色こそ違うけどお兄ちゃんにそっくりだ！それにその瞳の色は御祖父様と同じだよ。」トゥリーはクロスの鼻をつんつん押しながら嬉しそうにクロスの目を覗き込んだ。

「ホント！？」嬉しそうに目を見開きリスターを振り返り嬉しそう

に目をキラキラさせる。

「ああ・・・お前の目の色は御爺様譲りだって父さんが言ってた。」
リスターはあまり話したくなかったのかさらつと言うとクロスから目を離しジーンと剣の稽古を再開した・・・

「トウリーありがとう。とっても嬉しい。やっぱりトウリーは神様のお使いだね。」クロスは嬉しそうに目をキラキラさせながら若干崇拜の目でトウリーを見上げる」

うゝんと困ったような顔をしてクロスを見ると信じて疑わないような顔をしているのでまあいっかと言う様に肩をすくめてクロスの頭をぼんぼんと撫でた。

「みんな～お昼よ～」サニーが玄関から姿を現し皆に向かって叫んだ。

「クロス～お父様を呼んできてー教会にいらっしやる筈だから～！」
サニーはクロスにそう叫ぶとまた家の中に引き返していった。

「はいー!!」返事をすると言に行つてきますと手を振ってクロスは走っていった。

「ちびっ子いくせに足は速いな」ジーンが感心したように後姿を見ながら言った。

「トウリー・・・クロスの容姿についての話は控えて欲しい。あいつ気にしてんだ、その内魔法でも使つて自分の顔を変えそうで怖いよ。」リスターは言いにくそうに話し出したが最後は笑って付け加えた。

「そうか・・・すまなかつたな、あまりにも瞳の色が貴色で美しく思ったから・・・。それはそうとこの村には馴染んだかい？」トウリーはすまなそうにリスターに顔を向けて謝ると立ち上がり気持ち

よさそうに伸びをしながら周りを見渡した。

「慣れたよ、友達も出来たし学校も楽しい。それに此処は都から離れていてとても穏やかだ、クロスも此処ならのびのび生活できます。」「リスターはトゥリーの隣に並んで一緒に立つと嬉しそうに少し高台に建つ家から村を見た。

「さあ、母さんが待ってます。お昼にしましょう。父とクロスもその内来ます。」「

そうだなと言ってジーンが先にキッチンへと向かって行つた・・・。

父を呼びに教会に来たクロスは教会の隣の建物の中からぞろぞろと出てくる自分と同世代の子供達の姿を見つけ思わず物陰に隠れた。

「昼ご飯食つたらいつものところで待ち合わせな!」

「うん! 必要なもの持って行くよ!!」

「じゃあまた後でな!」

「また後でね!」

みんな楽しそうに話しながら隠れるクロスの前を通り過ぎて行つた。一人の女の子が通り過ぎるとき後ろの子に話しかけようと振り返つた時に見えたその瞳の色に驚いた。

その瞳はラベンダーのような優しい紫の瞳をしていたのである。

クロスの知る限り兄達のような瞳の色は稀で一般的には母サニーの様な茶系統が多いこの村で紫色の瞳を見たのは初めてであった。

クロスは楽しげな一行が通り過ぎる後姿を見送ると誰にも見つからない様に教会横の校舎で教鞭を振るう父の元へ走っていった。

カージスは簡単に見つかり随分と遅れて校舎から出てきた。父さん！と呼びかけると笑顔で振り向きおう！迎えに来てくれたかと嬉しそうにクロスを抱きとめると家路の方に向かって一緒に歩き出した。

「父さんさつき僕と同じ年ぐらいの子達が学校から出てきたけど…」
「クロスはカージスの歩調に合わせるため少し小走りで話しかけた」
「ああ、クロスと同じか前後1・2歳の子達のクラスだよ。来週からクロスもあのクラスに入って一緒に学ぶんだ。カージスは小走りになっているクロスに気が付き歩調を弱めるとよいしょとクロスを抱き上げ視線の高さを合わせた。

「そうなんだ…その中に不思議な色をした目の子がいたよ、あの子は？」
「クロスは父の肩に手をかけバランスを取りながら不思議な紫の女のこの事を早速父に尋ねた。

「ああ…セーラの事か、あの子のお婆さんが人魚の出だから…人魚族には紫の瞳の家系が多いんだ、クロス…この村は都から離れていてあまり他国の人が居ないから目立つが都に行けば色んな瞳や色んな髪の色をした人が沢山居るぞ、だから決して珍しいわけじゃないんだ。」
「カージスは教師の様に息子に教え、諭した。

「そうなんだあゝいつか行ってみたいなあ都…きつと大きくなってたくさんの方が居るんだろうなあ。」
「クロスは夢見がちに言うとカージスにお願いと言わんばかりに可愛い顔を向けた。

「もつと大きくなったらな。」
「カージスはクロスの頭を撫でてそれ！と家に向かって走り出した。

成長（仮） 1（後書き）

クロス：5歳。甘えまくってます。家族みんな甘いです。

成長2

それから数日経ちクロスがはじめて学校に行く日の朝を迎えた・

・

キッチンではサニーがいつも通り早くから台所に立ち朝食の準備を始めていた。

クロスは昨晚楽しみで眠れなかったのか遅くまで寝返りを繰り返していたがいつもより1時間ほど遅く眠った・・・しかし、朝は目覚めがよくいつもは一番最後に起きてくるクロスだが今日は母の次に起きてきてサニーを驚かせた。

トントントン・・・ゆっくりと階段を下りてくる音に気が付いてサニーが振り返るとクロスがおはよーと眠たげに瞳を擦りながら降りてきた。

「お早うクロス。今日はとっても早起きね。」母は早起きの理由を察して笑って迎えた。

「うん・・・中々眠れなかったんだけどシシーが早起きだったからもう目が覚めちゃった・・・」

クロスがそう言いながらイスに座ると後ろからシシーが勢いよく降りてきてサニーの足元を甘えながら擦り寄ってきた。

「お早うシシー。お腹すいた？今ご飯用意するわね。」そう言ってシシーを軽く撫でてやるとシシーの食事を用意した。

「クロス、顔洗って着替えてらっしゃい。」シシーの食事をボーッと見ているクロスはハーイと眠たげに返事をして顔を洗いに行った。
・・・

サニーはクロスが戻って来るまでにトーストを焼きお湯を沸かして朝食の準備をした。

トントントン・・・今度はリスターがさわやかに母さんお早うと言
って軽やかに階段を下りてきた・・・。

「お早うリスターも早いわね。」言ってサニーは微笑み今日は雨が
降るわよ』と楽しげに言った。

「どうしたの？あ、シシーお早う。いい天気で雨が降りそうには見
えないよ？」リスターはシシーを撫でてキッチンの窓の外を覗き不
思議そうにした。

「違うのよ、今日はおねぼうさんが1番に起きてきたの。きつと楽
しめで眠れなかったのね、」サニーは楽しげに話しくすくす笑う。

「それはビックリだね。クロスは何処行つたの？」リスターも少し
大げさに言っていると楽しげに周囲を見回しクロスを探した。

「今顔を洗いに行つたわ、貴方も顔を洗って鶏小屋から卵を取って
来てちょうだい。あ、ミルクもお願いできる？」サニーはリスター
の朝の仕事を頼むとクロスのためのミルクも頼んだ。

「いいよ、顔洗って着替えて行ってくる。クロスも連れて行ってい
い??」リスターは立ち上がりキッチンをでかった所で最後の言
葉を付け加えた。

「ええ、お願いね。」サニーは忙しげに立ち回り始めた。

リスターが顔を洗いに行くとクロスが出てきたので着替えたら卵と乳搾りに行こうと誘い自分も急いで顔を洗いに行った。

リスターが着替えて降りていくとクロスが玄関で日向ぼっこしているシーを楽しそうに撫でたりちよっかいを出していた。

リスターはクロスの横に屈み一緒にシーを撫でるとクロスに声をかけた。

「待ったか？まずは鶏小屋に行こうか？」とリスターが言うとクロスは立ち上がり早くいこーと言って小走りに鶏小屋に向かって小走りに行き途中で止まってリスターに手招きをした。

リスターはそんな様子を見て笑ってシーを一撫ですると後でねと言って立ち上がった。シーは伸びをして欠伸をするとリスターを一瞥して散歩に行くのか優雅に尻尾を振りながら出掛けていった。

リスターが鶏小屋に着くとクロスが雄鶏に追いかけながら必死で卵を取ろうと戦っていた。

「クロス、先に鶏を外に出さないとつつかれて怪我するぞ。」リスターは笑いをかみ殺しながらクロスを助けようと鶏小屋に入った・

いつもより早い時間に家族全員がキッチンに揃い朝食を取っていた。2枚目のトーストに手を伸ばしバターを塗っている父にクロスは誇らしげに今日の卵とミルクは自分が取ってきたんだよ！と報告した。カージスは自分のコーヒーにはミルクが入っていなかったのでクロ

スのマグを覗き込み、

「そりゃ凄かったな。しかしよく牛達がクロスにお乳を搾らしたな。」とカージスはいいおかわりをくれとサニーにマグを差し出した。

リスターはクロスを見てニヤツと笑い頭をなでた。

「クロス、学校に行くしたくは出来たのか？」カージスはまだ熱いコーヒーをすすりながら尋ねた。

クロスはチラツと兄を見て兄さんが手伝ってくれたから大丈夫とモゴモゴと言った。

「リス、今日は初めての登校だからクロスと一緒に行ってやってちょうだい。」サニーはちょっと心配そうにクロスを見て言った。

解ってるよと言ってリスターは食べ終えた食器を持って流しに行く。クロスに早く食べないと置いてくぞと笑った。クロスは最後のトーストを一口で食べミルクで飲み込むとご馳走様と言って兄の後について走っていった。

2人はサニーに気をつけてと玄関で見送られると言ってきますと返し、登校した。

学校が近づくとしスターは足を止めクロスに何かあったり、虐められたら直ぐに兄さんに言うんだぞ！と言うと頭を撫で今日は一緒にクラスまで行くよと言って有無を言わさず行ってしまった。

教室に着き、クロスがそつと中をうかがうと自分と同年ぐらいの子達が12、3人位居た。

リスターが先に教室に入り教壇にたつと皆ビックリしてリスターに注目した。

「みんな、今日からみんなのクラスに仲間入りする弟を紹介するよ」
リスターは入り口にたたずむクロスを手招きして自分の横に立たせると続けた・・・

「俺の弟でクロスって言うんだ、今まで病気だったから学校には通えなかったけどすっかり病気が治って今日から此処で一緒にみんなと同じように勉強も運動もするよ、宜しくね」言つとクロスの肩をたたきクロスが頭をぺこつと下げる。

「うわゝこいつ目の色が緑色だぜ!？」

「ホントだ!!頭の色も変わってる!!」

2人の少年がビックリしたように声を上げるとクロスは悲しげに顔を歪め下を向いてしまった。

リスターが気が付き口を開くより前に少女が立ち上がった。

「やめなさいよ!!」言つて少女は2人の少年を睨み黙らせた。

クロスが驚いて顔を見上げるとその少女は紫に近い黒い髪が緩やかに波打ち瞳の色は前に見たとおり紫色をしていた。あの子だ!と思つて見つめていると少女は自分の髪をつまみクラスみんなに見えるように頭を振つて目を大きく見開いた。

「緑だからって何?ちつとも珍しくないじゃない。私が居た都では私だつて珍しくなかったわ!髪や目の色をからかうなんて幼稚よ!」少女は言い切ると2人を激しく睨みツンと背を向けクロスに歩み寄った。

「私の名前はセファン・ピアツチェ、皆からはセーラって呼ばれているわ。よこしくねクロス。」優しく微笑み手を差し出されクロスはおっかなびつくり握手を交わす。

手を握るとセーラもクロスの瞳を見つめ満面の笑みを浮かべた。その笑顔を見てクロスは顔が赤くなるのを感じた。セーラはそんな様子に気付かず2人の方を振り向き再び睨んだ。

「わ、悪かったよ、ちよつと珍しかったからさ・・・宜しくなクロス・・・だったっけ？おれはアンドレ・ダツチス…アンディーーて呼べよ。」アンディーーはぼそぼそと居心地悪そうにセーラをちらちら見ながら自己紹介した。

その様子を見てホッとしてリスターは既に顔なじみのセーラの頭を優しくなでながらありがとう。クロスを頼むよと言ってクロスの肩をたたきじゃあなと言って教壇からおり皆にバイバイと手を振りながら自分の教室に戻っていった。

クロスがホッと溜め息をつき振り向くとクラス中の皆がクロスの周りに集まっていた。クロスはビックリして1つ歩下がった。

「ホントだー見の色が緑ー！セーラやリスターさんとは違うね。」
「リスターさんにはあんまり似てないねえ」みな物珍しげにクロスをじろじろと見つめた。

「どけどけお前ら」そう言って割って入ってきたアンディーーを皆さつとどいて通した。アンディーーはクロスの目の前に立つとクロスをまじまじと見つめた。

「新入り！おれがこのクラスで1番偉いアンディーーだ。みんなおれの言う事を聞くんた、歯向かうなよ！おれの言う事に逆らったりチクッたりしたら唯じゃおかないからな！」言うたアンディーーは自分の握りこぶしを見せクロスの顔を殴る振りをした。

クロスはムカツとして自分の頬に触れるアンディーの手をはじいた。

「触るな。僕は誰にも従わないし、誰のいう事も聞かない。人を力でねじ伏せる奴なんて嫌いだ！」クロスはアンディーを睨んだ。

「何だと！？新入りおれに齒向かうのか？？」アンディーは顔を怒りで真っ赤にしてクロスの胸ぐらを掴んだ。」

去っていくリスターの後姿を見送っていたセーラが争う2人に気が付き2人の間にやめなさい！と言って割って入っていった。2人がセーラをはさんでにらみ合っていると教室に入ってくる担任のドアを開ける音がした。

「おはようみんな。おや？みんな集まって何をしているの？」担任の女教師が不思議そうに覗き込むとその中に転入生のクロスの姿を見つければ何やら険悪ムードをかぎつけた。

「クロス君もう来てたのね、アンディー！また虐めてるんじゃないでしょうね！」先生が怒ってアンディーを見るとアンディーは顔色を変えてクロス君と話をしていただけです。と猫なで声を出したそう。と満足げに呟き手を叩きみんな席に戻り名さーいと叫んだ。

アンディーはクロスに向き直り授業が終わったらなと涙みをかけて呟きクロスに体当たりをして席に着いた。教師はクロスの方に振り返り手招きで呼び寄せると自分のそばに立たせ皆に注目！と叫んだ。

「今日からみんなと一緒に勉強する事になったクロス君です。みんな仲良くするように！」言って教師が見渡すとみなハーンと返事をした。満足げに頷きクロス見向き直ると、

「一番後ろの窓から2番目の席が空いてるからそこに座って」と優

しく言って背中を押した。

クロスはハイ。と呟くと言われた席の方を見て隣に座る少年と目が合った。

少年は窓の外を見ていたがクロスが来ると振り返り優しく微笑んだ。クロスもつられて微笑み彼の隣に腰掛けるとジッと彼を見つめた。彼はダークブラウンの髪をしてよく外で過ごすのか綺麗に日焼けした顔をしていて瞳の色も黒に近い茶色だった。

クロスに見つめられているのに気が付くと彼は微笑み握手をしようと手を差し出した。

「はじめましてクロス。俺の名前はジェイルズ・グルマルディ。ジエイって呼んでくれ。」言って彼は笑ってクロスの手を握った。

「よろしく・・・。」クロスはさっきの事があったのでちょっと疑心暗鬼になっていた。

「さっきはごめんね」え？と言ってクロスが見つめると。

「さっきさ、止めようかなって思ったけどきみがどうするのか見てみたくなってさ・・・」言つとジェイはまじまじとクロスを見つめた。

「ホントだ、緑色だね新芽みたいに綺麗な色だ、うらやましいなあ。」

「ジェイは笑ってイスに横座りしてクロスに向き合った。」

「君度胸があるね、普通アンディーに睨まれたら怖がって言う事を聞くもんだ、さっきの勇氣は見事だったよ。」ジェイは微笑んで前を向いて座りなおした。

クロスは呆然として褒められた事に気が付きありがと。と言つて前

を向いた。

「みなさん。スペルの書き取りの宿題を回収します。やってきましたね？一番後ろから集めてきて。」パンパンと手を叩き先生はみんなを見渡した。

クロスは宿題なんて聞いてない！とビツクリして辺りを見回した。

ジェイがすつと手を上げて、先生を呼んだ。

「何ですか？ジェイムズ？」

「先生、クロスは宿題なんて聞いてないと思うんですけど…彼はやって無くて構いませんよね？」ジェイは心配するクロスを気遣って代わりに聞いてくれたのだ。

「そうね、クロスにはまだ言っていなかったのだから構いませんよ。それからジェイムズ、クロスに授業の進み具合を教えてあげてちょうだい。クロスも解らない事が沢山あると思うから簡単な事ならジェイムズに聞くように。」先生はあっさりと言い黒板に向き直り授業を始めた。

「・・・あの、ありがとう。」クロスはジェイにこそつとお礼を言うとしてジェイはスクツと微笑んだ。

「おい、お前ラッキーだなジェイはクラスで一番頭が良いんだぜ。IQとかいうやつが凄い高いんだってよ。」クロスの通路を挟んで反対側に座る少年がこそそと話しかけてきた。

「おれルーザー・フォルローって言うんだみんなにはルーって呼ばれてるよろしくな！」よく見ると彼はさっきアンディーと一緒になつて自分をからかった奴だった。クロスはむっとして彼を睨んだ。

「おいおい睨むなよ、さっきは悪かったな。緑色なんて珍しかったからさっ……お前さっきホントにアンディーと喧嘩するの？やめとけて勝てやしないぞ！」ルーは許してもらいたいのかクロスに早口でまくし立て助言をした。

「別に、話して解らないならそうするつもりさっ。」クロスは早口で言うつとジェイにごめんね、勉強教えてといつて机をくつつけた……。

学校つて意外とつまんない……授業の内容はもう兄さんが教えてくれてた事だし、さっきからアンディーって奴はチラチラこっち見て睨んでるしなあ……

クロスは黒板をボーッと見ながら教科書をぺらぺらめくり最終章まで読み終わっていた。

「授業つて退屈だろ？」クロスのつまらなそうな表情を見て感じたのかジェイがノートを見せるふりをして話しかけてきた。

「うーん……じつは家に居る間にあらかた兄さんから教わってたんだ……だから退屈で。」申し訳なさそうに笑つてクロスはジェイに正直に話した。

「そうなんだ、実は俺も授業の内容はもう全部終えたんだ……」
「えー！ジェイ君つて凄いね、IQが高いつてそういう事なの？」クロスは賞賛の眼差しでジェイを見つめさっきルーに教えてもらった事を早速尋ねた。

「IQね……俺にも良く解らないけど……IQとはIntelli

g e n c e Q u o t i e n t , 知能指数の略だよ通常の人を100としたらその数値が僕は150あるらしい…通常の入学試験をしたらその数値が割り出されるんだよ。君は試験を免除されたらしいね、ひょっとして理由は僕と同じなんじゃないかって思ってるんだけど？」

「見るからに君には人外の血が流れている・・・ひょっとしてエルフか、人狼・・・まさかドラゴンって事は無いだろうけどね。」ジエイの告白・・・探るような瞳にクロスはドキツとして身を引いた。

「さあ…僕も詳しくは知らないよ。ただ、家に居る間に兄さんに勉強を教わってきたんだ・・・。」

クロスは探るようにじっと見つめるジエイの視線で訳も無くドキドキした・・・

「IQつてのは精神年齢も意味するんだ・・・」

そう言つて意味深にニヤツと笑うと何事も無かったように授業に集中した。

エルフ？人狼？？ドラゴンだつて？？そんな話聞いた事も無いや・・・そう言えば僕の目の色は御爺様譲りだつて・・・精神年齢・・・兄さんに聞いてみなきゃ・・・。

そう言えば僕の御爺様御婆様つて生きてるのかな？会った事無いや・・・会つてみたいな・・・

そんな事を取りとめも無く考えていると授業の終わりを告げる鐘が鳴った。

「おい！緑目のちび！さっきの続きをやるうじゃないか！？」机に乱暴に手をつかれ見上げるとアンディーが脅すように見下ろしている。

ハアと溜め息をつきクロスは立ち上がった。

「アンディー・・・話し合いで解決は出来ないの？」

「話し合いだ？勝てないからって急に怖くなったのか？・・・みんなの前でさつきはごめんなさい。何でも言う事聞きますよ」って言えば1つ発殴るだけで許してやるよ！」アンディーは馬鹿にするように笑いおいみんな！！クロス君が言いたい事がアルってよ！と大声で注目を集めた。

「ハア・・・そうじゃなくて・・・」

「やめときなクロス。そいつは頭が悪いから言ったって理解できないさ。」隣で座ってみていたジェイが机に足を掛け笑っていた。

「何だと！！ジェイ！ジャマをするとお前だって容赦しねえぞ！！」こぶしを振り上げ今度はジェイを見下ろしアンディーは凄む。

そんなアンディーをせせら笑いジェイは立ち上がり凄むアンディーに視線を合わせた。

「誰が誰を容赦しないって？」

「アンディー・・・俺に喧嘩売ってんのか？」

ジェイに見つめられアンディーはドキツとして視線を逸らすとお前には関係ないだろ...とぼそぼそと話すとクロスに向き直りどうするんだよ！と再び喧嘩を吹っかけた。

クロスは2人の様子を見つめていたがアンディーが諦めていないようなので此処じゃよくないから2人で話をしようとアンディーに告げるとさっさと教室を後にした。

クラスメイト達は好奇心と心配で2人を静かに見ていたが2人が居なくなるとざわざわと先生に言うだの見に行こうぜだのと話し出し

た。

セーラも心配げに2人を見送ったがジェイがそつと近づいてきてクロスの兄さんに報告したほうがいいんじゃないの？と耳打ちするとセーラはハツとしたようにジェイを見るとそうよねと言って目をキラキラさせ言ってくるというと踵を返し高学年のクラスに走って行った。

2人は校舎と教会の狭間に来ていた・・・

「おい！何処までいくんだよ！！」アンディーは早足で歩くクロスに小走りになって追いかけていたので苦しそうに呼び止めた。

クロスは振り向きアンディーと向き合った。

「君は最初っから一体何が気に入らないんだ？」

「はあ？今更なんだよ・・・これが話し合いで解決ってやつか？」
「そうさっ僕は暴力で物事にけりを付けるなんて好きじゃないんだ。それに父さんから暴力はいけないうって教わったんだ。」

「暴力は嫌いってのは決まって弱虫がいう言葉さっお前の親父も同類だ！！」

「・・・取り消せ・・・」

「はあ？なんか言ったか？？」

「取り消せって言ったんだ！！僕の事はともかく父さんは関係ないだろ！？今の言葉取り消せ！！」

「うるさいなあ！かかって来いよ神父の弱虫息子！！」

「・・・ちゃんと忠告したからな！！もう許さない！」叫んでクロ

スは先手必勝とばかりにアンディーに飛び掛った。

突然襲ってきたクロスに驚きアンディーは押し倒され馬乗りになったクロスに殴られた。

アンディーは自分より小さなクロスに殴られそのパンチ力の強さに頭をくらくらさせながらも怒りに顔を赤黒く染めクロスを突き飛ばそうと躍起になった・・・

一方セーラはクラスを飛び出しリスターのクラスに向かって走りこみリスターを見つけると事のあらましを息を絶え絶えに叫び2人が出て行ったと報告した。

リスターは驚きセーラに案内してと言うとセーラの手を取り教室から慌しく2人を探しに行った・・・

道中2人が行きそうな所を考え校舎裏や教会前を探し回りやっと2人を見つけた。

「クロス！アンディー！」セーラは2人の姿を見つけるとビックリして叫んだ。

「クロス・・・」

何とクロスが自分よりも体の大きなアンディーに肩を貸し歩いてきたのだ。

リスターはビックリしたが2人が思ったよりも大した怪我をしていなかったので安心して2人の下にやってくるとクロスからアンディーの身体を引き取り背におぶるとアンディーにケガは？と優しく尋ねた。

アンディーは顔を左右に振ると大丈夫です。でも足が痛い・・・と弱弱しく呟いた。

「そうか・・・大した事無くて良かった。クロスお前はケガは？」
「・・・口の中を少しきつたけど後は平気。アンディーは足をひねったんだと思う・・・」クロスも怒られると思ったのかもぞもぞと話した。

「2人ともとっても心配したのよ！！喧嘩だなんて馬鹿みたい！！」
「セーラはしゅんとする2人に追い討ちをかけるように説教をして4人が医務室に行く道中ずっとクドクドといかに喧嘩が馬鹿馬鹿しくみんなが心配したかを熱く語った。

医務室に付くとリスターはアンディーをベットに寝かせると膝、肘や顔に付いた小さな擦り傷に消毒して足首には変な臭いのする軟膏をたっぷり塗ると清潔な白い布で覆い包帯を巻いて固定した。
その手際は良く今度はクロスに口を開けさせると様子を確認し大丈夫といった。

「まあ2人とも大したケガじゃないし大丈夫だろう、アンディーは足を挫いていると思うから念のためお医者さんに行くんだぞ。これに懲りて喧嘩なんてしないように！」リスターは2人にきつく言う自分はまだ午後に授業があるからと言って部屋を出て行ってしまった。

セーラは2人に向き直り口を開いた。

「もういいって・・・わかったよセーラ！」アンディーがもうゴリと言わんばかりにセーラより早く叫んだ。

「・・・うんもう僕ら反省したよ、セーラ心配掛けてごめんね。」
セーラは腰に手をやりわかったわよと言うとアンディーの痛む足を
軽くていっと叩き痛い！と叫ぶアンディーを見るとフンと鼻息荒く
イスに座った。

「・・・悪かったな・・・」

「え！？」

「悪かったなつて言っただんだ！」

「ああ・・・僕もごめんね、頭に血が上つて君に怪我させちゃった・
・・・」

「お前見かけの割りに強いな・・・おれが誰かにやられたのジェイ
以来だよ・・・」

「えっ！？ジェイって勉強だけじゃなくて喧嘩も強いのか？」クロス
はビックリしてアンディーを見た。

「馬鹿ねえ。ジェイは強いんじゃないよ。」セーラが訳知
り顔に話にわって入ってきた。

「どういう事？」クロスが2人を代わる代わるに見るとアンディーが
渋そうな顔をしている。

「あいつは手なんて上げないんだ。おれをさんざん怒らせておれが
殴りかかろうとするとひょいって避けるんだ。おれはあいつを殴ろ
うと必死になつて追いかけて疲れたところであいつがフラフラのお
れを蹴っ飛ばしておれは倒れて頭を打って気が付いたら此処に寝て
たんだ・・・」

「で、同じように付き添つてた私にジェイが何度やっても同じ。俺
には関わるなつて言っつけて言つたのよ。」セーラは腕を組みフ
ンと鼻息を鳴らしアンディーを睨んだ。

「そうなんだ・・・」クロスは呟き手近のイスをアンディーの傍に引っ張っていき座るとアンディーをじっと見つめた。

「な、なんだよ。」アンディーは不安げにクロスを見上げると目が合った。

「今日から友達だよね？」クロスはにっこりと笑うとアンディーに言った。

アンディーは啞然としている。

「だって喧嘩したし、仲直りしたし、もう済んだんだからもう一度さいっしょっからやる？」

言うとクロスはアンディーの手を握り始めまして僕クロス。よろしくねと言って握った手をぶんぶん振った。

「ははは・・・！」アンディーは笑うとおれアンディーよろしくな！と言って手を強く握り返した。

クロスもつられて笑い今日から友達だ！！とさけんだ

セーラはまったく呆れちゃうわと言いながら一緒に笑い2人の繋いだ手に自分も手を乗せ私セーラ仲良くしましょとおどけて言った・・・

3人は医務室で友達になり笑いながら教室に鞆を取りに行く廊下の途中で心配そうな表情をしたルーとベンチに座り本を読んでいるジェイが居た。

ルーが先に気が付きあつと声をあげジェイの肩を叩き2人は3人の鞆を持ってきた。

3人の様子を見てルーがいかにか心配したかを捲し立てたがジェイが

それを遮り何も言わずアンディーを見るとニヤツと笑い負けたかと言った。

アンディーはああ…と呟くとルーは信じられないという表情をしてクロスを見た。

セーラが本当よと言って鞆を受け取ると帰りましょと言ってみんなを促した。

ルーに荷物を持たせアンディーは事のあらましを聞かせてとねだるルーをを無視しながら先にたって歩いて行った。

セーラがこそこそとルーに説明してその少し後ろをクロスとジェイがついて行った。

「やっぱりね、君なら負けないって思ってたんだ。」ジェイは笑って言うくとクロスの肩をたたき今日から君も仲間だねと言って笑った。

クロスは自分にも友達が出来たことを嬉しく思い肩を叩くジェイを恥ずかしげに見るとよろしくとはにかんだ……

成長2（後書き）

成長2終了です・・・長かった@@@
アンディー・ジェイ・ルー・セーラ
クロスの産まれて始めての友達です。

成長3

・・・・クロスは生まれて初めて落ち着き幸せな日々を送っていた・

クロスは休日以外は毎日学校に通い放課後はアンディー・ルー・セーラ・ジェイと共に過ごし、共に成長していった・・・

クロスは初めてセーラに会った時彼女だけが自分に近い存在で彼女だけには自身の容姿についての悩みを打ち明ける事が出来ると思っていた。

初めて彼女と2人だけになった時クロスは思い切って悩みを打ち明けた。

僕は家族の誰とも似ていない気がする・・・兄さんと父さんはまったく同じ髪の色、瞳の色なのに僕は兄さんみたいに綺麗な髪の色でもないし、目の色は緑色・・・悲しいぐらい母さんにも似ていないし、もしかしたら僕は貰われっ子なのかも知れないと・・・するとセーラはそんなクロスの一大決心の告白を笑って一蹴した。

家族に似ていないからって何故そんなに悩むの？

神父様とリスは貴方が思うほど似ちゃいないわ！

神父様の瞳は群青って感じだけどリスの瞳は良く晴れた青空の様だわ・・・セーラは晴れた空を眩しげに見上げると笑ってクロスを見た。

それに貴方の瞳の色だけどまだ会った事の無い御爺様にそっくりな
んでしょ？前にリスが言ってたわ・・・貴方の・・・貴方の瞳の色
がとっても美しいって・・・

それを聞いたクロスはその言葉にとっても感動してセーラのライラ
ックの様な瞳もとても美しいよと褒め頬をピンク色に染めたセーラ
の愛らしい顔を見てそしてその優しさに惹かれたのだった・・・

クロスはアンディーやルーと遊ぶときは秘密の隠れ家を作ったり、
筏を作って村の中心を流れる川を下ったり時には裏山でキャンプし
たりと楽しんだ・・・

しかし、ジェイは・・・ジェイだけはクロスにとっても特別な
存在だった・・・

ジェイにはリスターにすら打ち明けられない事も打ち明け2人は本
当の親友になるべくお互いをとっても大切な存在として他の3人とは
別の友情を育んでいた・・・

幾度と無くクロスは自分がセーラに恋をしているのではと真剣にジ
エイに打ち明けた。

しかしジェイの答えはいつも決まっていた。

クロスのセーラに対する思いはただ他の女の子達よりも身近に感じ
ているだけでそれは恋ではないと・・・本当の恋をしたらきつとそ
の違いがわかるはずと・・・

そう言われると決まってクロスは恥ずかし紛れにジェイは本当の恋

をしたことがあるのかと何度も問い詰めたがいつもはぐらかされ俺が恋をしていそうな相手がいると思うか？とかわされてしまつて齒がゆい思いと好奇心をそそられた。

2回目の春が過ぎいつもと同じメンバーで過ごし、村には大きな変化も無く穏やかに時は過ぎて行つた・・・

兄リスターは12歳になった。

この時からであろうか、リスターは放課後家に帰つてくると父の書斎と一緒に籠り夕食後には父について家を空ける様になった・・・

クロスは自身が仲間外れにされているように感じいつも自分も連れて行つて欲しいと懇願したがまだ小さいから無理だと冷たく突き放され2人が出掛けていく前から不機嫌顔でリビングやキッチンをウロウロしサニーになだめられるという日を過ごしていた。

クロスには良く解らないがリスターの話を聞く限り特殊な剣術を学んだり学校では教えてもらえないような勉強をカージスとしているらしかつた・・・

そんな日々が続きクロスはあまり置いていかれる事を気に止め無くなつて行つた。

クロスにとってはいつか自分も入れて貰えるはずという確信も持っていたし、ジェイの家に泊まりに行つたりする事の方が楽しかったからだった・・・

それから幾度と無く季節はめぐりまた春が来て少年達は日々日々大人になって行った……

トウリーとジーンは1年に1、2回は村を訪ねてきてクロス一家にたまの来客としてもてなしを受け暫く滞在をしていた。2人はまだ見ぬ都の様子を話して聞かせたりクロスとリスターに剣の稽古をつけたり体技を教えてくれた。

クロスにとって彼らはとても特別な存在で中々会えなかったが本当の家族のような存在だった……

更に時が過ぎもつすぐクロス自身もの12回目の誕生日を迎える頃17歳になった兄リスターがあまり家族の前に姿を現さなくなりいつも自分の部屋に籠って過ごすようになった……

相変わらず父との夜間の外出もあったが昔ほど頻繁ではなく月に1、2回という程度だった……

クロスは兄にあまりかまってもらえない事が寂しく幾度と無く兄の部屋をノックしたがリスターからは冷たく今は忙しいから後にするようにと突き放されてしまった……

両親はそんなリスターの様子を心配している様子は無くクロスにリスターのジャマをしないようにと言う事が度々であった……

クロスは誕生日を待ちきれない様子で過ごしていた、今まで仲間に入れてもらえなかった父と兄の授業に自分も入れてもらえるはずだ

からだ。

最近急に伸びてきた身長はクラスの仲間の中でも比較的高いほうで授業の内容はリスとジェイのお陰もあっていつもトップクラスであった。

しかしただ悲しい事にセーラも大人になり自分達とはもうあまり一緒に過ごす事はなくなっていた。

そしてクロスも気付いてしまったのだ・・・どうやらセーラの美しい瞳によく映っているのは自分ではなく兄リスターであるという事を・・・

この事実に気付いたとき真っ先にジェイに報告したがジェイには今更気付いたの？遅すぎ！と笑われてしまった・・・

しかし不思議な事に胸はそれほど痛まなかった・・・相手がクロス自身何よりもカッコいいと尊敬している兄であったからである・・・

セーラに何気なくそれを仄めかした時セーラは今まで自分に見せたことの無い輝く笑顔で恥ずかしそうに頬を赤く染めリスターには内緒よとクロスに胸の内を語ってくれたのだ。

クロスはなーんだとあっけらかんと思ひ意外とセーラの気持ちを聞いたけどそこまで悲しく思わなかった事をジェイに打ち明けるた・・・ジェイは笑ってだから恋じゃないって言っただと優しく肩をたたききつと君の心を奪って離さない様なそんな子がいるさと慰めてくれた。

そして遂に待ちに待った12歳の誕生日の朝を迎えた・・・

覚醒（仮）

クロスの12歳の誕生日・・・今日は休日である。

クロスにとっては毎年やって来る特別な日である・・・家族・友人達にお祝いしてもらいまた一つ大人になった事を実感できるのである。

朝、クロスはいつもより早く目覚めた・・・

跳ね起きるようにベットから飛び出し窓を開け放つ・・・5月の初夏の香り漂うピリリとした朝の空気を胸いっぱい吸い込み深呼吸・・・やっと12歳になったんだ！（正確にはクロスが生まれたのは夕方であるが…）

くるっと振り返って自分の部屋を見るとシシーがクロスの部屋に入ってきた・・・

気のせいであろうか？今シシーがクロスを見てニヤツと笑ったように見えた・・・

まさかね、シシーはいつも笑ってるように見えるからかな？？おいでと言ってシシーを抱き上げお早う！と朝の挨拶をする。するとシシーはいつもの様に甘えてニヤーと鳴くその声が可愛くてクロスはギュッとシシーを抱きしめホウズリしながらシシー可愛いね愛してるよ、と言うとシシーは迷惑そうにニヤーと低い声を出し、するりとクロスの腕の中から抜け出し走って逃げていった・・・。

シシーったら冷たいな・・・誕生日なんだからもっとサービスして

くれてもいいのに@@@

ブツブツ言いながらさっさと着替えを済ませキッチンへと急いでいった。

・・・「お早う母さん！！」階段を早足で下りながら朝食を忙しげに用意している後姿の母に向かって大声で呼ぶ。

「あら、早いわねクロス。お早う。それと・・・ハッピーバースデー」サニーはエプロンで手を拭きながら振り返り笑顔でクロスにお祝いを言った。

「ありがとう母さん！だーい好き！」言ってクロスはサニーを抱きしめる。

「ふふふ、今日は特別な日だから朝のお仕事は免除よ、顔洗ってきなさい。あと、お父様とリスが書斎で待ってるわ・・・行つてらっしゃい。」そういつて背中を押す母の顔は何故だか少し曇っており寂しげに見えた・・・

「???うんきつと例の話かな?やつと仲間に入れるよ!」言ってクロスは母の顔色など気付かずにスキップして洗面所へと向かった・・・

やつと父さんと兄さんの大人の男の仲間入りが出来るぞ!難しい歴史の話や、近隣諸国の話し、この大国についても詳しく教えてくれるのかな?

クロスは楽しみで顔が思わずにやけていた。いつもより念入りに顔を洗いこっそりとリスターが使っている花を煮詰めて抽出した保湿成分の液体を顔に塗った。

自分の顔に大きな変化ないかと見回してみたがあいにく髭の生え始

める様子もなく顔は昨日と同じようにつるりとしていた。

心なしか瞳の色が濃くなつたような気もする・・・まあいつか。自分の目をまじまじと見つめ父と兄が待っているのを思い出し急いで書斎に向かった・・・

・・・コンコン・・・

「入りなさい。」父の厳粛な声を聞きクロスはさっきまでのワクワクした気持ちから一気に緊張して柄にも無く入りますと声をかけそつと重い扉の金色のノブを回し室内に入った・・・

父の書斎は窓が開いておりレースのカーテンが初夏の風に揺れ室内をさわやかなピリリとした空気が包んでいた。

窓の前には大きなダークブラウンの机があり其処が父の指定席であった。室内の両側には造り付けの天井まで届く大きな本棚があり其処はほんの少しの隙間以外全て本で埋め尽くされていた。

クロスが室内に入り扉を閉め振り向くと父カージスはデスクに座り何冊もの本を机の上に置きその内の一つをペラペラと捲っていた。中央にあるやや色褪せ柔らかくなったライトブラウンの皮のソファは対になっておりその一つに兄リスターが深く腰掛け足を組んで入ってくるクロスを見つめていた。

久しぶりに見た兄はやややつれ全体的に痩せておりいつもの輝く様なオーラが影を潜めていた。

「兄さん・・・」その声を聞いてカージスはクロスの方を向き立ち上がるとソファを指した。

「クロス、よく来たね、さあ先ずは掛けなさい。」クロスはハイ父

さんと小さな声で返事をする。リスターの向かいのソファに腰掛けた。

そのソファはいつも父が居ない時シシーと寝転がったり昼寝をしたりするクロスのお気に入りだったが今日は居心地がいいとはいえなかった。

座って気付いたのだがソファの間の背の低い楕円のテーブルには深緑のベルベットの生地が何かの上に覆い被さっている様にこんもりと膨らんでいた。

「誕生日おめでとうクロス。それが気になるだろうけどまずは父さんの話を聞いてからね。」クロスがじつと見ているのに気が付いたリスターが微笑み身を乗り出してクロスの頭をなでて言った。

クロスは小さな声でハイ。とだけ言う。リスターの隣に座った父を見上げた。

「さてと・・・まずは誕生日おめでとうクロス。父さんも母さんもお前が健康で成長した事を心より嬉しく思っているよ、今晚はお前の誕生日パーティーだ、母さんが頑張ってお前の好きなホワイトチョコのケーキを作ってくれているよ。」そういつてカージスは嬉しそうに微笑むと同じように身を乗り出しクシャッとクロスの頭を撫でた。

クロスも嬉しそうに笑うとありがとう。と言うと少し姿勢を崩し父の話を聞くのに辛くない態勢に座りなおした。

「・・・さて、クロス。お前も不思議に思っているだろう、何故12歳の誕生日をこんな風に大げさにするのか・・・リスターのとき

の様子を見ていて気になっていただろう。」クロスは父の言葉にただコクコクと頷いた。

「・・・今まで打ち明けるのを躊躇っていた訳ではないのだが・・・クロス。今からする話はとても重要だ、心して聞くように。」言うとかージスは改まった表情でクロスを見つめた。

「・・・クロス、我々は、我一族は血筋正しき古き血族のドラゴン族なのだ・・・。」いってかージスはクロスの反応を待ったがクロスは驚いたのか何も言わず口をあけてかージスを見ている。

「・・・気付いていただろうか？きつとお前も不思議に思っていたはずだ・・・何故、5歳までの記憶が曖昧なのか、何故5歳を過ぎてから頭の中がはつきりし、自身の中にまた別の人格の様なものが存在するのか・・・何故自分は同世代の友人と同じように考えられないのか・・・。」

するとクロスは激しく頭を上下にふり興奮の面持ちで捲し立てた。

「そうなんだ！！僕・・・僕ずっと悩んでいた！だってみんなと同じように思ったり考えたり出来ないんだ！！勉強に関しても皆みたいに思えないし、同じ目線で物事を見たり感じたり出来ないんだよ！・・・いつもどっか冷めてるんだ・・・。」ぼそつと呟き下を見つめる。

「でもだからって自分が人間じゃないなんて・・・そんな事・・・そんな事今更ありえないよ・・・。」

「・・・無理も無い、私達だってお前にそう思わせた事もないし、他の子供と同じように育ててきた。」言うとかージスは立ち上がり

自分のデスクより小豆色の古びた丸まった巻物を持ってきた。

「・・・これを見てごらん。」言つと巻物を開きテーブルに載せ皺を伸ばした・・・

それは古び、何の染みか解らない物が所々に付き中の方は古く今にも破けそうになっていた。

「これは？」何かの文字が書いてあるがインクが擦れていたりして読みにくい。

「これは我が家の家系図だ・・・此処を読んでごらん。」

カージスが指差した所を見ると色褪せていたが美しい色彩で凝った飾り文字が書かれていた。

読みにくかったが一つずつ読んでみると其処には父の言葉を裏付ける内容が書かれていた。

「・・・我ら神に選ばれしキュアノスのドラゴン・神の法によつてプラーシノのドラゴンに永久の忠誠を誓う・・・」

「それと此処も・・・」カージスが指差した比較的新しい紙で出来ている所を読むと其処には幾つか枝分かれしていたが直線の線で結ばれた先に父の名前其処の横に母の名前があった。

「・・・クロス・・・私たちは古き血族キュアノスのドラゴンなのだ。」今度はしっかりと自分の目を見ているクロスに確信を込めて話す・・・

「我らドラゴン族は見た目こそ人間と同じように見えるがしかしこれは古代に我らの先祖が神と誓約を交わしたからなのだ・・・しかし、外見が人間に見えるからと言ってまったくの人間と言うわけではない。その中身はれっきとしたドラゴンなのだ・・・。」

「我らは5歳まで眠りの日々を送るこれは人間の姿を纏うために負うリスクの様な物だ。ドラゴンである己と人間の姿が完全にリンクするまでまどろみ、自身の真実と向き合うのだ・・・。そして目覚めた事を覚醒と言う其処からは人と同じように成長できるが古き血が流れているため通常の人間の子と同じように内面が成長できない。心はドラゴンとしての成長をするんだ・・・貪欲に知識を求める」

「そして12歳・・・この日を境にドラゴンとしての真の瞳が開かれる・・・第2の覚醒だ・・・今日鏡で自分の瞳を見たか？一番深い色の周りに星が・・・白い斑点が出たはず。それが証拠だ・・・。」
クロスはハツとして自分の顔に手をやって思い出した。今日自分の目の色に何か違和感を感じた事を・・・それでか。と思い父に意識を戻す。

「そして、体の1箇所“逆鱗”と呼ばれる場所が出来る。それは鱗だ・・・ドラゴンの鱗が1枚だけある・・・リスクロスに見せてあげなさい。」カージスが促すとハイと言ってリスが上着を脱ぎ二の腕をそつと見せた。

クロスはハツとしてその箇所を見た・・・それはまるで宝石だった・・・青・・・水色・・・？兄と同じ瞳に輝く鱗は光に反射してキラキラと光った・・・
なんて綺麗なんだろう・・・自分の逆鱗は何色なのかな？

「後で探してみるといい。逆鱗は瞳と同じ色をしているそれがお前

のドラゴンとしての姿になった時の真実の色だ。」「クロスの思いを察したようだ・・・。

「そして、12歳になると人間としての姿をとどめておく事が難しくなる・・・感情のコントロールが難しくなるのだ・・・他人が“逆鱗”に触れたり、憤怒の感情が爆発するとドラゴンの姿に戻ってしまう・・・」

「・・・そうならない為には鍛錬・そしてドラゴンである己を知っていかねばならない・・・」そういつてカージスは自分の首にかか
るネックレスを服の上から握り締めた。

「・・・そうだったんだ・・・だから父さんと兄さんは秘密の勉強をしていたんだね・・・」そういつてクロスは力なく微笑むとリスターを見つめた。

「すまなかったな、クロス・・・父さんと約束したんだ：お前が12歳になるまで秘密は守るって・・・それがお前を守る事になると思っただから・・・。」リスターは申し訳なさそうに俯いた。

「・・・違うよ、兄さんを責めたいんじゃないよ・・・ただ、やっ
と色々納得が行ったんだ・・・」

「そうか・・・クロス、これ俺からの誕生日プレゼントだ、何日も寝ないで作ったんだ付けてくれ。」

リスターは深緑のベルベットに包まれた物をクロスに渡した。

「ありがとう兄さん・・・」クロスは嬉しそうに微笑み包みを開けた・・・

・・・これ！驚いたクロスが兄を見ると照れくさそうに笑いながら着けてみてと催促した。

クロスがいそいそと首から下げるとクロスの中で何かがうずめきカチリと何かが嵌った様に思えた。

不思議そうに眼を上げると心配そうにこっちを見つめている父と兄の眼と視線が合った。

「変な感じはないか？体が拒否するような？首が苦しくなったり、頭が痛いとか？？」心配そうにカージスが早口に尋ねた。

「・・・大丈夫・・・何とも無いみたい…むしろピッタリ嵌ったような・・・自分の一部の様な・・・」

「・・・そうか、よかった・・・それは瞳の石・・・お前の力を抑制して制御できるようにする為のものだ。」

「・・・クロス、我々ドラゴン族は魔力を使う。その力の源はおまえ自身から湧き出てくる。しかし自身で制御できなければそれはただの危険な物でしかない。物を破壊し、命を奪う・・・しかし瞳の石を身に付けていればその力をコントロールし、真の姿に戻る事も無い。石の色をもらん？お前の瞳とまったく同じ若草の様だろう？」

言われてクロスは兄のくれたネックレスをまじまじと見つめた。それは緻密に細工された銀細工で出来ていた。美しく光る大きな緑色の石がありその石を囲むように薔薇の蔓が延び精巧に彫られた薔薇の花が添えられていた。

「兄さん・・・こんなに綺麗なもの・・・ありがとう僕一生大切にするよ！！」

クロスにそう言われリスターは嬉しそうに微笑み白い顔にうつすらと紅がさした。

「そのネックレスはリスターが寝ずに自身の魔力を注ぎ込み作ったものだ、他人の力では外せず、お前が外したいと心で思うだけで外れる。もしもなくても心で思えば通じ合い何処に在るのがわかる。」

「どんな事があっても無くしてはいけないよ、それはおまえ自身でありリスターの愛情なのだから・・・」父は厳かに言うと言ち上がった・・・

「まだまだ伝えねばならない事がたくさんあるが今日は誕生日、免除してやろう。しかし、明日からは放課後夕食前に書斎でドラゴンについての勉強だ・・・覚えねばならない事は沢山在る。歴史、魔力、他の民族について・・・中でも一番大切な事が魔力だ。それは夕食後外で教えよう。」言うときージスは嬉しげに微笑み頑張れよと言ってクロスの肩をたたいた。

「父さんは厳しいぞ！解らない事が在ったらなんでも聞けよ、いつも兄さんが傍に居るって事を忘れるな！！」リスターもクロスの傍まで来て隣に座るとギュツとクロスを抱きしめた。

「さあ！朝ごはんだ！！母さんが痺れを切らして待ってるぞ！！」カージスはパンと手を叩き2人を部屋から追い出した・・・

部屋から出てクロスはホツと溜め息をつき兄を見上げると

「兄さん本当にありがとう、僕取っても嬉しかった！」キラキラと瞳を輝かせて兄を見つめた

「気に入ってもらえて良かったよ、普通は先祖代々のお古を使うんだけど、クロスのは特別に俺の手で作ってたんだ・・・石はお古だけだね」リスターも嬉しげに笑いさあ母さんの所に行って披露しようとクロスの背中を押した。

・・・2人がキッチンに入ろうとするとシシーがやってきて甘えた声でニヤーとクロスの足に擦り寄った。

「シシービツクリするぞ！僕ねドラゴンなんだって！！」クロスがシシーを抱き上げて嬉しそうに報告するとシシーはじっとクロスの目を見つめた。

「・・・そんな事は他人には秘密にしなさいって習わなかったの？それに私はずっと知ってたわおちびちゃん」何とシシーがクロスに話しかけた。

自分がドラゴンだと言われたときの様に驚き口をぽかんと開けるクロス・・・

「そんな風に口を開けているのは見つとも無くってよ、今まで内緒にしていたけど私はただの猫じゃないの、貴方と同じように話せるし魔力も持つてる。以後気をつけてちょうだいね」

シシーの突然の変化に急いで口は閉じたもののまだ衝撃から立ち直れない・・・

「大丈夫かクロス？シシーも人じゃない猫が悪いな・・・驚かせるようなタイミングで言わなくても・・・」そう言くとクロスからシシーを抱き上げて肩に乗せる。シシーはニヤーオと鳴きリスターに頼ずりして

「ずっと楽しみにしてたの、やっと言えて楽しかったわ」想像以上の反応だったしね。」シシーはクロスを見下ろしてニヤリとした・・

・・・僕・・・母さんが鬼だつて言っても信じれそう・・・クロスはハァーと深く溜め息をつき今までいかに自分が無知であつたかを痛感した・・・

2日前（前書き）

こちらはクロスの誕生日の2日前のお話

ローズのお話です。

2日前

・・・ローズは城の中庭に位置する自身の庭で木製の揺り椅子に座ってまどろんでいた・・・

眠っていたのではない、考え事をしていたのだ五月の少し強くなり始めた日差しに目を開けているのが辛くなり瞼を閉じ暖かい日差しと少し冷たい風を感じていた・・・

すると突然涼しく感じ眼を開けると白いパラソルを持ったフィリオと目が合った・・・

「ローズ様、お昼寝でしたら室内へ行かれては？日焼けしてしまいます。」フィリオは心配そうに覗き込む

ローズはふつと笑って上体を起こし眠っていたわけではないのと言って椅子に座りなおした。

「考え事をしていたの・・・」

「・・・ねえフィリオ、私ももうすぐ12ね、第2の覚醒を迎えるわ・・・それが恐ろしいようで楽しみなようで・・・」言ってまた考え込むように睫毛を伏せる。

「ローズ様・・・覚醒の件、あまり考えすぎぬほうがいいかと・・・

「

「・・・無理よ・・・貴方は男だからきつと分らないわ・・・私は女。女のドラゴンなんて存在しない・・・プラーシノの女のドラゴンなんてどんな書物を読んでも存在しないのよ！」ローズは覚醒してからの悩み事をフィリオにぶつける様に話し始めた。

「何故私だけが・・・何故私がプラーシノの血を受け継がなくてはならないの??普通プラーシノを受け継ぐのは男性だけのはず・・・女性がプラーシノの血を受け継ぐなんて聞いた事も無いわ・・・」

「ローズ様・・・それは・・・きっと神の決めた理由があるのですよ。」

「理由って?お父様がなくなってこの国には正統なるプラーシノを亡くした・・・私には確かにプラーシノの血が流れている普通ならそこまでのよ。それで終わり。」ローズは自嘲気味に笑う。

「書物で読んだわ、太古の昔ドラゴン族は神との誓約を交わした、今となつては全貌を知る術の無い誓約・・・唯分かっていることはドラゴン族はその古き血を男には継承できるが女には継承されない・・・女はあくまでもドラゴン族ではあるけれどドラゴンの子孫を残す事も出来ない。始の覚醒を迎えても2度目の覚醒はない。逆鱗は存在してもドラゴンの姿を得ることは出来ない・・・」

「・・・間違っているかしら?」

ローズにキツク言われフィリオは目を逸らし“いいえ”と答える・

「けれど私はなぜかしら？ プラーシノなのよ・・・何故？ 女はプラシノはおるか真実の姿にもなれない。魔力は存在するが極めて乏しい・・・。」

「フィリオ、苦しいのよ、神は私に何を求めるの？ 叔父様がいらつしやるのに何故私をプラシノにしたのかしら？・・・」

「・・・ローズ様、おつしやる通り我が国は正統なるプラシノを失いました。貴女様が御生まれになったその日の夜です。そして継承されるであろうお方であつた貴女様のお兄様も・・・」

「・・・ええ・・・お兄様・・・私の双子のお兄様。生きていらつしやったら私の瞳の色も違ったのかしら？・・・最近その事ばかり考えて苦しくて・・・何故騎士団長は父も兄上も殺して私は残したの？ プラーシノの血を絶やしたかったら私も一緒にやるべきだったのよ！！！」

「ローズ様・・・落ち着いてください、誰かが聞いているやも...レイラ様のお耳に入ったら・・・！」 フィリオはローズの前に屈み込み懇願するように声を落とした。

「解ってる。口が裂けてもお母様にはこんな事言わないわ・・・言える訳無いじゃない・・・。」

「フィリオ・・・私ね、生まれるまでの記憶があるの・・・」突然

の言葉に驚きフィリオはローズの傍から1歩さがった。

「・・・変よね。解ってる・・・でもきつと私達がドラゴン族では希少な双子だったせいかしら・・・母のお腹の中でいつも兄とは手を繋いでいたの。大丈夫僕が居るよってそんな気持ちの流れてきた・・・私たちはいつも一緒って・・・でもあの日、この世に産まれて来る時手を離さなきゃならなくてお兄様の手を離れたとたん孤独に押しつぶされそうだった・・・この世に自分は一人だけって・・・」

「お兄様はこの世に産まれる時直ぐに会えるから大丈夫って気持ちを送ってくれたわ・・・でもこの世に産まれてお兄様の存在を感じる事は出来なかった！・・・どんなに苦しくて辛かったか、それに生まれたとたん身体も心も自由にならなかった・・・お兄様を探す事も忘れ私の中に在ったのは空腹・睡眠への欲求・・・それだけよ。」

「大きくなってお兄様がお父様と一緒に殺されたって聞いたわ、お母様には苦しいのないよう生まれたときには既に亡くなって・・・死産だったって伝えた事も・・・どんなに辛かったでしょうね？お父様もお兄様もなくして・・・」語っているうちにローズの瞳からはぽろぽろと涙が零れていた・・・

「ローズ様・・・その様な話初めて伺いました。」言ってフィリオはそっとハンカチを差し出す。

「ええ・・・お母様に言えないんだもの誰にも話した事なんて無いわ・・・ステラに初めて聞いたとき心がえぐられた様に苦しかった・・・お母様が知ったらそれ以上でしようね・・・」ローズはハンカチで涙を拭い膝を丸め顔をうずめた。

「私は生を受けた時からプラーシノだったのかしら？それともお兄様が亡くなったから瞳を開けるときにプラーシノになったのかしら??」

「お兄様は亡くなってしまったけれど心の中には生きているの・・・だからいつも何かをするときも何かを言うときもこう考えるのよ・・・お兄様ならどうしたかしらって・・・真のプラーシノならどうするの。」

「ローズ様・・・」フィリオは小さくうずくまったローズの肩に手を乗せると傘を置きそのままローズを抱き上げた。

「ローズ様・・・お部屋に戻りましょう。本日はエルフ族が起こしになります。ローズ様もご出席せねばなりません・・・」

「・・・分かってる。このままつれってってフィリオ・・・早くステラに会いたい。」

フィリオはローズを抱き上げたままローズの私室まで連れて行った・・・まだこんなに小さいのにプラーシノに生まれたばかりにする必要の無い重責に潰され悲しすぎる出生時の暗殺事件・・・神は何故この子をこんなにもお苦しめになるのか・・・アラン様・・・

ローズの12歳の覚醒を祝うためエルフ一族よりティルニーを使者として6人のエルフが王国に祝いの品を持って訪れていた・・・

その中にほかの5人に比べ少しだけ年若く、少しだけ髪の色が濃く短い者が居た・・・6人は謁見の間に通され国王達が現れるまで床に片膝を付き敬礼の姿勢で頭を垂れて待っていた・・・

半時ほど経った頃慇懃な態度でダーニスがレイラとローズを伴って現れた・・・

「ダーニス様レイラ様ローズ様・・・お久しぶりにございます。ご健勝でいらつしやいましたでしょうか？」ステラは輝く様な笑顔で顔を上げてローズを見つめた・・・

「・・・ありがとうティルニー・・・今までエルフ族は我ら・レイヌ・オジェの事など忘れ去られていらつしやる様だったが・・・突然ローズの祝をなど・・・という風の吹き回しだ？」ダーニスはローズを見るステラの視線に気づき侮辱を感じ馬鹿にする様に笑いながらステラに言葉をぶつけた・・・

「・・・伝統に則り今までのプラーシノのドラゴンにしてきたようにこの度のローズ様の覚醒に併せまして“ドラゴンアイ”を贈らせて頂きたく思い馳せ参じました。」ステラは顔色一つ変えずに笑顔を向け話し終わると後ろに同じように控えるエルフを呼び黒檀で出来た緻密な細工を施した木箱を取り出した。

その木箱を大切そうに両手で持ち王座に座るダーニスの前に片膝を付くと優雅に一礼し木箱を差し出した。

ダーニスはその木箱を睨む様に一瞥すると隣に静かに佇むローズに中身を確認せずに渡した。

その様子をティルニーは微笑んで見守りローズにどうぞ開けて中をご覧くださいと言った。

「・・・ありがとうございます。ステラ殿。」言ってローズはそつと箱を開ける・・・

その中には深緑で出来たクッションがあり其処には目にも鮮やかに輝く若草色の宝石…それを石を挟み込むように銀色で細工された満開のバラの彫刻が施され其処からとても華奢なチェーンで小さな十字架が下がっていた。

ローズがあまりの美しさに言葉を失ってステラを見るとステラもうれしそうに微笑み身に着けるようにと身振りで示した。

ローズが手にとって見るとそれはネックレスではなく額飾りで頭に載せてみると自身の内から沸きあがってくる喜びに胸が震えた。

「・・・やっぱりそうなのね・・・やっぱり・・・」ローズはつぶやき自分の額の上で揺れる十字架をそつと触った・・・。

「ティルニー殿貴重なものをありがとうございます。娘の覚醒は2日後ですがこの様な美しいものを・・・ローズによく似合っています。国王ご夫妻にもくれぐれもお礼の言葉をお伝えください。」レイラは微笑みローズの髪をそつとなで整えた。

「……ご苦勞であつたな……ローズには必要無い物としておつたが……わざわざ用意して頂くとは……ご夫妻に“よろしく”伝えておけ。」言つとダーニスは立ち上がり頭を下げるティルニーを一瞥すると立ち去ろうとした。

??ダーニスは使者の中に若いエルフが居るのに気がつき立ち止まつた……立ち去ろうとしたが壇上を降り使節団の前にたつた。

「ティルニー……エルフの若者を連れてくるとは珍しいな?」ダーニスはティルニーを振り返り睨んだ。

「……はい、実はこの若者がローズ様の“ドラゴン・アイ”を作つた者でございます。」

「無事にローズ様に喜んで頂けるかを心配しておりましたので特別に国外許可を取り使者として参つたのです。」

「この若者が?」ダーニスは怪訝に思つた……たとえ優れた匠であろうとこんな若輩者に仮にもドラゴン族の姫への贈り物を作らせるとは……間違えば大変な侮辱を与える事になるのに……いや、ローズは女なのにブラーシノだ……その事をやはり見下しているのだろう……

「フン、そうか……そなた、将来が楽しみだな……また会おうぞ……」ダーニスの言葉に若者は顔も上げることも出来ず“ハッ”とだけ返事をした……

ダーニスが謁見の間から退出するとレイラもその後には習い出て行つた。

ローズはその場にとどまりステラの元に行くと後で自室に来て欲しいと伝えた。

「・・・あ、あの・・・私の額飾りを作ってくださいました方・・・」
そつと話しかけて青年の前に立つとその手を取り立ち上がるように促すとローズはその青年の顔を見上げた。

「あの、本当に美しいものをありがとうございます。付けた時に感じたんです渦巻く力を・・・きっと貴方がこれを作られる時に籠められた思いや力なんだなと思いました。」ローズは嬉しそうに微笑み青年の手を握りありがとうと言うとステラにまた後でと言って退室していった・・・。

「よかったね、君・・・」言うときステラは青年の肩をたたき他の使者に声をかけ衛兵に案内されあてがわれた来客の部屋へと向かった・・・

ドラゴン

その日の夜は家族でサニーの作ったご馳走を囲み盛大にお祝いをした。

クロスは父と兄に受け入れられたことが嬉しくまた母の作ったケーキをほぼ独り占めできたことが嬉しくその日は早々に床についた・

・

・・・僕がドラゴンだったなんて・・・学校で習ったドラゴン族は王族・貴族そして憧れの12騎士団だけであつた・・・

・・・12騎士団！僕も訓練して立派に一人前になったら入団できるんだろつか？やっぱり血筋正しい貴族しかねないのだろうか？

ドラゴン・・・言われて直ぐは納得できなかった・・・けれど今は確信できる・・・この内にとどろく物これが魔術・・・父さんは明日になったら教えてくれるって言っていた・・・

ふあああゝ眠たい。そういえば今日は早起きだった・・・もう寝よう、明日・・・明日になれば色んな事が分かるはず・・・

クロスは眠りについた・・・沢山の疑問を抱えて・・・しかし明日からは新しい日々が始まるだろう・・・ドラゴン族の若者としての

日々が・・・

「・・・クロスはもう眠ったか？」カージスはキッチンで片づけをするサニーに尋ねる。

「ええ・・・もう眠ったわ。」サニーは片付ける手を止めエプロンで手を拭きながらカージスの向かいの席に座る。

「そうか・・・」カージスは頷くと残ったワインを飲み干しリストアに向き直る・・・

「・・・リス・・・王宮はどうだった？ローズ様は・・・お会いできたか？」

「うん。・・・無事に渡す事が出来たよ。」

カージスはそうか・・・と呟きサニーにワインのおかわりを頼んだ・・・サニーはワインを取りに行く為席を立った・・・

「・・・国は・・・首都の様子はどうか？」

「・・・王宮は変わり無く動いてるようだった。けれどダーニス様はエルフに対する態度があらさまだったよ・・・それと貴族・金持ちの住むエリアに大きな変化は見られなかったけれど下町にはベルズ人が犇いていた。商人も戦士も奴隷までも居たよ・・・」

「・・・父さん、いつたいダーニス様は皇帝とどんな契約を交わしたんだろ・・・都の人々はベルズ人が居てもあまり気にならない様だった・・・けれど海沿いの町では宿屋や酒場に戦士崩れや商人がやって来て平気で料金を踏み倒したり暴れたり・・・町人や村人に因縁を吹っかけて回るらしい・・・王国の兵士たちは見て見ぬ振りで人々の中に不満や怒りが渦巻いている・・・ちよっと聞いただけで沢山の国王に対する怒りを聞けたよ・・・」

「下手に立ち向かうとこつちが投獄されるって・・・どう言う事なんだ？」リスターはグラスを握り締めやり場の無い怒りに深いため息をつく・・・

「ベルズ人・・・そうか、お前は変な争いに巻き込まれずにすんだのか？」

「・・・エルフと一緒になのに・・・奴等はそこまで愚かじゃないさ・・・」

「そうか・・・」サニーがワインを持って現れたのでカージスは自分とリスターのグラスに注ぐと話をそらした。

「明日からクロスの教育を始めようと思う。明日はまずは王国とその他の国との関係を教えて、夜にはお前にしたように裏山の奥の湖で真の姿を見せようと思う・・・」カージスは話し終えるとまた一気に飲み干しフーとため息をつきリスターにお前もそろそろ寝なさいと促した・・・

リスターはいいと素直に返事をして父と母におやすみなさいと言ってキッチンを後にした。

リスターが階段を上がっていくのを確認するとカージスはサニーにもワインを進め2人は日が変わる頃まで話をした・・・

朝、クロスはシシーの鳴き声で目が覚めた・・・

「ん〜シシー後少しだけ」クロスは寝返りを打ちシシーの耳元でのニヤーニヤー攻撃から逃げた・・・

ぼすっ！という音共に腹部に圧を感じクロスは咽て飛び起きた！！

「ゴホッ！ゴホッ！！・・・シシー！！危ないだろ！？息が止まったよ！！！！」

苦しむクロスを横目で見てシシーはニヤリと笑ってクロスの足元に尻尾を揺ら揺らしながら寄って来た。

「・・・散々優しく起こしてやったのに起きなかったクロス坊やが悪いんでしょ？」

「・・・それより・・・早く起きて支度しないと学校に遅れるわよ」シシーは嬉しげに尻尾を振りながら部屋を出て行ってしまった・・・クロスはそんなシシーを啞然と見ていたがハッとベットから飛び降りると乱暴にカーテンを引きいつもより寝すぎた事に気がつき慌てて部屋から飛び出していった・・・

ドタドタドタ・・・乱暴に階段を駆け下りキッチンにいる面々に早口でおはよ！と挨拶してそのままのスピードで洗面所までダッシュ

して
いつ
た。

サレット（前書き）

活報にも書かせて頂いたのですがストーリー上煮詰まってしまつて次の山場を持つていくストーリーが纏まっていけないので思い切つてはしょつてここまで持つてきました。先に進みたくなり、途中が完成してから読みたいと思われる方はここでストップしてください。ここからは「ドラゴン」から2年後…物語の中は秋…村長の家の前から始まります・・・

サレット

コンコンコン・・・

「お爺ちゃん！？居ないの？」

村長の家の扉をノックする一人の少女・・・

ゴンゴン！！・・・

「・・・はいはい、今開けるよ。」村長は言つて扉をゆっくりと開ける・・・

「サレット！よく来たね、思ったより早かったな・・・さあお入り。」

村長は笑顔で孫娘を家に招きいれた・・・サレットは馬車による長旅で疲れていたのと風に吹かれ冷え切っていたので不機嫌そうに祖父を見やると鼻息荒く室内へ入ってきた・・・

「何度も呼んだのにどこ行つてなのよ？今日到着するつてお父様から手紙が届いてたハズでしょ？」

サレットは足音荒く家に入ると暖炉の前の揺り椅子に座つて冷えた体を温めた。

「お前のお父さんからは今日の夕飯前に到着するつて連絡を受けてたものだから・・・お前の部屋を整えていたんだよ。」

「外はもう寒かったかい？今温かいミルクを持ってきてやろう・・・」

サレットはフンと不機嫌そうに鼻を鳴らすとフォックスの毛皮を首からはずしパステルブルーの羊毛の上等なコートを脱ぐとソファに投げもつと暖炉に近づき冷えた手を火にかざし暖めた。

「お爺ちゃん、お父様から聞いてると思うけどお父様とお母様がセイレーン・ミュコスに行っている2ヶ月の間だけここでお世話になるわ。」

サレットは横柄に言つて村長から温かいミルクの入ったマグを受け取ると荷物が重たいから部屋に運んで！と言つてミルクを啜つた・

「はいはい。」と村長は優しげに言つて孫娘の2ヶ月滞在するだけには多すぎる荷物を2階へと運んで行つた・・・

サレットは両親の不在の間だけ母方の祖父の家に厄介になる事になっていた。両親は人魚の国セイレーン・ミュコスに新しい取引先を訪ねていったのだ・・・もちろんサレットも連れて行ってほしくて散々お願いしたが入国の厳しい国内に連れて行くことは出来ず祖父の家に渋々預けられ都会育ちのサレットにとってはこんな田舎退屈で仕方無く、都の友人達の流行や冬の間に沢山予定されている集まりにも参加できず我慢が出来なかったのだ・・・

「サレット、2ヶ月の間家に閉じこもっているのもつまらないし、

老人の相手だけでは可愛そうだと思って村の学校に通えるようにしておいたから明日から行っておいで…」

サレットの荷物を運び終えソファで一息ついた村長がニコニコと微笑んでいた。

「えっ！？田舎の学校に通えって言つの？？」

サレットは驚愕して祖父の提案を急いではねつけた。

「嫌よ！唯でさえこんな田舎に送って遣されて友達にも恥ずかしくて言え無いつてのに更にまだ恥ずかしい思いをしろって言つの？嫌よ！…！」

「こんな田舎の子達となんか話が合うわけないし、勉強だってお作法だって違うわ！冗談じゃない！」

「私、ここにいる間は大人しく読書でもして過ごすつもり・・・疲れたから部屋で休むわ！夕食になったら起しに来てね！」

サレットはびっくりして何も言えなくなっている村長をひとり残しズンズンと怒りで足音を立てながら用意された部屋へと行ってしまった・・・

「・・・やれやれ・・・あの子の気性があんなに荒いとは・・・さてさて明日の学校はどうしたものかな・・・」

村長は頭を掻きながら明日サレットをどうやって学校に行かせようかと悩んだ・・・

サレット（後書き）

サレット：村長の一人娘と絹織物の商いを生業とする青年の間に生まれた一人娘。

両親は貴族を相手に幅広い商売を行い成功していた。

娘は17歳。貴族や金持ちの行くお嬢様学校に通っていて流行を追いかけ美しく着飾ることが好き。両親の都合によってクロス達の住む村の村長の家に2ヶ月滞在予定。

出会い

サレットは朝早くに起こされ不機嫌そうに祖父を見上げ田舎の学校なんて行かないわよ！と怒鳴ると布団にもぐり祖父にこれ以上はなす切っ掛けを与えなかった。

村長はそんなサレットの様子を見ると諦めた様にため息をつき学校に行けば新しい友達も出来て楽しいよと話しかけてみた。しかし何の反応も無いので朝食は準備できているからねと優しくサレットをポンポンとたたくと部屋を後にした・・・

コンコンコン・・・

朝早くから村長の家を訪ねる者があつた・・・

「誰かな？」言つて村長が扉を開ける。

「おはようございます。村長。」

キラキラと輝く瞳で村長を見返すリスターの姿があつた・・・

「リス…どうしたねこんな早くから？」村長は思わぬ訪問者にビツクリしながらも朝ごはんは食べたかね？と言いながら家の中に招き入れた。

「ハイ。有難うございます。」リスターは丁寧に礼を言つて招かれた室内に入るとソファにゆっくりと腰掛けた。

「実は、村長の御孫さんが今日から学校だと言つことを父から聞きまして・・・初めての場所で不安も感じられていらっしやるやと思ひよろしかったら学校までお供しようと思ひましてお邪魔させていただきます・・・。」

リスターは少し恥ずかしそうに笑うと実は父に言われて来たのですかと付け加えた・・・。

「そうかね、わざわざ有難う。」村長は嬉しそうに礼を言うとしかし困つたように顔をゆがめる・・・。

「リス、わざわざ有難いのだが・・・実は孫娘のサレットが学校に行きたくないと言つて起きてこないのじゃよ。」

「何度か説得したんじゃが...あの子は都会の育ちでなんと言つか・・・恥ずかしい事なんじゃが貴族の娘さんの様に振舞う所があるんじやよ・・・。」

「そうですか・・・まだベットのの中ですか？」リスターも困つてしまひどうしようかと村長を見上げて2人で思案する・・・

トントントン・・・静かに階段を下りてくる足音がする・・・

「おばあちゃん、もう目が覚めちゃったから朝ごはん頂戴。まったくお爺ちゃんのせいでせつかくゆつくり寝るつもりだったのにとんだ早起きよ！」サレットが目が覚めてしまったようのでブツブツ言い

ながら起きてきた。

村長とリスターは顔を見合わせて頷くと村長はサレットに声をかけにキッチンへと向かった・・・

「サレット、目が覚めたのかい？」村長が優しく問いかける声がある・・・

「お爺ちゃんのせいで目が覚めちゃったのよ！」キツク言い返すサレット。

リスターはサレットの声を聞いて自分とあまり年が違わないのかなあ？と思いそつと耳を澄ます。

「・・・・・・・・」キッチンで言い争いに似た声がある。

思ったよりも気が強そうだな…此処は一旦帰ったほうがいいかな？また放課後訪ねてきてその時に少しサレットと話をしてみよう。

そう思いリスターは立ち上がるとキッチンのほうへそつと赴き声をかける。

「村長、ご迷惑になってしまいそうなので本日は失礼させて頂こうと思うのですが・・・」

リスターがそつとキッチンに顔を出すと口論は突然やんで村長の孫娘と思われる子と目が合った。

リスターが思ったよりも大人びた風貌でリスターと目が合うとパッ

と顔を赤らめさつと紙を手ぐしで整えた。

「お爺ちゃん・・・」そつと祖父の袖を引いて注意を促すと恥ずかしそうに顔を赤らめたまま下を向いてしまった。

「おお、リスターすまないな。リス、この子が孫娘のサレットだ。サレットこの子がさつき言っていた牧師様の息子のリスターだ。」
村長が気まずい空気に気づかず紹介するとサレットは立ち上がると恥ずかしそうに俯いたままよろしくとちよつと頭を下げた。
リスターもよろしくと礼儀正しくお辞儀した。

「村長、どうやら今日は出直したほうがよいのではないのでしょうか？朝のお忙しい時間に押しかけてしまつて申し訳ありません。」言つてリスターがそれでは又と退出しかけるとサレットが慌てて引き止めた。

「お待ちください・・・お爺ちゃん、私支度してまいりますからリスター様にもう少しお待ちいただいでください。」
言つとサレットはリスターにお辞儀をしてパタパタと支度をするべく部屋を出て行つた・・・

「リス、すまないがどうやら行く気になつたようだからもう少し待つていてもらえるじやろうか？」

「ええ、当初からそのつもりでしたから構いませんよ、」リスターは微笑み村長の妻に促され席に座つた。

・・・半時ほど経った頃先程とは違って綺麗に身支度をしたサレットが軽やかにキッチンに現れた。

「リスター様、お待たせして申し訳ありません。」可愛らしく膝を折ってリスターに挨拶すると行きましようか、といってリスターの腕を取ると強引に連れ出した。

リスターはビックリして引つ張られながらも振り返り村長夫妻に言ってます。と挨拶をした・・・

「サレットは大丈夫じゃろうか？」

「リスが付いているから大丈夫ですよ。」不安そうにしている夫を励ますように肩をたたき2人を見送った。

サレットとリスターはまるで貴族の散歩のように腕を組み学校までゆっくりと話をしながら歩いていた・・・

「リスター様はお幾つでございますの？」サレットは明るく言う。リスターの腕にゆっくりと寄りかかった。

「・・・様はいりませんよ、私のことはリスと呼んでください。私は今年19になりました・・・今は学生ではなく父の教鞭の手伝い

をしております。」

「そうなんですネ・・・リスター…リスはこんな田舎では珍しい容貌をしていらつしゃいますね、都でもそんなに美しい髪をしていらつしゃる方はそうそうお見かけいたしません。」サレットはウツトリとリスターを見上げた。

「・・・そうですか、有難うございます。この村では容姿など誰も気に留めませんし、たいしたことではありません。」きつぱりとそう言つと何かに気がついたのか足を止め後ろを振り返つた・・・

「・・・にさゝん！待つて！！」サレットはリスターが優しく微笑むその先を見ると一人の砂色の髪をした少年が走ってくるのが見えた。

お互いの顔が良く見える位置までやって来ると少年はサレットの存在に気がついたのか急に止まるとリスターをじつと見つめ頷くと目の前を一瞬手で覆いハアハアと息をしてゆっくりと近づいてきた。

「兄さん、先に行つちやつたのかと思つてビックリして追いかけてきたんだ。」少年は嬉しそうに微笑みサレットに一礼した。

「サレット、紹介します。弟のクロスです。」紹介された少年は嬉しそうに微笑みサレットに一礼した。サレットがじつと見つめつとクロスは恥ずかしそうにポット頬を染めた。

「初めまして、僕クロスって言います。村長さんのお孫さんですよね？今日始めての登校だつて聞いて僕も一緒に行こうと思つて走つて来ました。」

「・・・初めましてサレットですわ、リスに弟さんがいらつしやつたのね、」サレットは自分とあまり背の変わらないクロスをじろじろと見つめた。髪の色もリスターよりも色が薄いし、瞳の色もリスターのように綺麗な水色ではなく薄い茶色でありパツとしない印象を受けた。

「クロス、父さんはもう出勤したのかい？」紹介が済むと3人は連れ立って歩き先程よりも少し速い歩調で学校へと向かった。

「うん。僕よりも先に家を出たからもう付いている頃だと思うよ。」クロスは嬉しそうに歩きながらサレットの反対側からリスターに返事をした。

「・・・そうか…サレット、すまないが此処から先へはクロスといつてくれますか？私は父に用事がありまして、クロスだったら貴女をクラスまでお送りできますし・・・」サレットにすまなそうな顔を向けるとクロスに向き直りサレットを頼むと言ってサレットの返事を待たずにじゃあと言って足早に去っていった・・・

「あ・・・」さよならの言葉も言えずサレットはリスターの後姿を見送った・・・

「じゃあ、サレット。僕と行きましょうか。」クロスはサレットの腕を取り自分の腕を持たせるとリスターよりも速いスピードでサレットを引っ張って行った・・・

サレットは急に不機嫌になり自分の腕を持って楽しそうにサツサと歩くクロスを見つめ兄弟なのに何故こんなにもリスターに似ていないんだろうといぶかしんだ。

予定の時間より早く着くとクロスはサレットをクラスの前に置き去りにして他のクラスメイトに事情を説明すると後は任せたとばかりにじゃあね！と爽やかに言って自分のクラスに行ってしまった・・・

サレットは啞然とその姿を見送りリスタートの違いをしみじみと感じそもそも自分はリスターと話したいが為に学校へ行くことを了承したのにも思い今の状態に沸々と怒りがこみ上げてきてクロスに紹介されたクラスメイトにも冷たく八つ当たりをした。

鬱々

サレットは初日以来リスターと話す機会を失い悶々としていた・・・

サレットが調べた所によるとリスターはこの村ではとても人気があるらしく男にも女にも好かれていた。

今はリスターの言った通り父であるカージス教授兼牧師の補佐をしているようで高学年のクラスにたまに顔を出す程度であるようだ。日曜の礼拝に行けば顔を見ることは出来るが何やら常に忙しそうにしており話をするどころか声をかけるタイミングすら持つことが出来なかった・・・

サレットは何とか話をしようとタイミングを見ているうちに2週間があつという間に過ぎてしまい恋心を胸に秘め鬱々としていた。

・・・「お爺ちゃん、リスはいつも忙しそうね・・・」

「リス？ああ、カージスさんとこのリスか、そうじゃね、あの子は父親の手伝いや家の手伝い、弟の世話にいつも忙しそうにしておるなあ・・・」村長はサレットの気持ちにも気づかずのんびりと新聞を捲っていた・・・

「お家のお世話まで？弟の面倒って言ったてもうあの子もずいぶん大きいじゃない！？」サレットは思ったよりもリスが問題を抱え込んでるように思っぴックリした。

「ああ、クロスもお前とは3つつ違いかな？昔からあの兄弟は本当に仲が良くてもリスターはクロスの面倒を喜んで見ているんじゃないよ、年が離れているせいかなまだまだ幼く感じるんじゃないか？」村長は新聞を置くと妻に婆さんや、コーヒーをくれと言ってソファにもたれ窓の外をつまらなそうに見ているサレットを見やった。

「・・・サレット学校ではお友達はできたかね？」
妻の持ってきたコーヒースプーンをすすりながら尋ねた。

「・・・できるわけ無いわ！みんな田舎っ子でドレスの生地も最新の帽子もリボンにだって話が合わないんだから！！」サレットはムツとして両膝を抱きかかえる様にして座ると唇を尖らした。

「この村で一番紳士なのはリスだけだもの。」

「・・・そうか・・・まあ都のお友達と同じとは言えないだろうな・・・この新聞にしたって都の情報なんて1ヶ月近く遅れて届くんだからのお」村長は最後には笑って新聞をポンポンと叩いた・・・

「・・・」サレットはそんな祖父の様子を見てあきれていた。

「・・・まあまあ、無理をしなくてもサレットには都に良いお友達がいるようだから良いじゃありませんかおじいさん。」村長夫人はそんな2人を見てニコニコと優しく微笑んだ。

「そうだわ！おじいさん、たまにはリスやクロスを家に招いてみたら？サレットもお世話になっているし、たまにはあの子達ともゆっくりとお話がしたいわ。」

祖母の嬉しい提案にサレットはキラキラと瞳を輝かせ名案だわ！と

叫んだ。

村長はサレットの声にビックリしながらもサレットがそう言うなら次の土曜日にも家へ招待しようと笑顔で言った・・・

「じゃあ早速準備しなくちゃ！招待状を書くわ」サレットは突然立ち上がり嬉しそうにいそいそと自分の部屋へと駆け上がって行った・・・

そんな様子を見て村長夫人はサレットの恋心に気がついたのか嬉しそうに微笑みそれならご馳走を作らないとねと言ってキッチンへ向かった・・・

村長はサレットが来て妻まで賑やかになったような気がしてやれやれと呟くと昼寝をしようと揺り椅子に深く腰掛け目を瞑った・・・

サレットは早速招待状を渡すべく朝早く登校しエントランスにてリスターがやって来るのを待っていた・・・

リスターはいつも通りクロスを伴ってやって来た・・・サレットは他の生徒が沢山いる中で大きな声でリスターを呼び駆け寄った・・・

「リス！…クロス…おはようございます。」

「あの、今週の土曜に祖父母がリスとクロスを夕食に御招きする様

に言うものですから・・・これを！」サレットは言い終るか否やのタイミングで招待状をサツとリスターの前に突き出した。

「・・・あ、ハイ。有難うございます。では両親と相談してみますので・・・」リスターは真っ赤になって俯くサレットの手から招待状を受け取り有難うございます。と言って微笑んだ。

サレットはリスの笑顔を見てますます顔を赤くすると良いお返事期待您的していますわ。と言って走って校舎の中に逃げ込んでしまった・・・

「・・・クロス、私から父さんに話しておくから・・・」ポンとクロスの肩を叩きちゃんと勉強するんだぞと言ってじゃあと教員室に向かつていった・・・

「・・・クロス！！」大きな声で呼ばれて振り返るともう直ぐ目の前にセーラが顔を赤くして立っていた。

「クロス！！サレットは一体なんだったのよ！？」凄い形相で睨まれクロスは思わずたじろいだ・・・

「・・・良く分かんないけど村長さんが夕食に招待してくれたいらしくて・・・その・・・セーラ顔が怖いよ、」クロスは真っ赤になってクロスを睨むように迫ってくるセーラに怖気づいていた。

「・・・ご、ごめん・・・で？行くの？行かないの？？」セーラはハッとして恥ずかしそうに一步引くとそれでも食い下がった

「・・・多分いくと思うよ、予定もないし、村長さんの誘いを断れないし・・・」ドキドキしながらもこれ以上セーラが近づいて来な

いように腕を前に出して身を引いた。

「卑怯よ、村長を使うなんて!!」クロスには聞き取りにくい声でセーラはブツブツと怒りの罵りを吐いた・・・

「あー・・・セーラ? ひょっとして兄さんをサレットに取られるんじゃないかって心配してるの?」恐る恐るだが面白そうにセーラの顔を覗き込む。

「ちが!! そうじゃないけど・・・ただ嫌なだけよ!!」セーラは顔を真っ赤にして急いで否定してみるがクロスから見たらその顔にはセーラの気持ちが見えなかった。

「・・・セーラ兄さんはサレットには興味ないと思うけど・・・?」

「なんで!!??」セーラは勢い込んで聞いてきた。

「!! 何でって・・・そもそも兄さんが特別誰かと親しくしてる所なんて見たことないし、誰かの事を家で言うことも無いしね・・・」クロスはセーラの勢いに引きながらも思案顔で思い出すようにした。

「・・・そう、誰の事もね・・・」セーラは自分も除外された事に気がきしょんぼりとしながら有難う。じゃあまたクラスでねと言うとトボトボと校舎に入って行った・・・

クロスが放課後ジェイと遊んで夕方に帰宅すると既に父と母の了承は得られており特に話題に上ることも無く村長が招待してくださるなんて久しぶりね程度のものであった・・・

クロスは兄の様子が気になりそつと様子を伺ったが特にいつもと違う様子も無くクロスの学校での事や父とのドラゴン教育はその後どんな様子だ？と言った程度のことを聞いてくる程度であった・・・

土曜日の夕方、招待された時間より少し早い時間に2人は村長の家へと向かう道を歩いていた・・・

クロスは兄の様子がまだ気になっていたためそつとカマをかけてみようと思ひ話題を変えた・・・

「兄さん、サレットがこの村に居るのも後1ヶ月も無いね？」

「・・・ああ、そうだね…2ヶ月の予定だったから後3週間かな？」

「サレットはなんだかお嬢様風を吹かしていて苦手だな・・・兄さんはそう思わない？」

「何だ？急に、そうだね…私はあまりそうは思わないけれど・・・まあ都で育った子だからこの村の子達とは違ってもしょうがないんじゃないかな？」リスターはどう思っているのか判らないがYESともNOとも取れる曖昧な返事を返した。

「そう？別に兄さんが何とも思っていないならいいんだ・・・」クロスはリスターの表情からは答えが伺えなかったのでチェつと舌打ちを漏らした・・・

夕食会は滞りなく進んだ。

村長夫妻は2人を快く迎え入れリスターにはワインも出され村長婦人の手料理もとても美味しくサレットが殊のほか無口なほかは楽しい会となった・・・

食後に皆がリビングで過ごしているとワインを片手にご機嫌な村長はリスターを捕まえ嬉しそうに話しかけた。

「ところでリス、教会のお手伝いは順調かい？」

「…はい、お蔭様で父に付いて色々な事のお手伝いと勉強をさせて頂いています。」

「そうか・・・教会では何か困ったことは無いかい？次の会合の時に提出しても良いのだが・・・」

「・・・有難うございます！特に困ったことも無いのですが・・・来週結婚式が在るのですが準備も当日も人手が足りなくて・・・」
言うところリスターは意味ありげにクロスを睨んだ・・・

「クロスが手伝ってくれると良いのですがなにぶん不器用で花の飾り付け等頼めなくて・・・」リスターは困った顔をして村長を見た。

「それなら適任があるではないか！！サレットじゃよ！」村長は嬉しそうにサレットを振り返った・・・

みんなのお茶の支度をしていたサレットは思わず驚いてお茶を少しこぼしてしまった・・・

「え？私ですか？」サレットは真つ赤になりながらリスターを見てる・・・

「そうじゃよ、サレットなら都で娘さんとしての教育を受けておるからお手のもんじゃろ？」村長は意気揚々と話しそれでは解決とばかりに締めくくった。

「いやー良かった良かった、サレット、リスターの言うことを聞いてちゃんとお手伝いするように。」

「・・・サレット、ご面倒でなければよろしくお願いいたします。」リスターは礼儀正しくお辞儀すると微笑んでサレットを見たものだからサレットはますます顔を赤くすると私でよければとぼそぼそと呟いた・・・

クロスはそんな様子を部屋の隅から考え深げに見つめていた・・・

鬱々（後書き）

本当はもっと早く終わらせるはずだったのにサレットのキャラが濃
いせいか前に前にと出てきて話が長くなってしまいました・・・
サレット…曲者です。

悲痛の別れ

村の若いカップルのための結婚式までサレットは必要以上に教会を訪れ時を見計らってはリスターの傍に行き何か手伝うことはないかと甲斐甲斐しく動き回った・・・

挙式当日サレットはどうやってその役に納まったのかフラワーガールの役をやり厭かな顔をしてバージンロードに今朝摘んだばかりの白いバラの花びらを撒いて入場した。

神父の後ろに控えるリスターから遠く離れない場所に陣取りウツトリと式の進行をお手伝いするリスターを眺めていた・・・

サレットは新郎新婦に自分とリスターの姿を重ね幸せそうにウツトリと見つめていた・・・

式が終わりブーケトスに若い娘たちが群がりブーケは何分割にも割られ娘たちは嬉しそうにパーティー会場へと向かった・・・サレットもセーラもブーケのおこぼれをもらいウキウキしていたがお互いが持っている事に気がつくときつとお互いをにらみつけた・・・

「サレットさんでしたっけ？こんにちわ私クロスのクラスメイトのセーラって言います。」セーラはこれでもかと言わんばかりの微笑を浮かべてサレットに白々しく挨拶した。

「・・・初めましてね、セーラさん？クロスと同年なのかしら？若々しくて可愛いわね」サレットは見下すように上から下までじろじろ眺めた。

「・・・有難うございます。サレットさんもブーケのお花もらったんですね。」セーラは負けるものかとサレットのあからさまな視線に怖気る事無くニコニコと笑った。

「・・・ああ、これ？・・・まあブーケのお花を欲しがるのは女の性じゃなくって？」

「まあ、貴女みたいなお嬢さんにはまだ早すぎるように思うけれど？」サレットはフフフと零れた笑いを手で隠しながら明らかに嘲笑した・・・

「・・・ええそうかも知れせんわね、サレットさんみたいなお年になると焦って来る事もある出しようから。」

「まだまだ若くてよかったです。」ウフフと可愛らしく笑ってしてやったりと微笑む。

「・・・」サレットはあからさまに年増扱いされた事に怒りセーラを睨みつけた。

「そう言えばサレットさんはこの村に滞在されるのも後1週間位でしたよね？都に戻られてもどうぞお元気で、たまには此処にも遊びに来てくださいね、素敵な恋人を連れて。」セーラはそれだけ言うのと嬉しそうにそれじゃあ。と軽やかに去って行った・・・

「く！！！！」サレットは怒りで顔を真っ赤にしてブツブツとセーラの事を罵った。

なんて礼儀知らずで年上を敬わない態度かしら！？だから田舎娘は嫌なのよ！！躑なんて成ってないし・・・それにあの紫の瞳！！人魚の血筋だつて一発でわかるわ！だから人魚は嫌いなよ！！

サレットはどしどしと良家の子女にはあるまじき足音を立てながら村長宅へと帰って行った・・・

セーラが披露宴会場に戻るといつもよりも正装に身を包んだリスターとクロスが楽しげに話をしていた。

「あ！セーラ！！こっちこっち！！」リスターの凛々しい姿にウツトリと見入っているとクロスがこちらに気がついて声をかけてくれた。

もじもじしながらも嬉しそうに頬を染めてセーラは2人の下に来るとリスターを見上げた。

「あの、リス？今日はとっても素敵です。」俯き加減にもじもじとセーラが勇気を出して告げると一瞬ビックリした顔をしたが嬉しそうにリスターは有難うと言ってセーラの頭をポンポンと撫でた。

「・・・セーラの今日の格好も可愛いよね？」クロスがセーラを後押しするようにリスターに尋ねるとリスターも優しく微笑んでとても可愛いよと言ってくれた。

「・・・。」セーラは嬉しいのと恥ずかしいので頬を染めながら消え入りそうな声で有難う。と囁いた。

リスターは再度セーラの頭を撫でるとクロスに酒は飲むなよ！と厳しい顔を向け会場の立食テーブルを厳しい目で睨んだ。

分けが分らずそっちに目をやると今正にシャンパングラスに手を伸ばしているアンディーとルーの姿があった・・・

リスターは

アンディー！ルー！！と叫ぶと2人の下に行き此処までは聞えないものの2人に説教をしているのは見て取れた・・・

2人は散々怒られ、両親に言うぞと脅しをかけられシユンとした表情でセーラとクロスの元にやってきた。

「リスターは背中にも目がついテンのか？母ちゃんより怖かったぜ。」
「アンディーはリスターの姿が見えないかキョロキョロ辺りを見回した。」

「アンディーが悪いでしょ？お酒なんて飲もうとするから！」セーラも腕を組みアンディーとルーに更に説教をしようとした。

そもそもね！と始めたので見かねたクロスがまあまあと仲裁に入り皆で何があるか見に言っ腹ごしらえをしようと誘った・・・。

一日がリスターと話せずに過ぎていく・・・朝の挨拶すら出来ない事もある・・・後6日・後5日・・・日は無常にも過ぎていく・・・サレットは自分の気持ちにもう確信を抱いていた。

リスターは都で出会ったどんな男性よりも優雅で魅力的だ・・・それにあの瞳・・・きつとエルフの血が入っているのだろう・・・よく晴れた空のように美しく瞳の中心は其れよも濃くその周りには白い星が輝いているように見える・・・サレットはその日何度と付いた深いため息を吐く・・・

リスターに会ってしまったら都のどんなに位の高い貴族であろうと

きつとかすんで見えるでしょう・・・お父様にお母様に何て言えばいいのでしょうか？ああ、きつとその内お父様が見つけてくる何処かの貴族の家に嫁がされてしまう・・・ちよつと前ならそれでも良いと思つてたでも・・・今となつては・・・サレットは膝を抱き自分の悲しい境遇を思つて涙を流した・・・

どうする事も出来ずについにその日はやつて来た・・・

昼前にはすべての荷物をまとめ終わり迎えの馬車がやつてくるのを待つばかりであつた・・・応接間のソファの上で膝を抱えさめざめと涙を流す孫娘をこの村が気に入つて離れがなくなつたと勘違いをする村長は又着たら良いじゃないかと孫娘の肩を叩き慰めその様子を悲しげに眺める村長夫人はどうしてあげる事も出来ないわが身を攻めていた・・・

コンコンコン・・・

ついに迎えの馬車は遣つて来てサレットの荷物は来たときと同じように迅速に積み込まれあつという間にサレットを乗せるだけとなつた・・・

「お爺ちゃん、お婆ちゃんお世話になりました。」来たときはまったく違つ態度に村長夫妻も別れの悲しみの涙を流し必ず又来るようにと言つて見送つた・・・

サレットはハラハラと涙を流しながら有難う。また直ぐ来るわと言つて意を決したように馬車に乗り込むと出してと弱弱しく指示して

窓から身を乗り出し祖父母に手を振った……

・・・サレットは暫くの間過ごした村を眺めようと窓から身を乗り出し過ぎていく風景を眺めていた。

すると村長の家に続く道にリスターとクロスの姿を見て慌てて御者に止めて！と叫んだ。

馬車はスピードに乗ったばかりで中々止まらなかったがちょうどリスター兄弟の姿が良く見える場所で砂埃を上げながら停車した。

「リスター！」サレットは良く見えるようにと窓から身を乗り出しリスターを呼んだ。

「サレット・・・もう出発されていたんですね、お別れの挨拶をしようと同じつもりだったのですが・・・」リスターは会えてよかったですいつもと変わらない笑顔で微笑んだ。

「・・・」サレットはもう会えないと思っていた人に会えた喜びが声に出せなかった。

「それでは御者の方を長く引き止めるわけにはいきませんので・・・どうぞ道中お気をつけて、都に行ってもお元気でいてください。」と微笑み握手をしようと手を差し伸べた。

「・・・っつ。」サレットはぼろぼろと涙を流しリスターの手を握るとぐつと握りはい。お元気でと呟いた・・・

リスターが手を離そうとするとその手をぐつと引き寄せサレットはリスターの頬にそつと唇をかすめる程度のキスをした。

ビックリしたリスターがパツとサレットの顔を見上げるとサレットは顔を真っ赤にして瞳を潤ませると視線をそらした。

「・・・申し訳ありません。で、でも・・・リスをずっとお慕いしておりました。この気持ちを伝えぬまま都に帰る事は・・・次は何時お逢いできるか分りません。どうか私の事を忘れないでください。」・・・そう苦しそうに言う。と御者に出してと泣きながら伝えリスターから顔を隠してしまった・・・

・・・啞然として見送るリスターとクロス・・・

「兄さん・・・凄い人に思われたね・・・」クロスはサレットの馬車がある砂埃を目で追いながらクスツと笑う。とそう変わらなくなった兄の肩を叩いた・・・

「・・・ああ・・・そうだね。」リスターも目で追っていたがそつとサレットに触れられた頬を撫でると優しく微笑んだ。

クロスに肩を叩かれると笑いながら、

「さあ、帰ろうか…皆には内緒だぞ？」と言ってクロスの頭をクシヤツと撫でると肩を組み2人は元来た道を戻っていった……。

悲痛の別れ（後書き）

サレットさん無事に帰られました。
しかし強烈な彼女：まだもう少し登場します。

首都セルシアナ（前書き）

サレットはセルシアナの自宅に無事帰宅し、悶々とした日々を過ごしていた。

首都セルシアナ

サレットは無事に自身の家に帰宅し人魚の国、セイレーン・ミュクスで新しい取引を成功させ機嫌の良い両親に温かく迎えられた……

しかしサレットは両親の喜びとは裏腹にリスターに残してきた気持の整理が付かず一番安らげるはずの自分の部屋でも心は少しも休まることは無くお茶会や舞踏会の招待状にも答えずそれらは机の上に積まれるだけとなっていた……

そんなサレットの様子を心配した両親はいつも以上に甲斐甲斐しく世話を焼いたがどうやら祖父母恋しさでの様子ではなく首をかしげ何とかいつものサレットに戻って欲しく外出させようとサレットがほったらかしている招待状の中から適当なものを選びサレットを説得してお茶会へと出席させた。

「サレット、今日は久しぶりにお友達の皆さんと会うのだから楽しんでいらっしやい。」母はサレットのドレスを手直しして嬉しそうに送り出した。

「ええ…ではお父様お母様行つて参ります。」サレットは沈んだ顔のまま両親に告げると久しぶりに再会する男爵令嬢のお茶会へと出発した…。

「サレットく久しぶりね、ご両親がお出かけの間おじい様のお家に行つてらっしゃったそうですね。もうご両親も戻られていたんですよ？ 貴女も帰ったらっしゃた筈なのに中々ご連絡が無くて寂しかったわ。」

男爵令嬢のお茶会にはサレット以外にも豪商の娘、他家の男爵令嬢など5人が招待されていた。男爵令嬢は中でもサレットと親しくしていたので今日の会には特に親しいもの達を招待してくれていた。

「お久しぶりね、イレエヌ…本日はお招き有難う…」サレットは元氣なく言つと一同の顔を見回し皆さんもお久しぶりと言つて挨拶した。

「まあ、サレット貴女元氣が無くつてよ、お爺様の家で何かありませんか？」イレエヌは優しく言つと皆を庭に案内して席に座ると紅茶とプティフルを振舞つた。

「…いいえ、イレエヌ何かがあった訳ではなくつてよ。」

「そう…そう言えば皆さん今週末には侯爵様が開かれる舞踏会がありますよ、サレットもちろんいらっしゃるわよね？ 先日侯爵令嬢様にお会いしたらサレットもご招待なさるっておっしゃってたわ。」イレエヌは嬉しそうに言つとその他の出席者や最新のドレスの形色などを話題にして皆がどんな格好で出席するのかを勧ぐつた。

皆適齡期の若い女性の集まりなのでその内話題は自然と好ましい男性の話題へと移つて行つた…

「今回の舞踏会にはアーウィソング边境伯様のご子息もいらっしゃるらしいわよ、サレットお久しぶりじゃなくつて？」イレエヌは意

味ありげな視線をサレットによこした。

「…ええ…4ヶ月振り位じゃないかしら？」

アーウィソング辺境伯とサレットの父が親しく最近では共に適齢期の子供を持った親として互いを良い嫁ぎ先としてみていた。サレットと辺境伯の子息ジェームズも互いに面識がありサレットもリスターと出会うまでは彼の心を掴むのに必死だった。

男爵令嬢の開くお茶会では誰と誰が恋仲だとか何処のお嬢さんが侯爵子息を狙っているだとかの話題に花が咲いていたがサレットは思い詰めた様に俯きいつもの様に率先して会話に参加することは出来なかった…そんな様子を心配したイレー又は茶会后にサレットを一人引き止めて様子を伺った…

「サレット、貴女一体どうしたの？お爺様のお宅から戻ってから様子がおかしくってよ、何か悩み事があるのならどうか話して頂戴。貴女のそんな様子は見ていられないわ！」イレー又はサレットが心配で手を握るとサレットの顔を覗き込み涙ぐんだ。

「イレー又…」サレットは友人の必死な様子と瞳にたまる涙を見てため息をついた。

「イレー又…実は私…恋をしてしまったの…叶わない恋なの…。」

「恋？それはジェームズ様ではなくって？貴女ずっとあの方の心を射止めようと必死だったじゃない。噂ではご両家の間ではお話は進んで意らっしゃるとか…？」

「いいえ、イレー又あの方ではないのよ…お爺様の村にお世話にな

っている間にお会いしたリスター様という方なの…。」サレットはリスターの名前を語るとキラキラとした瞳で何かを思い出すようにイレーヌにその思いを語った…。

いかにしてリスターに出会ったか、リスターの金色のサラサラと流れる髪、よく晴れた日の空の様な美しい瞳、その瞳の濃い色の部分にキラキラと光るように見える白い星…今まで見たどんな男性よりも紳士的で本当に心の美しい方だったと…

「…サレット…貴女本当にその方のことを…」

「ええ、あの方の事を思うと食事も喉を通らないし、叶わない恋だと思うと胸が締め付けられるようで…」

「そう。そうなのね…分ったわ…そのお方にお会い出来る事ができなくて私は寂しいわ、けれどサレット貴女は辺境伯様の元へのお嫁入りは…」

「…ええ。分っていてよ、今更お父様に言えやしないわ…この気持ちには忘れてしまわなくてはならないのよ…。」

サレットの悲痛な様子を見てイレーヌはどうやっても助けてあげる事の出来ない我が身の非力さを嘆きその日はずっとサレットと共に過ごし彼女の気持ちを吐き出させて少しでも気持ちを楽にしてあげる事に心を砕いた。

夕食後にサレットを迎えに来た馬車に乗せ見送るとイレーヌは溜息をつきソファで刺繍をする母の隣に座った…

「イレーヌどうしたの？溜息なんてついて？」母は刺繍を脇に置く

と娘を抱き寄せ心配そうに覗き込んだ。

「いいえ、サレットの事なの…彼女かなわぬ恋をしてしまつて…どうしたら彼女を元氣付けれるかしらつて…。」

母はサレットの悩みをイレエ又からさっぱりと全部聞き出すとそうなの…お辛いわねと慰めの言葉を言つと相手の男性の容姿を疑問に思つた…そんな田舎に何故そんな容姿の青年が??疲れ切つたイレエ又を寢室へと生かせると婦人は早速夫にその事を相談した…

「あなた珍しくやない?そんな田舎にそんな容姿の青年が…エルフとの混血かしら?まあそれなら珍しくもないし大方親に捨てられてそんな僻地で細々と生きているのかしら?」婦人は容姿の美しいエルフに恋をする娘の多さを知つていたので辟易とした溜息をつき夫に愚痴をこぼした。

「…そうか…まあそんな僻地にエルフの混血が居ること自体珍しいが瞳の色とその星とやは気になるな…まあ大方お前の言う通り親に捨てられエルフの国へも行けずその村で引き取られたんだろつよ…」夫は妻の噂好きを知つていたので適当な相槌を打つて話を流した。」

暫く婦人の最近の娘は…と言う愚痴は続いたが夫は話を半分に新聞に目を通しワインをすすつてやり過ごした…。

婦人は夫相手に長々と話をしただけでは飽き足らず翌日友人のお宅へとその話題を持つてお邪魔した…そんな風に僻地に美しい容姿の青年がいると言う噂が上流階級のご婦人方の元をれる間ついにその瞳の色に疑問を持つ者の耳へと届いた…。

「失礼ですがそのお話は本当ですか？」とある子爵婦人の午後の集まりにその子爵を尋ねて来ていた紳士がその話を耳にして子爵婦人に話しかけた。

「あらまあ、お聞きになつていらつしたの？嫌ですわ女たちのただの噂話にしか過ぎませんことよ。」子爵婦人は恥ずかしそうに言つたがしかし興味をもたれて嬉しそうでつた…。

「いえいえ、ちょっと珍しいお話だったので家で暇をもてあましている母にお土産話として聞かせてあげたら喜ぶかと思つたもので。」まだ年若い紳士は申し訳ありませんといつて魅力的な微笑みを婦人に向けた…

「まあそうでしたの？こんな噂話でお母様がお喜びになるのならいくらでもお話させて頂くわ。」子爵婦人は初めから話したくてうずうずしていたので得意になつて僻地の美青年の話を紳士に語つた…

「そうですか…そんな僻地にエルフ崩れは珍しいですね…その青年の身体的特徴はどんな感じなのですか？」

「ええ…聞いたお話ですと何やらとても綺麗な金髪をしていて青い瞳には白い星があるとか…そんな人間いるはずも無いでしょうけどね」婦人は青年の特徴を詳しくと言われ変なことをお聞きになるわと思ひながらも詳しく述べてやつた。

「僻地とはどちらの方なんでしょうか？」

「さあ？詳しくは存じませんが…聞いた話では何でも南の方の山奥との事でしたけど…」婦人はなおも食い下がる紳士にいぶかしむ視線を向けた。

「そうですか、いや珍しい事もあるものですね…母に話したらきつと興味を持つと思いましたのでつい詳しいお伺いしてしまいました…失礼しました。」そう言つて紳士は優雅に子爵夫人の手の甲にそつと触れる程度の挨拶のキスをすると子爵にも会わず早々と帰つていつてしまった…

年若い紳士は子爵のお屋敷を抜けると迷いの無い足取りで何処かへ向かつて急いでしかし周りに気付かれない程度に向かつて行つた…

「南の山奥…瞳の中に白い星とは…よく特徴を捉えたものだ…尻尾を掴んだぞ！騎士団長！その容姿を変えなかつたことを後悔するのだな…」紳士はニヤリと微笑むと足早に目的地を目指して行つた…

17話（前書き）

ごめんなさい、サブタイトルがぴったり来るのが思い浮かばないの
でとりあえずシリアル？で…

17話

年若き紳士から報告を受けたものは自身の任務を全うした。配下のものたちを南方の山奥の村々へと放ったのだ……

其の者達は黒き馬に乗り自身も黒い鎧に身を包み太陽の昇る時間ではなく深夜…闇夜の支配する時を選んで隠密に行動した…

その様な者達から何も知らない者達はどうしてその姿を隠せるだろう？ 追っ手達はジワリジワリと確実に獲物に近づいていった…。

サレットは自身の恋心を半ば諦め親の進める縁談の相手と久しぶりに再会するために侯爵家の開催する夜会に参加していた。もちろんエスコート役は辺境伯の長子ジェームズであった…

2人の結婚は両家にとって望まれたものであった…サレットの家族は娘に念願の爵位を与える事が出来、辺境伯には王国で10の指に数えられる豪商からの支援を手に入れることが出来る…サレットもそれをわかっており今までジェームズを追いかけていたのである。

「サレットお久しぶりですね、少し見ない間に随分と大人の女性になられましたね…」ジェームズに手を引かれサレットは力なく微笑む…

以前のサレットとは別人の様に奥ゆかしいな…所詮商人の娘上流階級のような優雅さも奥ゆかしさも無いものと思っていたが暫く会わない間にどこぞで教育でも施されたのであるうか…？

「おひさしゅう御座います…ジエーム様も相変わらず凜々しくていらっしやいますね…」サレットは自分の運命を受け入れようとジエームスに向かって優しく微笑んだ…

そうよ…どんなに思ってたってリスとの結婚が許されるはずも無い…私はお父様の為にもこの方に好かれなくては…

2人は連れ添って会場の中席を見つけ互いを知る為に会話をしていた…ジエームスが飲み物を取りに席を立った時一人の紳士がサレットに声をかけた。

「失礼、紹介も無く話しかけてしまつて申し訳ありません。シェイラーズ商家のお嬢様でいらっしやいますか？」

黒い軍服に身を包み將軍を意味する綬を肩から掛け威厳を身に纏った若さの盛りを少し過ぎたであろう30台後半の紳士が優しく微笑んでいた。

サレットは相手が身分の在る人だと気付き慌てて立ち上げるとスカートを摘み膝を折って挨拶した。

「は、はい。サレット・シェイラーズと申します。」

「失礼、名乗るのが遅くなりました、ヴェルト・マグダリンと申し

ます。「ヴェルトは年下のサレット相手にも優しく微笑み礼をとった…

「突然話しかけてしまって申し訳ありませんさぞや驚かせてしまったでしょうか？」

「とんでも御座いけません、初めてお目にかかりましたものでその…」サレットは相手の身分が分り身の置き場の無さそうにしている…。

「ああ…ドラゴン族を目にするのは初めてでしたか？」ヴェルトはサレットの困惑の訳を思つて殊更に優しく笑つた…

「いえ…あの…」サレットは付き添いも無く異国のドラゴン族と対面していることに恐怖を覚え俯いてしまった…

「失礼、若いお嬢さん一人の時に話しかけてはいけなかったかな？」ヴェルトは困つたように微笑むと口元に手をやり困つたように首をかしげた。

「イエね、先日あなたのお父上がセイレーン・ミュコスに行かれた際偶然お会いしてあなたのお話を伺つた物だから貴女を見たら直ぐに分つてご挨拶しなくてはと思つた所です。」

「そうでしたか、それでは父がお世話になりましたのね。」サレットは父の事が出ると幾分警戒を緩めヴェルトと話をして大丈夫そうだと思つた…

「いえいえ、お世話になったのは此方の方で…そう言えばご両親がお国を出ている間に貴女はお爺様のお宅にいらっしゃつたそうです

「がお爺様のいらっしやる所は此処から遠かったのですか？」

「ええ、祖父母の住む村は此処から南方の山の方に位置しております。馬車で3日かかる所にあります。」サレットは相手の親しみやすい笑顔にほだされ人にはあまり言いたくない祖父母の田舎の事を話してしまった。

「そうですか、南方の町と言われると…キャスターブリッジ卿の所ですか？」

「いいえ、もつと北南のモリニュークスを越えた山の麓でルチエッタと言う所です…何も無い田舎なのでお恥ずかしいですが、とても自然の多い所で避暑には良いところですわ。」サレットは以前は恥ずかしく思っていた祖父の村だったが今となっては哀愁を感じさせる所であつた…

「そうですか…ルチエッタ…一度訪れてみたいですね…おつとお連れのお方がお戻りだ…それではサレット嬢また…」そう言うつとヴェルトはサレットの手袋の上からそつと触れる程度のキスをする。来た時と同じように颯爽と去って行った…。

「今お話していた方はどなたです？」レモネードを持って戻つたジェームスはヴェルトの後姿を不思議そうに見ていた。

「ヴェルト様とおっしゃつてお父様のお知り合いだそうなの…。」サレットはジェームスからレモネードを受け取ると一口口をつけ何故あの人は自分に話しかけたのかを考えた……

追っ手

カッソカッソ……

石で出来た硬い廊下に革靴の音が木霊する……

コンコン……

「閣下、失礼します。」その者は部屋からの返事を待たずして室内へと身を滑らすように入っていく……

「ヴェルトか……どうした？」

「夜分にすみません……閣下、遂に詳しい場所を突き止めました。」

「此処より東南、ニュークスの更に先にある村ルチエッタと呼ばれる村です。」

「……そうか……追っ手は？既に手配したのであろう？」

「御意……情報を入手後配下の者を向かわせました。今頃は先発に連絡して合流している頃と思われます。」ヴェルトはニヤリと微笑み閣下と呼ぶものに軽く頭を下げる。

「で、あるか……では私もそちらへ向かおう……この事を陛下には？」

「いえ、必要は無いものと思いましたが……かの国の者に報告いたしますか？」ヴェルトは怪訝そうに相手を見上げる。

「否、必要ない。私が皇帝に直接引き渡せばよい事だ。もう下がれ、この事はくれぐれも…」

「はっ、分っております…では私は持ち場に帰ります。何か御座いましたらいつもの方法でご連絡ください。」ヴェルトはサツとお辞儀をするところりと背を向けするりと扉を抜けていった…

…遂にこの時を迎えたか…14年長かった…今まで巧妙に存在を消していたのに何故今頃になってこうもあからさまに姿を現したのか…？まあ良い。おかげで物事が皇帝陛下の意のままとなろう。

「ハハハ…」男は高らかに笑うと小雨の降るベランダへと出て行った。

「…ツチ…うつとおしい雨だ。」そう言う男はマントをサツと翻し耳の上部から美しいルビーの付いたピアスを外すと一瞬にして赤銅色の瞳と同じドラゴンへと姿を変えた。

ツチとドラゴンは舌打ちをして大きな翼を広げ1、2度大きく翼を上下させそのままベランダより飛び立っていった…ルチエツタ村を目指して…

追っ手達は夕方、各家庭では主婦達が夕食準備に終われる頃村の外れに集まっていた…全身黒づくめ傍からみてもその姿は異様でこの村にはえらく不釣り合いであった…男達は3人の男だけが別行動を

取りこの村では数少ない酒屋へと入っていった…

その店の看板にはナミナミと注がれたビールジョッキとよく焼けた肉の絵が描いてあり容易に其処が飲み屋であることを想像させていた。店内より漏れる光と早々に酔っ払った村人の声が戸口より零れ男達は店の前で一度足を止めると目を合わせ頷き店内へと入って行った…

「…いらつしゃい。」給仕をする若い娘が振り向きいつもの様に明るく客を迎えたが相手が見知らぬ黒ずくめの男達であつた為声は尻すばみとなり次の言葉が出てこなかった…

「やあ、エールをピッチャーで頼む、それと腹ペコなんだ、その暖炉で焼けたベーコンを持ってきてくれ。」1人の男が格好とは裏腹に明るい声で注文すると3人は村人達が座るテーブルの直ぐ傍に座った。

「はい、ただいま…」娘は明るい声にちよつと不信感を抱きつつもグラスとビールを取りにカウンターへと向かった…

「やゝやつと飯にありつけるなゝ。ニークスの親方のせいで余計な仕事を押し付けられちまったよ…」たく…俺らは今日中に家に帰れるかな？」

「まゝそうばやくなよ、あつたかい飯も食えることだし、ちよつとした小遣い稼ぎが出来たんだ…」こんなお使い軽いもんだ！」

「ほんとに、まずはビールで渴いた喉を潤そうぜ！話はそれからつてもんだ！…」

3人は陽気に言うと給仕の娘からビールを受け取り娘をからかう事も忘れず逃げて行こうとする娘の手を捕まえるとビールを注がせ卑猥な言葉を浴びせお尻をぽんと軽く叩くと嬉しそうに笑い声を上げ逃げていく娘を尻目に高くグラスを掲げ激しく乾杯すると一気に飲み干した。

「くかあうまいぜ！生き返る！！」

「あゝこんな山奥にも旨いエールがあるもんだ！」

「それより此処に居る奴らに聞いて仕事を終わらせちまおう！」

「ああ、そうだな…後は親方に頼まれた書類を渡しちまってほろ酔い気分で帰れるってもんだからな！」男は陽気に言う。と隣の席でビールを飲む村人らしき爺さんに声を掛けた。

「なあ、おいじーさん！この村に青い目をした男は居ないか？名前は…えゝつと何だっけ？まあとりあえず青い目した金髪の野郎だ！おれたちやニユークスのお偉いさんにそいつに渡すようにって書類を預かってきたんだ！」

「青い目？この村で青い目って言ったら牧師様のことだあ！あの方以外にこの村にや青い目のお人なんかいやしねえ！」爺さんはビールをちびちびやりながら歯の抜けた口でしゃべった。

「そうかい！で何処に行ったらその牧師様に会えるんだい？」

「牧師様んちは村の東の奥に行った緑色の屋根の大きなお宅だ！この道でて右にまっすぐ行ったらそっから東に向かって行けばすぐさ

！」爺さんは酔っ払ってるのか大きな声で叫ぶように言った。

「そうかい！ありがとうよ！！おかげでさっさと仕事を済ませて家に帰れるつてもんだ！」男は大声で爺さんに向かって礼を述べると店の親父が持ってきたベーコンに食らいついた。

…そうして1時間とちよつとすると爺さんが帰っていき男達はそれから半時間ほど居座ると金を置いてありがとうよ！と叫んで出て行った…

…店の娘は走っていた。何かおかしい、こんな時間に牧師様を尋ねてくるなんて…今までそんな事無かった…なんだかやな予感がある…村長様に知らせなきゃ！！

コンコン…

「村長様夜分にすみません、D o g & a m p ; D u c k のロツサです！」

「…どうしたんだい？こんな時間に店のかきいれどきじゃろに？」村長はビックリしながら扉を開けると玄関に佇む赤毛の娘を見下ろした。

「…知らせるべきか迷ったんですが…父さんに言われて急いできました。」娘は辺りを気にしている様子できよろきよると落ち着きが

無かった…

「…入りなさい。」村長は娘を家に招きいれりと辺りを見回してから扉を閉めた。

「知らせる事とはなんだい？」村長は娘をおちつかせようと優しい声を掛けると微笑みかけた。

「はい、あの…さつき半時ほど前に見慣れない3人の黒い服の男達がやって来て牧師様に用事があるとかで店にやって来たんです。トーマス爺さんにこの村に青い目の金髪の男がいるかって尋ねてました。したらトーマス爺さんそれは牧師様の事だって教えてしまつて…」ロツサは一気に話してしまつと心配そうに村長を見上げた。

「…よく分つたよロツサ、牧師様には私から伝えておくから店に戻りなさい。君が居なくなつたら怪しまれるかも知れない…」村長は娘の肩を叩くと落ち着かせようと氣を使った…

「…はい。分りました…じゃあ私はこれで。」ロツサはまだ不安であつたが自分が居ないことで怪しまれるやもと思うと急いで店へ戻つて行つた…

…どうしたものか…もしや気付かれたのか？村長は不安に駆られると妻に教会に行つて来ると告げて足早にカージスの元へと向かつた…

3人の男達は先程の陽気さなど微塵も感じさせない様子で他の待ち伏せをしていた男達と合流しある人物が訪れるのを待った…

村の外れの森の中で小さな火を起こしその人物を待った…突然鳥達がギヤアギヤと騒ぎながら飛び立ち木の枝が折れる音と共に小さな火の傍に赤銅色のドラゴンが優雅に舞い降りてきた…

男達は居住まいを正すと焚き火をすばやく消しドラゴンが元の姿に戻るのを待った…ドラゴンが居た所に黒髪に白いものが混じり始めた黒い鎧を身に纏った男が耳にピアスをしながらマントを翻し男達に向き合った…

「…それで？」男は男達を見回すと低い声でリーダー格の男に話しかけた。

「はっ！家は見つめました。所在も確認済みです。直ぐ向かわれますか？」

「もちろんだ…だが必ず全員生け捕りにせよ。気をつける小僧も居るはずだ、姿を変えられて逃げられたら面倒なことになる。家の周囲を取り囲み逃げ道を封じ女を人質にしろ。女は暴れたら多少手荒で構わん目的は子供だ！14、5歳位だ見ればわかる傷はつけるな必ず生きたまま陛下の下に連れて行くんだ！」

「御意！」男達は跪き頭を下げると夜の闇の中へと姿を消して行った…

男は配下の者達が闇に紛れて行ったのを確認するとニヤリと笑い

男達の後を追った……

逃げる

…村長は心配に駆られ老体に鞭を打ちながら走った…カージスの家に向かつて…

何故今頃？何故居場所が分ってしまったのか？村長の頭の中はパニックだった…とにかくカージスに知らせ家族を安全な場所に向かわせなくては…村長は必死だった…急いで駆けつけるとカージスの家からは夕食の準備中なのか芳しい匂いとサニーが台所に居る姿が窓から垣間見えた。

村長は玄関を訊ねようと思った…しかし寸での所で思い直すとそつと木立伝いに移動し台所の勝手口へと回った…。もしかしたらもう見張られているやも…村長ははやる気持ちを抑えるとそつと勝手口をノックした。

コンコン…「サン忙しい時間にすまんわしじゃ…すまんが静かに開けてくれ…誰にも気付かれん様に。」

サニーは忙しい時間の突然の来訪者にビックリしたが村長の只ならぬ様子に小さく頷くとそつと扉を開け村長を中に通した…

「こんな時間すまんしかしカージスに火急の用があるんじゃ、すまぬが直ぐに家族を全員集めてくれ。」村長は家の中に入ると背後を確認して扉を閉め台所の窓という窓のカーテンを閉めた。

「…はい。ですがリスとクロスが裏山の湖で…あの…」サニーはど

うしたのかと言葉を濁した。

「お前達の秘密ならすべて知っておる2人は其処ではないかと思つて既に他のものを其処に向かわせておる…念のため山中で連絡が来るのを待つようにな…。」

「…分りました。」サニーは頷くと書齋に居るであろう夫を呼びに急いで向かった…

はあ…小さく溜息をつくと村長はきつちんの椅子に座ると2人に連絡を頼んだジェイが直ぐに向かつてくれる事を願った…

慌てた様子でカージスとサニーが台所に現れた。

「村長？火急の用事とは？」カージスは緊張の面持ちで村長に詰め寄った…

「恐れていたことが起きた…カージス酒屋が知らせてくれた…此処がばれた様じゃ…確信は無いが金髪で青めの男を探しているそうじゃ…逃げろ！！暫く姿を隠せ！」

「村長…分りました。」サン、リスとクロスは湖か？「カージスは素早く頷くとサニーに向き直った。

「ええ…夕食まで戻らないわ。」サニーは目に見えてうるたえた表情で頷く。

「あの子達にはジェイが知らせてくれたはずじゃ、怪しまれんように妻にジェイを伝言に使うように言付けた…今頃は2人に合流して事の次第を伝えておるじゃろう…2人とは後出会える、さあ早く行

くんじゃー!!」

村長の言葉にカージスとサンは力強く頷くと村長を家から見送り直ぐに取る物もとりのあえず家を出て行く準備をした…

「サン！早くするんだ！急がなくては村長の折角の忠告が無駄になる！」

「ええ、でももしも戻れなかった時の事を思うと…」サニーは大きなバックを抱え家の中をキョロキョロ見回す…

「体さえ無事なら何処でだってまたやり直しが利く！行くぞー!!」

「あなた…あの子達は大丈夫かしら？」サニーはカージスに手を引かれながら不安げに夫を見上げる。

「村長がついてる、まずは此処に居る事の方が危険だ！」カージスはサニーの手を引き玄関の扉を開いた…

…その時月の月光に照らされ逆光になった玄関に一人の男が佇んでいた…

「…こんな時間にお出かけですか？そんな荷物まで持って…どちら

へ？」満月のに照らされ顔の見えない男がニヤリと笑った：

「お久しぶりです。隊長？」カージスが暗闇に慣れてきた瞳で見つめる相手はニヤリと笑ったままカージスに近づいてきた：

「お、お前は…？」カージスはサニーを背に庇う様に後ずさると男と正面から向き合った：

「おや…お忘れですか？寂しいですね…アラン国王がご健在だった頃わが皇帝陛下との戦で何度と無く剣を交えましたが？」男はまた笑うと剣を引き抜きカージスの前に構える。

「無駄な抵抗などせず私と一緒に来てもらおうか？カージス閣下…？」

カージスはチツと舌打ちするとサニーを屋内へ逃がそうと手を離し入り口を自分の体で塞いだ。

「おやおや家族を守られるのですか？貴方も相変わらずだ…しかし残念。私が一人で来ているとお思いですか？」男が剣を構えたまま薄く微笑むと口笛を吹いた：

「キヤー！！！！！！！！」

カージスが屋内に逃がした妻の悲鳴がこだまする…カージスはがっつと振り返った時にはもうサニーは怪しい男に後ろから羽交い絞めにされ喉元に短剣を当てられていた：

「クソッ…」カージスは齒軋りすると腰の剣を引き抜きサニーを掴む男に向かって行った。

カージスが男に剣を振り下ろすとサニーを掴んでいた手を離しドンツと手荒く突き飛ばすとカージスと剣を交えた。

「サン！逃げろ！」カージスはサニーにそう叫ぶと崩れ落ちたサニーから少し離れ歯を食いしはると3人の男を相手に激しく剣をぶつけた。

サニーはとつさに立ち上がろうとしたが腰が抜けたのか立ち上がることが出来ない。少しでも逃げようと這ってその場から離れようとした…

「やれやれ…お前達相手をしてやれ…くれぐれも殺すなよ？」言々と必死で逃げようとするサニーの方に歩み寄り逃げられない様にスカートを踏んで動きを封じるとおびえた表情で振り返るサニーの腕を掴み乱暴に引き上げた。

「やめろ！妻には手を出すな！妻は関係ない！！」カージスは3人の男達に囲まれ身動きが出来なくなっていた。

「私一人の命で十分だろう？言う通りにする。だから妻から手を離せ！！」カージスは叫ぶと剣を下ろし手下の男に素直に捕まった…

「…あなた……。」

一人の男に乱暴に後ろ手で縛られると背後から蹴られその場に跪かされた…グウツと唸り下を俯いていると髪を掴まれ上を向かされた。

「それで…お子さん達は何処ですか？」カージスの髪を掴み上げ無理やり目を合わせながら赤銅色の瞳の男が尋ねる。

「子供？そんな者は居ない。さあ早く妻を放してくれ！」カージスは白を切ると妻の手首にロープを巻く男に目をやりながら叫ぶ。

「私がそんなに甘い男に見えますか？それでも100年以上皇帝に仕える赤銅色のドラゴンですよ？」クツクツと笑うと部下の一人に連れて行けと叫んだ。

「やめろ！私達に子供なんて居ない！妻はただの人間だ！私だけを連れて行けばいいはずだろう？」カージスは食い下がり半ば拝むように目の前の男を見上げた。

「…貴方は素直じゃない…この人はいわば保険です。貴方が子供達の居場所を吐かないのならこの方に聞くまでだ。」親指でサニーを指差すとサニーの腕を縛るロープを持った部下がサニーの胸に剣をかざす。

「さあ、奥さん…貴女にはお子さんが居ますよね…2人いや1人は別腹かな？」ニヤリと笑いサニーの腹に剣を当てポンポンと叩く。

「やめろ！子供なんて居ない！！」カージスは叫ぶと縛られたまま立ち上がるうとした。すると後ろから蹴られ再度地面に突っ伏した。

「イヤ！あなた！！」サニーは叫ぶと自分を縛り上げる男と剣を素早く見ると剣の上に自らの体を預けた…

男は突然のことに驚き自分の剣に覆い被さったサニーの重みでよろけた。

「何をする！！」サニーの体を引き上げる。

「サニー！！！！」カージスは引き上げられたサニーの左脇腹がジンワリと黒い色に染まって行くのを見て悲鳴のように名前を叫んだ！

「クソッこのアマが！！」赤銅色の瞳の男が悪態をつきサニーの元に行くときを失っているサニーの髪を掴み無理やり立たせると傷の具合を調べ部下に連れて行け！と命令した。

「…カージスお前がこのまましらをつき続けるならあの女は助からんぞ！！お前も来い！」赤銅色の瞳の男は怒りで身を震わせながらカージスの髪を掴み立ち上がらせると引きずるようにその場を後にした……

血痕

リスターとクロスは湖のほとりでいつもの様に剣を構え向かい合っていた…

「クロス！何度も言っただろう！剣先を下げるな！目で見えているものだけでなく五感で感じ取れ！」リスターは剣先でクロスの剣を叩くとクルリと回しクロスの剣を握る手を叩いた。

「ッッ！」クロスは痺れる手を我慢し飛ぶように右に移動すると兄の隙を探そうとジワリと滲む汗を無視してリスターを睨みつけた。

「どうした？かかって来ないのか？お前は隙だらけだぞ！」リスターは言うところクロスが重心をかける左足を狙って剣を繰り出した。

クロスはリスターの攻撃を何とか交わすと体勢を立て直そうと2、3歩後退した。しかしリスターの流れるような攻撃はクロスに逃げる隙を与えず足元を狙って攻撃を仕掛けてきた

「わっ！！」クロスは攻撃を交わせずその場に不恰好にも尻餅をついた。

「1つ本！クロス…また死んだぞ。」リスターは息を切らすことも無く尻餅をついたクロスの首筋に正確に剣を突きつけていた…

「…降参…」クロスは突きつけられた剣から少し逃げて降参した。

「ハア…クロスまだまだだな…お前は一人で練習していると言うが

「一体何をしているんだ？これからはまた放課後に剣術の稽古だ。」
リスターは溜息をつきながら剣を鞘に収めるとクロスに手を差し伸べ立たせてやった。

「ちゃんとやってるさ…兄さんが強すぎるんだよ…一体どうしたらそんなに軽やかに動けるのさ？」クロスはまたも自由時間を削られることにブツブツ言いながら剣を鞘にしまつと尻についた草を払った…

「お前より5年早く生きていただけの事さ…そろそろ夕飯だな…今日はここまでにして家に帰ろう。」

「あーもう疲れた！」クロスは言いながら剣に付いた草を剥がし鞘にしまった…

「クロス家まで競争だ、先に着いた方が勝ち。負けた方は夕食の片付けを手伝うんだぞ！」リスターは言うとお先につと行って走って行った。

「兄さんずるいよ！！」クロスも負けてなるものと走り出す。

リスターは後ろを走るクロスをチラチラと振り向きその成長をのみ締め一人微笑む。クロスは必死に兄を抜かそうと追いかけている。

2人がもうじき家の煙突から昇る煙が見えるであろうと頃まで来るとリスターが突然止まってクロスを腕で制した。

「誰か居るぞ…シッ！クロス静かに！！」リスターはクロスに目で訴えるとその場にしゃがみ近くの茂みへと移動してクロスを呼んだ。

2人が息を殺して辺りを見回すと2人からかなり離れた所で何も持たずにきよろきよろと辺りを見回しているジェイの姿があった…

「あいつこんな時間に何してんだ？」言つてクロスは立ち上がるとリスターを連れてジェイの所まで駆けて行つた…

「おい！ジェイ！！」クロスが大声で呼ぶとジェイはハツとした様に振り返り身振りで静かにするようにと訴えて近くの木の茂みへと2人と手招きで呼んだ。

「クロス…リス、静かに。」言つとジェイは緊張の面持ちで辺りをキョロキョロと見回す…それにつられクロスとリスも辺りを窺いジェイと目を合わせると黙つて頷いた。

「クロス、リス落ち着いて聞いてくれ…さっき村長からの伝言を受け取つて2人を探しに此処まで来たんだ…今日見たことない怪しい男達が神父様を尋ねまわつて居たそうだ…村長がもう神父様には伝えたそうだ…それで俺がお前達に身を隠すようにと伝言を伝えに来た。」ジェイは声を潜めリスの瞳をまっすぐ見つめると溜息をついた。

「リス…俺だつて馬鹿じゃない…クロスの様子、みんなの髪の色、言葉遣い…それにたまにやつて来るエルフとホワイトウルフ…何より瞳の色…ドラゴン族つてもっと前から気付いていたよ。」ジェイは真っ直ぐに見つめ返すリスの瞳の強さに押され目をそらして俯いてしまつた…

「…そうか…で、父と母は？何か聞いていないか？」リスターはジェイを見つめる瞳を幾分和らげると両親の安否を尋ねた。

「悪いが何も聞いてない…俺は村長に直接言われたんじゃないやなくて村長っちのおばさんに言われて来たんだ…とにかく2人に伝えて俺ん家で連絡があるのを待って…」ジエイはそう言つと辺りを見回し闇が深くなつてきたのを確認するととにかく俺んちへ来てくれと言つて立ち上がった。

「ああ…わかつた有難う…いつもの方法で2階のお前の部屋に行くよ…」クロスは何が何だか分らないが兄と友人の只ならぬ雰囲気察すると声を落としジエイを見つめ頷いた。

「ああ…じゃあ後で…」言つてジエイは踵を返すと家に向かつて走つていった…

「…兄さん一体何なの??」クロスは思案顔で遠くを見つめるリスターに尋ねた。

「…後だ…まずはジエイの家に向かおう…走るぞ。離れず付いて来い。」リスターはクロスの言葉をさえぎると目を細くして前を睨み周囲を窺つとクロスの肩を叩き絶対離れるな、俺が止まったら直ぐに身を隠せと注意してクロスが辛うじて追いつける速度で走つて行つた…

クロスは前を走るリスターから視線を逸らさない様に注意しながら物思いに耽る…

「…いつたい…なんだんだ?それよりジエイは知っていたのか…それなのに俺大事な友達にずっと嘘を…」クロスはジエイに自身の正体を隠していた事を思い今までのジエイの様子を思い出していた。

皆で川で泳ぐ時に鱗を見られない様にと上着を脱がないことをア

ンディーとルーには散々馬鹿にされたのにジェイだけはいつも気にせず何だっただろ？と庇ってくれた事…将来の夢や都・他国について語る時人外の事をジェイはいつも詳しく話してくれたっけ…その時にはもう気付いていたのかな？俺の瞳の中に光る白い星に…ドラゴン族の証に…ジェイ…大事な親友…

クロスは目頭が熱くなっている事に気がつき頭を振ると今はそれより一体何が起きているのかの推測を始めた…

怪しい男達が何故父さんを探すんだ？ドラゴン族だから？何故僕達が隠れなきゃいけないんだ？父さんに掛かれば男の一人や二人簡単に撃退できるのに？むしろいつそ真の姿に戻り飛び去ってしまえば？…止め処もないことを考えているとジェイの家がボンヤリと暗闇に浮かび上がって見えてきた。

先を走っていたリスターは立ち止まり木立の中に隠れクロスに向かって頷き手招きした。

「クロス…どうやら此処は安全なようだ。どうやって2階に入る？」

「ああ…ちょっと待って…息が…」クロスは呼吸を落ち着けると辺りを見回しリスターに付いて来てというジェイの家の庭に伸びる大きな栗の木に根元に走って行き器用にスルスルと登っていった…

リスターが見つめる先でクロスは木の上の方まで上ると一番建物の窓に近い枝にぶる下がると開いている窓に向かって1、2度体を揺さぶって部屋の中へと飛び込んでいった…

リスターが啞然としていると飛び込んでいった窓からクロスがヒョコツと頭を出し兄さん早くと小声で叫んだ。

ハツとして辺りを窺うとリスターもクロスを真似て木をよじ登り枝が折れないかと様子を見てから窓の中に飛び込み1回転すると綺麗に着地した。

クロスはリスターが飛び込んでくると再度窓から辺りを見回し音を立てない様に窓を閉めるとカーテンを引き兄に向き直った。

「兄さん凄いな、初めてで綺麗に着地するなんて！僕なんて何度も体をぶつけて痛い思いをしたよ。」少し微笑んで話すとクロスは急に真顔になりリスターの傍に立つと真剣な眼差しでリスターを見つめた。

「兄さん… いったい何事なの？説明して。」

「・・・」クロスの真剣な目に見つめられてリスターはらしくなく爪を噛むと諦めたように溜息をつき部屋にあるソファを指差しクロスと向き合う形で座り暫し無言でクロスと見つめ合った……

「クロス… 私も詳しくは知らされてはいないんだ… 只お前も知っての通り俺達はドラゴン族… 種は今や限られている… 他のドラゴン族は皆国に仕えているんだ。自由なドラゴン族なんて存在しない…」

「それが何故だか私達家族は縛られず自由に生きている… これが何か理由があるはずなんだ… きっとこれが今回身を隠せと言われた理由なんだと思う…」リスターは俯いて両手を握り締めながら話していたがクロスの不安そうな顔を見ると大丈夫だよと言って笑顔を見せた。

「きっと大丈夫だ、村長さんが事前に知らせてくれたんだし、私達

が無事な様に父さんも母さんも大丈夫だ。今は此処で父さんからの連絡が来るのを待とう。」「リスターは今だ不安げな表情を浮かべるクロスの両手を身を乗り出して握ると信じて待とう。と言って安心させるように笑顔を浮かべた…

「…分った…そうだよね…兄さんが言う様に今は信じて待とう。」「クロスも兄を心配させまいと笑顔を作りあーお腹減ったな〜とへこむ腹を撫でた。

2人が小声で話をしているとドアをノックする音と共にジェイの小さく開けるよと言う声と共に真っ暗な室内に廊下から漏れる光が差した。

「2人共、取り合えず簡単なものだけど腹に入れてくれ」ジェイはサンドイッチと紅茶を載せたトレーを2人の前におくと自身もクロスの横に座った…

「父さんは都の研究所に行ったきり暫く戻ってないんだ、今は俺だけ…安心してくれ…」ジェイは神妙な顔で溜息をつくとしリスの方に向き直りじつと見つめる…

「リス…俺は何で君達家族が狙われたのか分らない…けど多分ドラゴン族って事が理由なんだろう？俺も何度か記述を読んだ事がある。神の采配から自由なドラゴンはこの国には存在しない…在るとすればそれは誓約を交さなかったドラゴン…黒竜の一族だけだ…」ジェイはリスの瞳の色を見つめるように話しはじめる…

「リス…そしてクロス…君達の瞳の色は…それに該当しない……。」「リスはジェイを見つめ何も言おうとしない。

「カージス神父の瞳はスカイブルー…そして君もね…その意味する事を俺は…」

「分っているよジェイ…言いたい事はね…ただ君は誰よりも私達を知っている筈だ…ただ言える事は信じてくれ…それだけだ。」言いよどむジェイを遮る様にリスが紅茶に手を伸ばし一口すするとジェイに柔かい微笑を向ける…

「…ああ…やはりそうか…いいさ分ってる。クロス、お前は俺の親友だ。」ジェイはリスの微笑を見てホッとしたのか隣に意味不明という顔で2人の話を聞き入っているクロスの肩を抱く。

「意味が全然分らないんだけど…僕達は黒竜の一族なの？違うでしょ？」クロスは肩を抱かれたまま怪訝そうにリスターを見る。

「…ああ…もちろん違うさ…私達はこの国でもしかしたら自由なドラゴンなのかも知れない…けど私は違うと思うよ、父さんはいつも私達に隠れて誰かと会ったりしていた…トウリーもジーンもね…何か意味があるのかもしれない…まあ父さん達に会えば話してくれるだろう。」リスターは紅茶をじっと見つめながら話し終えるとそれを一気に飲み干した。

「…うん…分った。」クロスは納得行かないのか眉間にしわを寄せたまま膝の間に握った両手を見つめる…

「…とにかく此処は安全だ…何かしらの連絡があるまではゆっくりしてくれ。」ポンとクロスの肩を叩き笑顔を見せるとジェイはもしかしたら誰かが来るかもしれないからと言って部屋を出て行った…

「…彼には世話になるな…」リスターはポツリと呟くとサンドイッ

チの皿をクロスに押しやり自分は少し休むよとソファに横になるとクロスに微笑み目を瞑った…

リスターが眠ってしまった様なのでクロスは空腹を思い出しサンドイツをつまむと月明かりに照らされる窓の外を見つめた…父さん、母さん無事なのか？一体何だって言うんだ…父さんはドラゴン族だから追われているのだろうか…自分たちも追われているのだろうか？…取り止めのない、誰も答えてくれない疑問が後から後から溢れクロスは頭痛がしてきた。

取り合えず父さんから連絡が来るのを待とう…考えたって答えが出ない…

疲れた体に温かい紅茶と満腹感が押し寄せクロスは目を閉じた…きつと明日、明日になれば父さんと母さんに会える…そうすれば……クロスは意識を手放した…

クロスが眠りの世界に落ちてから1時間が過ぎた頃リスターはそっと瞳を開けた…静かな室内にクロスの寝息がリズム良く響く…リスターは物音を立てない様にそっと身を起こし立ち上がるとクロスに手近にあった毛布をそっとかけよく眠っているのを確認すると暗闇の中を猫のように物音を立てずに部屋から出て行った…

リスターが階段を下りていくと静かに話をしている声が聞えてきた…

「村長様、ジェイ…」リスターがそつと声をかけると2人は飛び上がり一斉にリスターを見た。

「ビックリさせるなりス、クロスは眠ったか？」村長は胸をなでおろすとリスターを手招きして応接間のソファに座らせた。

「…それで父と母は？」リスターは顔をしかめ村長を見る。

「…残念じゃが連れ去られた様じゃ…カージスからの連絡が無い…此処に来る前通った道に新しい血痕が付いておった。」村長は其処まで言つと口ごもり俯いてしまった…

「申し訳ない、せつかく事前に情報を得たのに…」村長は両手を握り締め声を震わせる…

「…いえ、村長に責任などありません。父は…私達はこの事を予期していたのですから…この地に少々長居が過ぎたのです。皆さんに余計な迷惑を掛けてしまい申し訳ありません。」リスターは腿の上で両手を組むと座ったまま頭を下げた。

「…すみません…」リスターは謝罪の言葉を呟き俯く。

「…リス、カージス達はよもや殺される事など無いのじゃろう？」村長は恐る恐る言葉を紡ぐとそつとリスターを窺う。

「…ええ…幸か不幸か私達が此処に居ます。特にクロスが…私達を捉えるまで命を奪つことは無いでしょう…」リスターは苦しげに顔を歪め2人を見る。

「…やっぱりクロスは…あの瞳の色は…」ジェイがそんなリスター

を見つめ震える声で尋ねる。

「ああ…ジェイ君の言う通りさ。」リスターは皮肉そうにニヤツと顔を歪め笑うと頭を抱え俯いてしまった…

「…リス、カージスと以前から決めてあったとおりあの金髪の若者と白髪の小僧宛に鳩を放った。気をしっかりと持つのじゃ！こうなつてはお前しか居らんのだじゃ。」

「…分っています。私がしっかりしなくてはクロスには私しか居ないのでから…」しかしリスターは顔を上げたが両手で顔を押さえくぐもった声で村長に答える。

「…しっかりしなくては…トゥリーとジーンが来るまで…」リスターは自身に言い聞かせるように呟くと握りこぶしが白くなるまで力をこめた。

「…リス、どうする？此処には長くも居られまい。追っ手が戻ってくるかも知れぬ。」村長はまだ若いリスターに全ての重荷を乗せてしまう様な自身の言葉に嫌悪しながらも一刻を争う状況をリスターに言わねばならなかった…

「…そうですね…父との取り決め通り私達はここを出ます。申し訳ありませんがジェイ、食料と必要なものを分けてはもらえませんか？」リスターは先程の混乱を振り切るように強い言葉で意志を示した。

「…ああ、村長に言われて出来るだけの準備をしてある。リス…何処に向かうんだ？」ジェイは恐る恐るリスターに行く先を尋ねた。

「…申し訳ないがそれは言えない…許してくれ…」リスターはジェイに申し訳なさそうに言っていると村長の方に向き直り頷き立ち上がった。

「トウリーとジーンには私達の行く先が分っていると思います。荷を纏めて真夜中私達は出発します。村長、ジェイご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。」リスターは2人に向かって頭を下げるとジェイに荷物を調べさせてくれと言って応接間を出て行った…

ジェイは慌てたように村長に一礼するとリスターの後を追いかけていった…。

母

カージスは意識をゆっくりと取り戻し自身の身体から訴える激痛に慄きうめき声を漏らした。体中が熱を持ち全身を切り刻まれたのではと思うような痛みが駆け巡り頭を持ち上げる事も苦しかった…

痛みに呻きながらカージスが身体を持ち上げようとする腕は後ろ手に拘束され自由に動かすことが出来なかった。

「…ツクソ…」悪態をつき必死で身体を持ち上げようとする支える腕を伸ばされビクリしてその手を伸ばした人物を見上げる…

「サニー…無事だったか…」妻の姿を見止め安堵の溜息を付き抱きしめようと腕を伸ばしたかったが拘束された腕は動かず舌打ちをする。

「あなた…気が付きましたか？身体は痛みますか？」サニーはカージスを支え壁に寄りかからせるとその顔を覗き込み頬を撫でる…

「…ああ、体中痛むが命までは取られなかった様だ…此処は…一体何処だ？」カージスは無理やりに笑顔を見せると薄暗い牢内を見渡す…

「サニーお前、身体は？身体は大丈夫なのか！？」カージスは傷ひとつ無いサニーの顔を見て最後の場面を思い出しビクリして尋ねる。

「ええ…あの後私も意識を失ったのだけれど気が付いたらこの城の一室に寝かされ魔術を施されていたわ…お陰で皮肉にも傷は癒え

てしまった…」サニーは自嘲の笑いを漏らし溜息を付く。

「此処では私は自分の命さえも自分の思うようには出来ないのね…人間って弱いものだわ。」サニーは血と泥でグシャグシャに乱れた夫の髪を撫でる。

「そうか…無事でよかった…お前に何かがあったら私は…」苦しげに顔を歪めサニーの肩に頭を乗せささやき声で無事でよかったと呟く…

「お目覚めですか？」2人がお互いの傷を確認しあいこれからの事を相談しているときひそかな靴音と共に暗闇にその姿を現した…

「ご夫婦でお互いの傷を舐め合っているようで感動しましたよ。」赤銅色の髪は蠟燭の明かりに照らされどす黒く見えた…

「あの後貴方達のお宅を拝見させて頂きましたよ…寝室は3つ…青年期の男部屋、少年期の男部屋…お子さんの部屋ですね？」男はニヤリと笑い木製の椅子を牢の前に置くとマントを翻しゆっくりとすわり足を組んだ。

「さて…息子さんは何処ですか？」身を乗り出し蠟燭の明かりでも見える様に顔をこちらに向けると男は笑った…

「お前達、奥方様を此方へ。」男が暗がりに向かって命令すると皮の鎧を身に着けた男達が2人牢の鍵を開け中に入ってきた。

カージスは鎖に繋がれたままサニーを守ろうと前に身を乗り出した。

男達は何も言わずただ足で鎖に繋がり抵抗の出来ないカージスを蹴飛ばし後ろに隠れる様にしていたサニーの髪を掴むと引きずるようにして連れ出した。

「やめろ！！妻に手を出すな！ペドラ！！」這うように鉄格子の前まで来ると苦しげに口から血を流しながら懇願した。

「ならば子供達の居所を貴方が教えてくださいませんか？」ペドラと呼ばれた赤銅色の髪の男は口から血を流すカージスが無表情で見つめサニーの両腕を後ろでに縛り上げた。

「さあ、奥方、教えてください。お子さん達は何処ですか？」後ろでに縛り上げられ力なく跪くサニーの首を掴み片腕1つ本でサニーの首を締め上げた。

「うぐっ……」サニーは苦しそうに吊るし上げられもがく事も出来ずただ足でじたばたと空をかいた。

「やめろー！離せ！離すんだ！！」カージスは怒りで顔を赤らめ鉄格子に向かって体をぶつけた。

「貴方が話してくださるなら離します。」ペドラは苦しみに顔を歪め喘ぐサニーを嬉しそうに見ながら言った。

「分った、話す。話すから妻の手を離してくれ！！」カージスは涙を流しながら叫んだ。

「そうですね…ならばどうぞ、話してください。貴方が真実を話しているようでしたら私もこの手を離します。」憎らしいほどゆっくりとした口調でペドラは言々とカージスの方を向いた。

「私の息子は…息子は…」カージスが話そうとするとかすかな声が聞えてペドラが掴んでいるサニーの方を向いた。

「…ま…まってえ…わ……わたしが…」首を絞められて苦しいはずのサニーが喘ぎながら訴えた。

「どうやら奥方様が話してくださるようだ。」ペドラはニヤリと笑うとサニーの手を離しどさりとその場に落とした。

「どうぞ奥方様…どうせ貴女の子ではない…貴女が全てを話してくださいなら貴女の息子は助けましょう…古の紺碧のドラゴンだ傷つけるような事はしないと誓いましょう。その代わりもう一人の子供の事を全てお話ください。」ペドラは先程まで命を奪おうとしていた相手とは思えないほど優しく語りかけた。

「本当ですか？本当の事を全て言えば私の息子は助けてくださいますか？」サニーはペドラの足元に来ると縋りつき問い直す。

「本当にあの子を助けてくださいますか？」

「約束しましょう…無事に貴女の下にお返しすると。」男は屈みこみサニーの方を優しく叩くとさあと促した。

「やめろサニー！！」カージスが叫ぶとペドラが合図して男達の1人がカージスを黙らせようと殴りかかった…

カージスが口を開けなくなるまで殴り蹴飛ばすとペドラがサニーの方を向き直り椅子に座らせ目の前にしゃがむと視線を合わせた。

「貴女が早く話してくださったらご主人もこれ以上傷つかずに済みます。自分のご家族を守るためにも子供たちの行方について教えてください。」優しく諭されサニーはチラツと動かなくなった夫の方を見て意を決したように頷き口を開いた。

それを見て取ったペドラはサニーの戒めを解いてやるとサニーの両手を優しく包み込んだ。

「貴女もお苦しかったでしょう、よその子の為に自分の家族が犠牲になり追われる立場で…」ペドラの優しい口調にサニーも涙を流し頷いた。

「あなたごめんなさい…けれど私にはこれしか方法が思いつかなかったの…愛するあの子の為に…許して…。」

サニーのそう呟く声にカージスは悔しそうにくぐもった声を零した。

サニーはペドラの手を握ると自分の方に引き寄せ抱きしめた。

「あの子達は私の息子。あなたなんかは何も教える事は無いわ！」

そう言つとサニーはペドラの腰の剣を引抜きペドラを突き飛ばすと自分の首を切つた……

サニーから血が飛び散りペドラはその鮮血から逃れるように尻餅をついた。

サニーはペドラを蔑む様に見つめ呟いた……「私は母親なのだ」と……

どうして？

「兄さん、僕達何処に向かつてるの？」クロスは少し前を足早に歩くリスターに尋ねた。

「…取り合えず今夜は山沿いに北へ向かう…もう少し、もう少し先に小さな湖があるからそこまで行こう」

クロスはジェイの家から別れ話も早々に出発し、目的地も状況の説明も無くただ黙って足早に先を歩くリスターの後を黙ってついてきた。

その湖まで行ったらリスターは一体何故早々にジェイの家を後にしたのかの説明をしてくれるのだろうか？

父と母と連絡が取れたから其処に向かっているのか？それとも――リスターの横顔は緊張していて片手は常に腰の剣の柄頭を握っている。

自分たちはドラゴン族だ…だから夕闇の中でも星と月明かりで先

が見渡せ黙々と歩みを進めることが出来る。しかし見える暗闇と言えどもクロスにはなれない道、ガサガサと茂みを揺らす物音…突然に鳴き止む虫の声などにビクリ身体を震わせ恐怖を感じていた。

ジェイの家を後にするときのジェイと村長の顔…もう会えないのだろうか？父と母と合流しても追われる身と分った以上もうあそこに戻り留まる事は許されないのだろうか？ジェイのあの顔…ただ一言彼は元気で…とだけ言った…もう会えないのだろうか？ジェイにも村長にも…皆にも…

クロスは取り留めの無い物思いをしながらも前に行く兄の後姿を見失わないように小走りで後を懸命に付いて行った。

兄には先が見えているのか何の迷いも無いようにクロスには直前になるまで見えない木の枝や蔓を器用に避けながらしかし速度を落とさず進んでいく…兄さん…何を考えているの？そんな疑問を挟む余地さえ許されない緊張の中クロスも必死に歩みを進める。

2、3時間ほど過ぎたのだろうか？夜空の星は明らかに動きクロスにジェイの家を出てから4時間は過ぎている事を知らせる。

空を見上げそして前を歩く兄を見たときちょうどクロスを遮るように手を伸ばしリスターが足を止めた。

兄の陰に隠れそつと前方を見ると眩しい光が木々の間からキラキラと闇になれた目を刺す様に光る…

「兄さん？」クロスがそつと話しかけるとリスターは唇に人差し指をあてシツと静かにするようにジェスチャーで示し足音を忍ばせ脇の茂みに隠れながら前進する…

リスターの後をそつと物音を立てずに進むと木々が開けキラキラと輝く水面が現れた。

2人は暫く無言で茂みに身を隠しながら息を殺し辺りを窺う…辺りは虫の音と水面が風にそよぐ音―そして遠くで鳴く獣の声がするのみ…

辺りに人の気配が無い事を確認するとリスターが中腰で立ち付いて来る様にクロスに合図するとそつと小さな湖の周りに茂る葦の中

に身を隠し前進する…

リスターは極力物音を立てずに葦を掻き分け進みながらクロスがちゃんとついて来ているかを時折確認しつつ前進し、葦の切れ間から岩場へと移動していく…

暫く進むと岩場は更に大きな岩がごつごつと突起し小さな小山の様な岩に挟まれる様相を呈していた…

岩と岩の隙間少し広くなった場所に来るとリスターは歩みを止め岩の隙間から湖を見ると再度口元に中指を立ててクロスに注意を促すと目を閉じ静かに周りの音に耳を澄ました——危険が無いのを悟るとやっと口を開きホッと息を漏らした。

「クロス、此処なら大丈夫だろう…荷物を降ろして荷物の中から練炭と鍋と食料を出してくれ」そう言つてリスターも荷物を降ろすと歩きながら集めた小枝と周りの石を集め簡単な煮炊きできる場所を作り始めた…

「此処は上空からは水面が光り目をくらます、そして沢山いる生き物が鳴き止んだら何か異変があったと知らせてくれるし何よりもこの岩場が周りからの視線を遮ってくれるだろう」

「食事をして少し休もう…疲れただろう？早く食事にしたら早く休める」リスターはクロスから荷を受け取りながら忙しく口と手を動かしてもう火を起していた。

クロスはリスターの様子を見てまだ話をしてもらえる雰囲気ではない事を察し兄を手伝い湖から水を汲みに行った――

煮炊きが完了し練炭のほの暗い明かりの中2人は久しぶりの食事を取り暖かい香りのいいお茶を口にした…

「クロス…今から話す事をよく聞いて欲しい…そして兄さんが話し終わるまで質問はなしだ…出来るか？」兄の子ども扱いする様子にムカツとしながらもクロスは真剣な面持ちで頷いた。

「よし、約束だ…」リスターはクロスの様子を見ると軽く微笑ん

でお茶を1口すると話し出した――

「父さんと母さんは攫われた……おおよその場所は分るが俺たち2人では其処に行く事は出来ない……わかるな？」クロスは質問をしたくなる気持ちをぐつと飲み込み頷いた。

「お前も既に知つての通り俺達一家は数少ないドラゴン族だ他のドラゴン族は国に……王に使え色々な要職についている……何の縛りもなく自由なドラゴンなどこの国には存在しない……筈だ……しかし我らは自由に見える。ドラゴン族はこの国にのみ存在する訳でもないのをお前も知っているな？」リスターは頷くクロスを一瞥した。

「南のドラゴン族は数多いそうだ……しかし色は我らとは一致しない……父が攫われた理由は分らないけれどこの国には自由なドラゴンは存在しない――それが理由に成る様に思う……何かの任務に係わっていたのか……それとも……」

「父さんからはもしかしたらこの様な事が起こるかも知れないと言われていた……父さんには何か心当たりが合ったのだろう」

「そしてその時はお前を連れて逃げるようにと…けして自分の所に向おうなどと考えない様にと…」

クロスが口を開こうとしたのを見てリスターが手を上げ遮る。

「お前の言いたい事は判る。勿論いまお前が思っているような事を私も父に言ったださ…しかし父は笑って言った…お前達が来ると足手まといだと…その意味がお前には判るか？」リスターは溜息をつきクロスを見る。しかしクロスは判らないとばかりに首を傾げる。

「私達には解らない理由で父は攫われそして私達には追うなど…私にもさっぱり理由が理解できない…しかし理解できないから父の言葉に従わなくては成らない」リスターはきっぱりと言いクロスを見つめる…

「私達では父の秘密を明かして貰うにはまだ至らない様だ…只父はトウリーとジーンに連絡を取り2人の指示に従えと…其れまではこの場所で2人離れず身を守るようにと——」そこでリスターは口を閉じお茶をすすり黙った…

クロスは兄が口を閉じてから暫く話し出すまで静かに待った…するとリスターがそっと立ち上がり夜空を見渡した

「村長が私達に連絡を取る前に2人に伝書鳩を飛ばしてくれている…幸いにも2人が訪ねて来る日まであまり離れていなかったから思うよりも早くこの知らせを受け取っている事と思う」

「それまでこの場所で待つ。理解したかクロス？」リスターは空から視線をクロスに向けるとじっと見つめながら訊ねた。

「…わかったよ兄さん…取り合えず2人が来てくれるのをここで待つんだよね？けど此処は安全なのかな？僕こんな所来た事無かったから」クロスは納得いかなげに辺りを見回す。

「ああ、ここなら安全だ。ここは父さんと2人の示し合わせた場所ではないと言う時はここに行くようにと言われていた…」

「そう…わかったよ兄さん」クロスはまだ不安そうに辺りを気にしながら頷いた。

リスターはそんなクロスをやさしく見つめると頭を撫で荷物の中

から薄手の毛布を出すとクロスにほって寄越しそれを撒いて今日は眠れと言い2人の食器を洗いに湖の縁に行ってしまった…

クロスは不安げにキョロキョロと見回し寝心地の良さそうな場所に毛布持つて移動してその場にしゃがみ込んだ…

食器を濯いで戻ったリスターが岩場の隅で丸くなっているクロスに気がつき練炭の火を消し小さな焚き火を残すと毛布をまといクロスに隣に腰を下ろした。

「クロス…怖いかな？」リスターがそつと話しかけると俯いていたクロスは兄を見上げ小さく首を振る…

「不安なんだ…何もかも…父さんと母さんは無事なのか、トウリもジーンも直ぐ来てくれるのか…これからどうなるのか…」

「…そうだな…父さんにはこんな日が来る事が解っていたんだ…何かしらの手を既に打っているだろう。今は信じて待つしかない。2人が来るまで此処で大人しく待とう。」そう言つてクロスの肩を叩き毛布に包まると目をつぶってしまった――

第23話（前書き）

サブタイトルがうまい事思い浮かばないのでいつそ番号をふる事に
してしまいました（^^）；
今更ですがお許しを・・・

第23話

「トウリー、どうした？」馬に乗り先を進むトウリーが突然立ち止まり空を見上げているので後を追っていたジーンが話しかけた。

「何か来る…」トウリーはジーンの疑問に対し短く答えると嵐の前触れの様に黒い雲に覆われた空を睨んだ・・・

「何？」ジーンはトウリーの短い返答に対しその視線の先を見上げ神経を集中した。

「・・・大丈夫だ、鳥だよ・・・あ、でもあの鳥！」そう言つて指差した先の鳥を凝視しトウリーは指を口にあてピューと長い口笛を吹いた。

「何だ??」ジーンは訳がわからないままトウリーの口笛に答え此方に向つて降下してくる白い鳥を見つめた。

鳥は2人の頭上まで急降下すると急に翼を広げバサバサと羽ばたきスピードを落としジーンの見つめる前でトウリーの差し出した腕に器用にとまった...

「こいつは何だ？」ジーンはトウリーの腕にとまり可愛らしく右足を差し出している白い鳩を指差し訊ねた。

「伝書鳩だよ、ちょっと待って」トゥリーはジーンの疑問にさらっと答え鳩の前足に括りつけられた紙を外し小さな巻物を伸ばすとその内容に見入っている。

「誰からだ？」ジーンはトゥリーの手元の小さな紙切れを覗き込もうと馬を寄せた。

「ちょっと近くてうざい」そう言っただけでトゥリーはジーンの寄せてきた頭を押し返した。

「ナンだよ、うざいって！ってか内容は何で誰からか早く言えよ！」うぐと唸りながら金色の瞳を細めてトゥリーを睨み付けた。

バサバサバサ！トゥリーの肩にとまって羽を整えていた鳩が2人の頭上に羽ばたいた。

「ああ、待って今返事を書いて君に託すから」そう言いながらトゥリーは馬の脇腹に括りつけられた積荷をゴソゴソ漁り炭になった木片を取り出すと紙切れになにやら走り書きし空に舞った鳩を優しく呼んだ。

鳩はジーンの方を警戒して中々降りてこない・・・

「ジーンお前の強面のせいで鳩が寄って来ないじゃないか！ちょっとあつちに離れててくれ！」トゥリーはジーンを睨みつけ鳩に優しく声を掛けた。

ジーンはツケと言ってブチブチ呟きながらホンの少し離れてトゥリーが鳩の足に手紙を括りつけて空に放す様子を見ていた。

「で？そろそろ話しては貰えませんか？こちらあまり気が長い方では御座いませんで」吐き捨てる様に言い自分に近付いてきたトゥリーを軽く睨んだ。

「ジーン…カージス殿が攫われた。サニー姉さんも一緒だ。あの子達があの場所で待っている」トゥリーの予期せぬ言葉にジーンはハッと言葉を失い真剣な眼差しでトゥリーを見つめた。

「…急ごう…幸い村までもう直ぐだ…お前が先に行け馬より早い」

トゥリーは馬からひらりと下りると積荷から必要な荷物を取り出し1つに纏めながらジーンに話しかけた。

「ジーン、悪いが先に行く、その場でお前を待ったほうが良いか？」ジーンはそう言うのと馬から降りトゥリーの馬の手綱を受け取った。

「…イヤ、その場に留まるより動いた方がい…そうだな…先の町のコルダナの宿で待ち合せよう。俺は必要な物を揃えて待っている。」ジーンはそう言ってトゥリーの肩を叩いた。

「解った…じゃあ2日後に町で」そう言うと2人は荒っぽく抱き

合いお互いの背中を叩いた。

「…2人を頼むぞ。」

「解っている。」

短い言葉を交すとトゥリーはジーンに背を向け走り出した。あつという間に森の木々に紛れて見えなくなったその背中を見送りジーンも馬に跨り約束の町へと駆け出した。

2人は2日目の野宿に向け煮炊きの為の小枝を拾いに直ぐ裏の森の中を静かに歩いていた――

「兄さん、もうこれ位で良いかな？」 クロスは小枝を蔓で纏めた束を5つリスターに見せながら訊ねた。

「…ああ、もう十分だろう…戻ろう」 リスターは自分の集めた束と一緒に持つとクロスの背中を押し野営地へと戻った…

2人は言葉少なめに煮炊きを始める。クロスは湖に水を汲みに行きリスターは竈を整え火打ち石で火を起す。クロスは持ってきた水を使いもうお馴染みとなった押し麦の粥を作る。

クロスは押し麦の粥を見ながら兄に聞えないようにそつと溜息を付き小枝を集める際に見つけたきのこを夕食に加えてもらおうと見せに行った。

リスターはクロスの持つてきたきのこから食べられる物を選別し器用にちぎり粥の中に入れ味を調えた。

クロスは今日はちよつと粥の味が違うのを見て少しだけ嬉しくなると岩場に干していた毛布を取つてきて2人が座る石の上にそつと掛けた。

「兄さん、トゥリーもジーンも後どれ位で来るかな？」クロスは粥を啜りながら訊ねた。

「そうだな。…どうだろう？早くて後2日か3日か。暫くは待つしかない。」リスターはクロスに優しく微笑み頭をクシャットなでた。

「そうか…早く来てくれると良いね」クロスもリスターに笑いかけでもこのお粥は飽きてきたと言って笑わせた。

「…神様どうか父さんと母さんが無事でありますように…」クロスは満月の月を見つめ祈りの言葉を呟いた…

リスターはクロスと同じ月を見上げながら顔を歪め早く眠ろうとだけ呟いてクロスに背を向けてしまった…クロスの心は乱れ目頭が熱くなるのを感じた…リスターに悟られまいと涙を急いで擦るとお休みなさいと言って背を向けて静かになった…

クロスから規則的な寝息が聞こえて出して少し経った頃リスターはそつと起き上がりクロスが気づいていない事を確認するとそつと寝床を後にした…

野営地から少し離れた湖のホトリデリスターはエルフの様に見える秀麗な顔を歪めて湖面を睨みつける…一つ大きな溜息をつくと目を瞑り両手を広げ意識の糸を広げ伸ばしていく…

リスターの意識は風に乗り鳥の様に周辺を彷徨い目的の物を探す

——そう遠くないはず…リスターは更に意識を伸ばすために更に集中する……

——いた！そう思った瞬間広範囲に伸ばした意識の糸をその一点に纏め飛ばす……

トゥリーは飛ぶように走り目的の湖を目指していた…あの日伝書を受け取ってから飲食を極力押さえ走り続けていたのだ…。

後もう少し、そう思って木々の枝を使い勢いをつけてジャンプし周辺を見渡すと目的の湖が遠くに見えた…地面に着地し走り出そうとした瞬間何かが迫ってくる気配を感じ地面に身を伏せ気配を消し息を止めた。

息を殺し集中するとその気配が見知った物である事に気が付き安堵の溜息をついた。

その気配が自分の意識に触れてくるのを感じると息を整えその青白く光る幻像に眉を顰めた。

第24話

「…リス…無事だったか…」トウリーは目の前で青く輝く幻影を見つめて深く溜息を付きガクツとその場に膝をつく…

「…トウリー…来てくれると思ってた…早かったね？」青白く輝きながら宙に浮くリスターは膝を突くトウリーを見下ろし微笑む。

「はあ…リス、当たり前だろう…しかし…なんて危険な真似を！」トウリーは立ち上がると深く溜息をつきリスターを睨み付けた。

「解っています、貴方を探す前にちゃんと周辺を探っておりますから…それに自分自身にも意識を残してあります。何かが近付けば気付くでしょう…」

「しかし…しかし危険な事は変わりあるまい、君達は今非常に危険な立場にあることを忘れてはならない。」

「…申し訳ありません。ただ貴方が来られる前に2人で話があったのもので…」青白く浮かぶりスターの顔は悲しそうに歪む…

「…解っているよ、残念だが此方も詳しい情報は手にしていない、村長からの伝書を受け取ってそのまま此方に向ったものだから…」

「そうですね…これからの事はどうしますか？ジーンは？彼は一緒ではなかったのですか？」

「向う先はカージス殿と既に取り決めをしてある…それを今此処

で言うのは懸命ではない。ジーンは落ち合う場所を決めていて其処で準備を整えて待っているよ…さあもう意識を戻しなさい。此処で体力を使うのは正しくないね。」トゥリーは周囲を見回し早口で話す。リスターを促した。

「解りました。後…あとどれ位で来られますか？クロスを起して待っています」リスターも周囲を見回すと口調が早口になった…

「後…半時ほど…急ぐよ、直ぐに動ける準備をして待っていてくれ」

リスターとトゥリーは頷き合つとトゥリーは走り出し、リスターは湖の畔に佇む自身へと意識を戻した――

リスターはホッと溜息をつくと素早く辺りを見回しそつとクロスの眠る場所へと戻っていった…

「クロス…クロス。起きて、トゥリーが来る」リスターはそつとクロスの肩をゆすり起こすと自分の毛布を畳み出発の準備を始めた。

「兄さん？…もう行くの？」クロスはまだ瞳を擦りながらボーッと兄が忙しく動くのを見つめた。

「ああ、トゥリーがもう直ぐ此処に来る。来たら直ぐに此処を出られるように荷物を纏めて痕跡を消さないと…」リスターはクロスの毛布も畳みながら早く準備するように促した。

クロスはハツとして急いでリスターの手伝いをして言われた通り竈の石をバラバラにして不自然にならない様に散らしたりと忙しく動き出した…

全ての準備が整い背に背負って岩に腰掛けていると遠くでピピーと鳥の鳴き声が聞えて2人は背筋に力が入った。

「…兄さん…あれは…」クロスがはつとしてリスターを振り返るとリスターも鳴き声のした方を見つめてああと頷いた。

「トゥリーが来た、行くぞ」リスターはクロスを促しそつと物音を立てない様に闇の中の森へと向って行った…

「ピピー…」再度鳥の鳴くような口笛が先方よりはっきりと聞こえ2人は足を速めた。

暫く2人が音を潜め歩いて行くと前方の大きな榎の木にトゥリーが静かに佇んでいるのが見えた。

クロスはトゥリーの姿を見るなり直ぐに駆けて行きトゥリーに抱きついた。

「トゥリー…父さんが、母さんが…」クロスはきつくトゥリーを抱きしめ涙を流した…

「クロス…解っているよ」そう言って自分の胸で涙を流すクロスをぎゅっと抱きしめると後ろに佇むリスターと視線で頷き合う。

暫くはクロスが落ち着くまで2人は静かに待った…

…クロスの嗚咽が落ち着くとトゥリーは優しくクロスの頭を撫でてやると落ち着いたかい？と優しく訊ねた。

「…ごめんなさい、トウリー…僕…」クロスは乱暴に流れ出た涙を拭うとキツとトウリーを見つめた。

「僕、絶対に父さんと母さんを助け出したい…」両の手を握り締めクロスは決意をこめた瞳をトウリーにぶつける。

「…ああ、解っているさ…けれどまずは此处から移動しなきゃ、ジーンが先の村で待っている…急ごう」

トウリーに促されクロスは俯き再度自分の腕で涙の痕を強く拭うと弱弱しく頷きリスターに背を押され先に行くトウリーの後を付いていった…

翌日の昼前に3人はジーンと落ち合う予定の村の入り口に到着した…

「…着いたな…此处の旅籠にジーンが旅の準備をして待っている…ジーンに落ち合う前にやって置かなければならない事があるな」そう言くとトウリーは2人をジロジロと上から下まで見回した。

リスターは解っているのかトウリーの視線を受け止めると小さく頷き腰に挿した短剣を抜くと自分の一つに括った長い髪を掴み一思いにバツサリと切り捨てた。

リスターの突然の行動に呆気にとられるクロスの目の前で金色に輝く長くサラサラと美しかった兄の髪はジグザグのザンバラ頭になつていた。

リスターは何の未練も内容で目に見える範囲を短剣で切りそろえていった。「後ろはやってあげよう」そう言うのとウリーがリスターから短剣を預かると器用にリスターの髪型を少し長めのボブに切り揃えていった。

髪型が綺麗に整うと場所を移し近くの小川で途中に拾い集めた怪しい葉っぱを数枚すり潰しリスターの髪に丁寧に刷り込んで行つた。

「…ひよつとして髪の色を染めているの？」クロスは作業に精をだす2人に恐る恐る尋ねた。

「…ああ、金髪は目立つからこの葉っぱを擦り付けると綺麗なダークブラウンに染まる。瞳の色は2人ともハシバミ色に変えるんだ、それなら少しの魔力で済むから集中力も必要ないだろ？」トウリーは作業の手を休める事無く返事をした。

「じゃあトウリーは？ジーンはどうするのさ？」クロスはリスターの作業を終え今度はクロスの分の葉をすり潰しているトウリーをまじまじと見ながら聞いた。

「私達かい？」トウリーはクロスを見て微笑むとサッと髪を束ねる紐を解き手で髪を梳く仕草をすると突然長かった髪が消え少し癖のあるカールしたブラウンに変わり身なりは青年将校の様で、瞳も何処にでもあるようなライトブラウンに変わっていた。

「どうだい？」そう聞くそのそぶりがまるで自身が将校である事が自慢でしようがないって言うっている風でクロスは噴出してしまった。

「いいね、とてもエルフのトゥリーには見えないよ」トゥリーがワザとらしく気取ったポーズを取るのをクロスは苦しそうに腹を抱えて笑ってみていた。

「よし、では次はクロスだよ」そう言うのと慌てて逃げ出そうとするクロスの頭をムンズと掴みすり潰した葉っぱを無理やり頭に塗りたくった。

「くっさ」よくリスは黙って塗らせたね「クロスが鼻をつまみながら言う和小川で髪を洗ってすっかり別人のような姿になったリスターが笑いながら髪を拭っていた。

「少しの間だけだよ、さて…トゥリー、君が鼻高青年将校なら僕達の役所はさしずめ小間使いつて所かい？」リスターがブルリと身を震わせるとさっきまで濡れていた髪が乾いていた。

「まあそんな所かな？私とジーンが将校で君たちが見習い兼小間使いつて感じでどうだろう？」クロスの髪を染め終わると洗っておいでと頭を叩き手に付いた葉っぱを一睨みしてフツと息を吹きかけ消してしまった。

「了解しましたトゥリー様他に御用が御座いませんでしたら荷物を纏め直ぐにでもジーン様の所に合流した方が良いのではないでし

ようか？」リスターは自分に割り振られた役所になりきり丁寧に頭を下げた。

「うん、良いよそれで。あの子が戻り次第向おうか、リス、あの子は一人で髪も乾かせないから手伝っておやり」そう言つと何の興味も無くなつたかのように自分の身なりを気にしだした。

リスターはクツクと笑いを堪えながら「御意」と言つとクロスの様子を見に小川へ向つた…

リスターの後姿を見るとトゥリーは荷物から一枚のメモを取るとピー——と高い口笛を吹いた。

すると1羽の鷹が上空より舞い降りトゥリーの肩にとまった。

「悪いね、襲われるかも知れないから君にしか頼めなかったんだよ」そう言つて易しく鷹の喉元を撫でてやるとメモを足に括りつけた。

「気をつけて、きっと奴ら上空からも探してるから」翼を撫でてやると鷹は甘えるように掌に頭を擦り付けると勢い良く上空を目指して羽ばたいて行つた…

「頼むよ、彼女に無事伝えてくれ…」そう言つて荷物を抱えなおすと中々戻つてこない2人を探しに小川へと向つた…

第25話

3人は元の人成らざる者から人へと大きく変った姿でジーンの待つ村へと入っていった…

村人は青年将校が珍しいのか遠巻きにチロチロと3人の姿を窺った。リスターは従順な見習い兵士を装いながらも内心穏やかではなかった村人の視線が気になるのだ…

リスターはふんぞり返って3歩前を歩くトゥリーにそつと話しかける…

「若様、どうやら村人達は若様のお姿がもの珍しらしく羨望の視線を送ってやまない様子ですね」リスターは主人の機嫌を取る従者のようだ…

「なあに、見られたって減るもんじゃない。好きに見せてやんなさい」トゥリーは鼻歌を歌うようにさらっと言うと本当に口笛を吹きながらフラフラと歩いていく。

リスターはその言葉で安心する事もできず後ろをビクビクと若干挙動不審に歩くクロスを見てそつと溜息をついた…

3人がジーンとの約束の旅籠に到着した。トゥリーがジーンは何処だろうと見回すと店内は夕暮れ近いためか賑わいを見せ始めていた。

トゥリーは手近な開いているテーブルに乱暴に腰掛けるとリスターに座るよう身振りで示しクロスには麦芽酒と暖かいスープそしてこんがり焼いたベーコンを注文して来いと乱暴に銀貨を2、3枚投げてよこした。

クロスは投げられた銀貨を慌ててキャッチするとぺこりとお辞儀して高慢な態度のトゥリーに背を向けまるで従者がやるようにわざとなのか本心なのかブツブツと悪態をつきながら店主の元へ注文をしに行った。

クロスが居なくなるとトゥリーはリスターにそつと身を屈め唇を動かさずジーンとはこの旅籠で待ち合わせているから直に現れるだろうと呟いた。リスターは小さく頷くとカウンターで注文をしている容姿の変ったクロスを心配そうに見つめた。

暫くすると店主から渡された麦芽酒の3つのグラスを悪戦苦闘して持とうとしているクロスに黒髪の短髪の青年が話しかけているのが見えてリスターははっとして立ち上がるうとした…

椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がるうと手を突くとトゥリーがその腕をサツと握り殺気立つリスターに笑顔で1つ頷いた。はっとしたリスターはクロスのグラスと一緒に持ってやって来る黒髪の青年を落ち着いて見て見た。

満面の笑みのクロスと共にやってきたのは白髪を綺麗に黒く染め金色の瞳を黒く変えたジーンであつた…

「やあ、遅かったなトゥー随分待ったぞ？」黒髪黒目のジーンは笑顔で旧友に会ったかのごとくトゥリーに手を伸ばし立ち上がらせると肩を激しく叩いた。

「おお、ジッー待たせ済まなかつたな。馬を盗まれて難儀していたんだ」トゥリーは叩かれた肩が痛かつたのかちよつとさすりながら笑顔で握った手に力をこめて空々しい挨拶を返した。

「そうか、それは難儀だつたな」手が痺れたのか握り方を握手から組み合うように変えて更に力を込め此方も笑顔で返した。

その2人の空気を察したのかリスターがサツと立ち上がりジーン

に椅子を引き席を勧めるとサツと麦芽酒を渡し笑顔で頷いた。

「さあ、再会を祝して乾杯しようじゃないか」歌うようにトゥリ
ーが言うとりスターとジーンがグラスを持ち乾杯した。クロスはグ
ラスを持つとしたがリスターにサツと取られ睨まれてしまうと身
を締め渡された水を大人しく飲んだ。

暫く4人？2人はでつち上げ話にまるで真実かのように花を咲か
せ周囲の視線を感じなくなると酔っ払ったかのごとくジーンを取っ
た部屋へと仲良く引き上げていった…

「意外と早かったじゃないか？」部屋に入り廊下に誰も居ない事
を確認するとジーンが部屋の中央の椅子に腰掛けて怪訝そうな表情
を向けた。

「ああ、その気になれば狼よりも早く走れる」ニヤツとジーンに
笑いかけて椅子を暖炉の傍にもって行くとそこに腰掛けてリスター
とクロスにも近くに座るように身振りで示した。

「それより準備は？明日にでももう此処を立ちたい」トゥリーが
自分の髪を指で梳くと水が流れるようにいつのもトゥリーの姿に戻
っていた。

「お前、人間に化けたつもりかも知れんが全然カモフラージュに

なっていないぞ！目立ちすぎだお前達！特にお前で次はリス」少し語気を荒げてジーンが指を挿し指摘すると名指しされたリスターがビツクリした表情になった。

「え！？私ですか？」リスターは短くなった髪に手をやり色を見ようとして長さが足りない事を思い出し不思議そうに身なりを見回した。

「まあね、容姿まで変えるのはいかな物かと思って、リスとクロスには瞳と髪の色以外手は加えていないから」しれつと言うとその話には興味無いとばかりにそっぽを向いた。

「ほーおう。見目麗しのエルフ様はご自分の容姿を弄りたくは無かったと…今回は良いが次からは要らぬ注目を浴びないようその整った顔にも手を加えて頂きますですからね！」フンと鼻息荒く変な敬語で言うところジーンはへーへーと適当な返事をするトゥリーに一瞥をくれてクロスを手招きした。

ジーンに呼ばれて傍まで行くと突然強く抱きしめられクロスはビツクリした。

「…大変だったな…心配してたんだ…ずっとお前達に何か遭ったんじゃないかって…無事でよかった…身体も心も…」ジーンはクロスを強く抱きしめながら背中をさすってやるとリスターの方をじっと見つめ強く頷いた。

「ジーン…ありがとう…」小さく鼻を嚙りながらクロスが言うとジーンは身体を離しクロスの頭をクシャツと撫でながら破顔した。

「お前幾つになっても泣き虫だなあ、まあ後は任せておけ俺達が

「いつだってついている」

「感謝します…父との約束を守って頂いて…」リスターがトゥリーとジーンに向って小さく頭を下げそつと言った…

礼を言われた2人は顔を見合わせ深刻な顔を見るとジーンが小さく当たり前だと呟いた…

「さて、話はわかってる…明日は早い。リスターとクロスの部屋は隣だ、湯を使って早く寝ろ」ジーンはもう1度クロスの頭を撫でると笑顔で言った…

暫くするとリスターとクロスは大人しく指示に従い隣の部屋に行き寝支度をはじめた。

コンコン…時計が日をまたぐ少し前リスターがトゥリーとジーンの部屋の扉を叩いた。

「リス、クロスはもう眠ったのか？」ジーンが声を潜めて訊ねる。

「ああ、寝息を確認してから来たよ……」リスターが言うとジーンはそっと扉を広げて中に招き入れた。

「リス、待っていたよ……ジーンとはあらかじめの予定を話し合っていたんだが君との話をしない事には前にも進めなくてね……」火の弱くなった暖炉の前にはテーブルと椅子に長い足を組んで座るトゥリーの姿があつた……

「遅くなって済みません、中々クロスが寝付かなかつたもので……御2人に報告しなくてはならない事があります。これからの事を……」リスターは俯き悲しげな表情で呟く……

「……掛けなさい……私達も話さなければならぬ事があります……」

トゥリーの優しい声に促されリスターは椅子に腰掛ける……

「これから何処へ向かう予定ですか？父からは2人に任せてあると伝えられています」

「ああ……まずは安全な場所にお前達を連れて行かなくてはならない……クロスは怒るだろうが……」

「それでカージス殿は犯人については目星は？」

「はい。父は近々襲撃があるやもと思っていたようです…しかしこんなに早く来るとは……………」

「…で……………」

第25話（後書き）

最後はカメラがフェードアウトしていく感じをお願いします。

カメラは暖炉の前で腰掛ける3人から徐々に遠ざかりドアが閉まります。

そして次の章へ…

つたない文章でごめんなさい。何方かいい表現方法があったら教えてください（泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4433s/>

その瞳の色

2011年10月10日01時43分発行